KG336-H12
1200404206172

門人歌和

窪田空穂著

萩原星文館

窪田空穗著

和歌入門

東京　荻原星文館

和歌入門

目次

第一篇　歌の作りやう

第一章　歌の概念とその精神……一
一　歌とは何ういふものか……一
二　歌の精神……三
第二章　歌の傳統とその發達……六
一　歌の傳統……六
二　歌の變遷……七
第三章　作歌の大綱……一四
一　歌道とは何ぞ……一四

KG336-H12

I 種
W

二　作歌の歡喜……一七
三　作歌の實際……二一
四　歌道の極所……二五
五　實地の修行……二七
第四章　歌の形式……二九
一　言葉の明瞭……二九
二　言葉の雅俗……三一
三　五七と七五……三三
四　一首の姿……三六
第五章　歌の趣向……三九
一　感動を與へた一切の事物……三九
二　如何なる材料より初むべきか……四二
三　趣向を立てる上の階段……四四

四　單純にと志せ……四七
五　詠み難い趣向……四九
第六章　歌の調子……五二
一　調子は歌の生命……五二
二　調子は精神の現はれ……五四
三　調子は緊張せる心より出づ……五八
第七章　秀歌の解剖……六二
一　古名家の踏んだ道程……六二
二　大隈言道の自然の歌……六六
三　橘曙覽の抒情の歌……七七
第二篇　作歌上の諸問題
一　大隈言道が添削のあと……八六

二　統一した味ひといふ事に就て……九二
三　歌に於ける主觀の現はし方……九九
四　戀歌の詠み難いといふ人に……一〇
五　歌の立脚地……一八
六　散文俳句と歌との立場の相違……二一
七　「古今集」を排する所以……二七
八　田安宗武の歌論……三一
九　秀歌を生み得る心境……三五
十　拙劣歌と秀歌との區別……三九
十一　物の觀方の兩面……四〇
十二　自然を詠める歌……四二

第三篇　作歌問答

一　歌は作つてみる値のあるものか……一六六
二　作歌の上の自信がもてないが、何うすればもてるか……一七〇
三　作らうと思ひつつ歌が作れないが、何ういふ譯か。何うすれば作れるか……一七九
四　歌は才のものか、努力のものか……一九〇
五　寫生といふ事の本當の意義は何所にあるか……一九四
六　早く上達するには如何にすべきか……二一一
七　歌の本當の心持は何ういふものか……二一四
八　誤つた寫生の歌とは何ういふ歌か……二二三
九　題詠はしては惡いものか……二三二
十　作歌には呼吸があるか……二三八
十一　現代作家の誰の歌がいいか……二四一
十二　抒情歌と叙景歌とは何ういふ相違があるか……二四八

和歌入門

窪田空穂

第一篇　歌の作りやう

第一章　歌の概念とその精神

一、歌とは何ういふものか

歌とは何ういふものか、一と口にいへといふと、歌とは、歌といふ表現慾を、歌といふ形式で遂げたものである。ただそれだけのもので、それ以外の何物でもない。

少しばかり註釋を加へると、我々は本能として表現慾を持つてゐる。話し相手がないと暮してゆけないといふ心を持つてゐる。國家では體刑として禁錮といふことをしてゐるが、これは

話し相手を奪ふといふことである。言ひかへると、本能にそむいた狀態に置くことによつて苦しませるといふことである。表現慾といふことの如何に根深い本能であるかといふことは多言を要さないことであらう。近代歌界の巨人である香川景樹は、この點についてかういつてゐる。人間の本能の重なるものは、第一に飲食、第二に男女、第三に言語である。歌はこの言語の中の粹なるものであるといつてゐる。江戸時代の歌人は、歌は文藝の中の最も尊い地位にあるものだと信じてゐたのであるから、まさしく、かう思つてゐたことであらう。歌が言語の中の最も粹なるものであるか何うかは暫くおいて、表現慾卽ち言語といふものはいふ通り飲食、男女についでの大きな本能だとはいへやう。

本能は遂げればたのしく、遂げなければ苦しいものである。本能としての表現慾の遂げ方は幾通りもある。言語を主として、音樂、繪畫、彫刻など、それ〴〵その遂げ方である。言語から出た文字を通しての遂げ方は、言語についでの重もなる遂げ方である。言語としての遂げ方は散文と詩とで、今いふ歌はこの詩の一部門である。

歌は我々の本能として持つてゐる表現慾を遂げるもの、歌といふ形式で遂げるものだといふことが歌の大體である。改めていふ程のことではないが、しかし此點はしつかりときめておかないと、簡單であるべき作歌の話が面倒になつて來るから、特に云つておく。

二、歌の精神

次に歌の精神であるが、以上を、歌といふものを外部から眺めての話とし、一歩踏み入つて今實際に作歌をしようとするには、何ういふ心を持つて爲すべきかといふことを歌の精神だとしてお話をすると、これも簡單である。歌は歌の形式に從つて作るより外はない。歌の歌たるところはその形式にある。形式は言ふまでもなく、五七五七七の三十一音である。この形式に從ふ以上、幾何のことも言はれない。この幾何のこともいはれないといふことゝ、歌の精神といふことゝは密接な關係を持つてゐる。同じく詩といつても、形式に制限のない、謂ふところの自由詩のやうなものだと、幾ら長いことでも云へる。やや複雜した感想もいへる。又、やや複雜した事柄もいへる。しかし歌ではそれはできない。この極めて單純なことをいふ、これが、歌の精神だといへばいへる。

一方には複雜な詩があるのに、これは單純より外には出られないといふと、まさしく不自由な、劣つたものに見える。しかし實際から見ると、その不自由に見え劣つたものに見えるの

は、單に外形から見ての上のことで、これを內容から見ると、少しも不自由はなく、又劣つてもゐない。否、その不自由な劣つたと見えるところを通して、かの自由にして優つてゐるが如き自由詩のなしえないことをなしえて、歌としての特色を發揮してゐるのである。言ひかへると、歌はその單純なところが尊いのである。

單純なるが故に尊いとは如何なる意味であるか。これは論より事實によつて證明した方が早い。歌は前にもいつたやうに我々の表現慾を遂げる一つの形式であるが、一體我々の表現したいと思ふことは、表現することによつてたのしさを感じるやうなことは、極めて心おきのない人が傍らにゐたならば、言葉として云つて見たいと思ふやうなことは、長い纏まつたことであらうか、短い斷片的なことであらうか、更にいへば、實感を思想化した感想、又は按排工夫して纏めた一つの事柄の幻影であらうか、又は人間として實生活の上で絕えず感じさせられる喜怒哀樂そのものであらうか。これは明らかに後者であらう。我々の生活にも、稀れには前者のやうなものもあるが、大體としては後者で、絕えず喜怒哀樂を感じさせられてゐる。これを事柄として見ると單純な、又斷片的な、云はばはかないものであるが、そのはかないことの連續が、實際は我々の生活の內容をなしてゐる。そして表現慾を起して來ることもこの種のことな

のである。

話は最初の歌の精神に戻ります。歌は我々の實生活の上で持たざるを得ない單純な喜怒哀樂の情を何等の思慮分別も加へず、單純に表現するものである。更にいへば、我々の生活の生地(きぢ)そのままを表現するものである。これが歌の精神である。

第二章　歌の傳統とその發達

一、歌の傳統

歌の傳統とその發達といふことは、言ひかへると作歌史といふことになる。歌はいふまでもなく我國の文藝の初めをなしたもので、そして不思議にも絶えることなく續いて來たものである。これに就いていふといふことは、我が國文學史の何割かをいふべきことになる。しかしそれは聞かうとされるところでもない。又云ひうることでもない。ここでは作歌の上に直接に參考となることだけを、項目的に答へることにする。

第一は、短歌の形式について云ふ。三十一音といふ形式は決して天啓的に他から與へられたものではなく、幾多の試みをした果てに優秀のものとして殘つたもので、即ち我々の祖先が擇んでえたものだといふことである。短歌の前には片歌（かたうた）といふ五七七の形式のものがあつた。又多分はこの片歌で問答をしたところから思ひ附いたと思はれる旋頭歌（せどうか）といふものがある。五七七、五七七で一首となる歌である。一方には長歌があつた。これは五七を幾らでも續けて行く形式です。後になると結句に別に七を加へて、五七七とすることを發見した。重く結びたいといふ必要からである。此れらの形式のあつた前後に、短歌即ち五七を二度繰返し、それに七を添へて、重く結ぶ形式が發見された。この形式は他のものに較べると不思議なほど工合のいいものであるところから優勝者の位置に立つた。片歌は亡び、旋頭歌は衰へ、長歌も續いて衰へたあとに、短歌だけはひとり盛んに、歌といへば直ちに三十一音の短歌のやうになつた。後にはこの短歌を上の句、下の句と分けて二人で作つたところから、連歌となり、更に俳諧となり、俳句となつた。又、七七七五、二十六音の謠ひものも同じく短歌から出た。一方には長歌の五七が七五となり、それを土臺として自由に續けてゆく謠ひものも出て來たが、やはり短歌の形式が參考となつて取り入れられてゐることと思はれる。以上が形式から觀た傳統と發達とである。

二、歌の變遷

次ぎに歌その物は、大體何んな經路を踏んで今日に及んでゐるかといふと、上代から現代まで、歌は四つの時期を經てゐるといへやう。第一は「萬葉集」を中心とする時代、即ち上代か

ら京都へ遷都になるまで。第二は「古今集」から「新古今集」へ進み、今度はそれを模倣ばかりした時代で、京都から、鎌倉、室町時代まで。第三は江戸時代、第四は、明治から昭和の今日までといふことになる。

この四つの時代を、作歌の精神の上から觀ると、萬葉集時代は、一と口にいふと實感卽ち生活上の體驗を表現しようとした時代だといへる。もとよりその人々によつてちがふことで一樣にはいへないが、大體としてはさう云へる。そしてその意味に於て、歌の上で一つの黃金時代を現出させてゐる。今からは千年以上の昔で、その點では世界に對して誇りうることである。多少の注意を添へると、實感とはいつても、立派な精神的文化を持つた人のそれで、原始的とか素朴とかいふ言葉を冠らすべきものでないといふことである。相應に深い、力强い思想を持つてゐる。しかしその思想が主とはならず、從となつて實感の中に融け入つてゐるといふことである。此點は記憶しておいていただかねばならない。又この時代は、短歌よりも長歌に重きを置いた時代である。

古今集から新古今集時代は、萬葉集時代とは明らかにちがつてゐる。もとより歌のことであるから、實感を離れるわけにはゆかない。土臺は實感には相違ないが、これを表現する時にいちゞるしく工夫が加はつて來て、實感と工夫と融け合つたものとなつてゐる。觀方によつては思想的になつてゐるといへる。何故にそんな風になつたかといふと、第一は作者が智的になると共に、讀者もまた智的になつて來て、さうした歌でないと双方とも興味を感じなくなつたからである。第二には、作者自身の表現慾を遂げようとする心で作るよりも、讀者の喝采を博さうといふことを主として作るやうになつたことである。その結果、實感の多少よりも、形の整不整を主にするやうになつて來た。形としては優美な、纖細な、行き屆いた、一と口にいふと萬人向きのものとなつたが、實感としてはおのづから稀薄なものとなつた。これは當時流行した歌合(うたあはせ)の影響が可なりまであらうと思ふ。歌を競爭させ、勝を爭ふことになると、勢ひ疵のない、手際のいいものを作らざるを得ないからである。又歌合は、同じ種類の歌でないと競爭させにくいところから題をきめて、同じ題を作り合ふことになつた。これが謂はゆる題詠の起りで、題詠となると、勢ひ上の傾向を助長させることになる。古今集より新古今集へといふことは、上にいつたことが、次第にはげしくなつて來たといふことである。卽ち作爲の少なかつたものが多くなり、單純なものが複雜になつたといふことである。その間でも、眞を欲し、新をもとめる心は相應に働いてゐますが、云ふが如き狀態の中でしてゐることであるから、結果と

してははかゞしいことはできずにしまつた。その模倣をした鎌倉室町時代は云ふにも足りない。連歌が起り俳諧の起つたのは、歌の行き詰つたのを打破して他に生面を拓いたといふことである。

江戸時代は、歌の上では實際をおもんじた時代である。實際的な武家が政權を握つて、新たに文化を生み出さうとしたのであるから、歌もおのづから實際を重んじたものとなつたのである。歌の上で實際を重んじて來ると、勢ひ古今集以來の歌を邪道なりとして萬葉集へ復歸することとなる。これを第一に唱へ且つ行つたのは賀茂眞淵である。眞淵の後に香川景樹が出て、その主張を非なりとして、眞淵の萬葉集を宗とするのに對して古今集を宗とした。しかし古今集に對する見解は、從來のそれと異なり、一に個性の發露した歌だとしてゐるので、根本の精神の上では眞淵とちがつてゐなかつたといへる。この二人によつて江戸時代の歌は革新された。今二人の歌論を見ると、どちらもその眞を重んじてゐるところ、それも個性を通したもので、いはゆる個性を尊んでゐるところなど、今日から見ても新味を失はないものである。もうこの二人の末流にその主張を歌であらはしうる程の人があつたならば、歌は明治の革新をも待たなかつたらうと思はれるが、あひにくにもそれ程の人がなく、加へて維新の社會的激變は、おの

づから歌を閑却させてしまつた。この衰へようとした歌を維持したのは、第一には明治大帝の御奬勵であつたと思はれる。

現代の歌は、大體から見て二派ある。一つは、江戸時代を繼承してゐるもので、舊派と呼ばれてゐる。作者の數は次第に減りつつあると思はれるが、それでも相應に多いやうである。一つは新しく起つたもので、新派と呼ばれてゐる。しかしこの舊派新派の呼び方も次第に減つて來て、今では殆ど歌といへば直ちに新派を意味してゐるやうに見える。

この新派の代表者は與謝野寛氏と正岡子規である。その新派といふ名はもとより他から附けられたものであるが、附けられるにはそれに相當した實があつた。舊派の歌は江戸時代に一たび新しくされたものではあるが、猶傳統の力に囚へられてゐるところがある。卽ち約束によつて作つてゐて、心によつて作つてゐない趣がある。譬へていへば、歌といふものを偶像として作者はそれに仕へてゐるかの趣がある。歌にはさうした約束、偶像のあるはずがない。直ちに我が心を、歌といふ形式で表現したものが眞正の歌だといふのである。與謝野寛氏はそこを、自我の詩といふ語であらはしてゐる。正岡子規は寫生といふ語であらはしてゐる。この大本に至つてはどちらも違つてゐるとは見えません。ちがつてゐるところは、與謝野寛氏は情感の解

放といふところに力點を置いて、情感をほしいまゝに詠まうとした。情感をほしいままにしようとする心は、新に對するあこがれとなつた。歌の上での新は、ヨーロッパの詩を我が歌の上に取り入れることである。氏は此途をとつたのである。正岡子規は、眞をもとめるところに力點を置いた。眞とは寫生である。子規は、それを既に俳句の上で遂げてゐたので、同じものを歌の上でも遂げようとしたのである。歌の上で古來それをしてゐるのは萬葉集系統の歌人である。その意味で子規は萬葉集を宗とした。

文藝の上に於ける歐化主義は、小説に、詩に、劇にと、各方面を次第に化して行つて、そして今日も猶その力を續けてゐる。歌も同じく歐化主義とはいへ、我國にも古くからあつた現實尊重の寫生主義の方へその席を譲つてゐるといふのが現在の狀態である。

以上は極めて概括的な云ひ方で、殊に現在のことをいふとしては説明が足りな過ぎるが、大體としてはかうしたことだらうと思はれる。

以上四期の變遷を、作歌の參考といふことを主として言ひ換へると、次ぎのやうにも云へる。

四期を假りに一人の人に譬へると、第一期萬葉集時代は、青年時代、初めて外國文化の刺戟

をうけて、それを取り入れようとするよりも、負けじ魂を振ひ起したものにも似てゐる。負けじ魂を出して見ると、その身にも、自身意識してゐなかつた力が潜在してゐて、それを出して見ると案外にも大きなものだつたやうなところがある。第二期の古今集の系統を引いた長い時代は、外來の文化に壓倒されて、自信を失つてしまつて、そして靜かにそれを取り入れようとのみしてゐた研究時代といふ趣がある。第三期の江戸時代は、自己に醒覺めて來て、從來尊重してゐた外來文化を振りすてて、自己を信じて事をしようとする中年時代に似てゐる。第四期の明治大正の今日は、大本に於ては江戸時代とはちがつてはゐないが、當初の精神を忘れて眠りかけて來たところへ、新たに大きな刺戟を受けて眼を覺まして、その刺戟からえた力をも加へて當初の精神へ立ち戻つたといふ趣がある。そしてそれが今日の歌の狀態なのである。

第二章　作歌の大綱

一、歌道とは何ぞ

トルストイの小説の中に「どんなに小さう見える物でも、一旦精神を打ち込んで觀ると、その物が限りなく大きなものに變つて行つて、そこに一つの世界を發見して來るものである」といふ意味の言葉がある。今歌を觀ても、歌といふものは實際さうした趣を持つたものだと思はれる。

これを外面的に觀ると、歌ぐらゐ單純に見えるものはさう多くは無い。高が三十一語を連ねた短い形式のものである。そして內容から觀ても、詠まうとさへ思へば、多少の文字のある者でさへあれば、誰れでも、輕い心をもつて詠み得るもののやうに感じられる。

しかし、一歩踏ん込んで內面的に觀ると、歌は精神の現はれである。隨つていい歌を詠まうとすれば、いい精神を持つて居なければならない。いい精神を持つ、これは人間生涯の大事であつて、たやすく口にさへも出來ない程の事である。我々の日々の努力も、畢竟はその一事に

懸つてゐる程の事である。

これを思ふと、二千年といふ長い間を殆ど斷絕させる事なしに、然るべき立派な素質を持つた殆ど限りないまでの多くの人が、その生涯を、歌を詠むといふ一事の爲に費して來た精神が汲める、彼等は單に歌を詠まうとしたのでは無い、いい歌を詠まうとしたのである。そしていい歌を詠むには、先づいい精神を持たなくてはならないので、それを持たうとして努力したのである。卽ち歌を詠むといふ形に於て、生涯の大事を果たさうとしたのである。

この心から彼等は「歌神」を造り出し「歌道（かだう）」といふ言葉を造り出してゐる。「歌道」とは何ぞといふ事は、これを歷史的に云はうとすれば相應に小面倒な事であらう。しかしこの言葉を造り出し、又襲ひ用ひて來た人たちの精神を汲んで、その內容だけを思ふと、さして面倒な事ではない。

「歌道」とは、歌を詠む事によつて、詠む人の精神を高めて行く道である。

歌は精神の現はれであるから、いい歌はいい精神を持つた上でなければ詠めるものではないと前に云つた。しかし、これは理窟であつて「歌道」ではない。「歌道」は言葉通りに一つの「道」である。それは他の「道」と同じやうにその「道」を行ふ事が直ちにその人の精神の向上を意

味するものである。即ち、歌を詠むといふ事だけを目的にして、一意に歌を詠み、そしてその上での歡びを味ふことが、他面から觀ると、同時にその人の精神の向上になつて行くと云ふ事である。更に云へば、歌を詠む事によつて精神が發揮し、精神が發揮する事によつて歌が詠めるといふやうに、互に原因となり、結果となつて、一つの道を進んで行き、結局、いい精神を持ち得ていい歌を詠むといふ所にをさまる事である。

俳人芭蕉は、極めて徹底した言葉をもつて、その俳諧道を說いてゐる。或る人が芭蕉に、俳諧は何の爲にするものかと尋ねると、彼れは俳諧は風雅の爲にするものだと答へた。更にその人が、風雅は何の爲にするのだと尋ねると、彼は、風雅は俳諧の爲にするのだと答へた。芭蕉の風雅といふ言葉は說明を要する言葉であるが、假りにこれを前に云つた精神の發揮といふ言葉に置き代へると、俳諧道の精神も歌道の精神と同一のものであると云ひ得られる。

又佛者は方便即究竟と云つてゐる。この究竟といふ言葉は、今いふ目的といふ事と同じ意味だといふ、言ひ換へると、方便は直ちに目的で、一見異るやうに見えるこの二つのものは同一なものだといふのである。この言葉の深い意味は知らないが、念佛修行をするといふことは、佛道の上の方便であるが、同時に目的でもあるといふ意味だとすれば、この言葉は直ちに「歌

道」の上にも適用することができる。前にいつた「歌道」の精神もこれに外ならないのである。

作歌に志すものは、作歌の大綱として、方針として、この歌道の精神を第一に腹に入れて置かなければならない。

二、作歌の歡喜

作歌は精神を高める道であると前回に云つたが、それだけでは抽象的で意を盡さない憾みがあるから、ここでは一歩進めて、如何なる狀態の下に於てさういふ事が行はれるかを云ふ事にする。

第一に云ふべき事は、我々の精神は平生にあつては、本來有してゐる所の精神力を全部あらはしてゐる物ではないといふ事である。何故にさういふ狀態になつてゐるかといふと、我々の精神はとにかく外物の爲に動かされ、捉へられて、或は曇らせられ、或は亂され、或は弱いものにされてゐる。そしてかうした狀態を連續させてゐるところから寧ろ習慣になつてしまつて、それが本來の狀態であるかのやうな誤解さへしてゐる。

併しかうした狀態は、時として破れて、我々の精神は、その本來有してゐる精神力を發揮して來ることがある。卽ち疊つたものは明らかに、亂れてゐたものは統一し、弱くなつて居たものは强くなつて來て、平生とは全く別なやうな働きの出來るやうになるのである。

どういふ場合にさうした變化が起るかといふと、我々の精神が緊張し、一つの事に向つて集中して來た場合にさうなるのである。

この事は多くの說明をするまでもなく、誰しも何等かの場合に經驗して知つてゐることである。例へば火事の時には、平生の倍も三倍もの臂力が出るものである。もともと無いものであれば如何なる場合にも出る筈はない。火事の時に出た臂力は、平生にも持つて居て、出る機會がなくて出ずに居たものである。臂力のやうな限られたものでさへさうである。それより遙かに自在である精神力は、これを導き出す方法さへ爲せば、驚くまでに出るものであると思はなければならない。

第一、作歌の場合であるが、作歌といふ事は云ふまでもなく自身の感じてゐること、又は心に映つてゐる形を言葉をかりて表現することである。

この表現といふ事は、容易くできるものではない。若しだらけた心をもつて表現しようとすると、現はさるべき肝腎の心の方が第二となつて、現はすべき言葉の方が第一となつて來る。さうすると、殆ど同じ場合を詠んだ他人の言葉で記憶にあるものが浮み出して來て、それで間に合せるやうな事になつてしまひ、結局氣に入らない、隨つて表現のできないといふ落ちになる。又、それ程ではなくても、我々の精神力の一部分である知識だけを働かして、上手に表現しようといふやうな態度で向つて行くと、單に言葉のうはつらだけが整つた、上すべりのしたものとなつてしまつて、肝腎の現はさうとする心とはしつくり合はないものになつてしまつてやはり氣に入らない、表現の當を得ないものとなつてしまふ。

それではどうすれば表現が出來るかといふと、心を緊張させ、集中させて、卽ち心の全體を擧げて打つかるやうな態度で詠むと、不思議にも易々と出來るものである。私の知つてゐる或高名の小說家が「作をするといふ事は暴力を發揮することだ」と云つて、小說を書く心を說明したが、暴力といふのは、思慮を離れた無我夢中の態度といふことである。全力を擧げてかかるといふ事を、一層具體的に云ひ現はした言葉である。

緊張し、集中して、心の全體をもつて打つかる、言ひ換へると暴力をもつて向ふ、さういふ態度になつた時には、ちやうど火事の時の臂力のやうに、我々の精神力も、平生はそれを蔽つ

て、曇らせ、亂し、弱らせてゐるところの外物の影響を、無意識の中に振ひ落して、その本來有してゐる力を發揮した狀態となる。

本來有してはゐるが、平生は心附かずにゐる自身の精神力の强さを體驗するといふ事は、その事だけでも既に善い事ではないか。さうした理窟はとにかく、苦んでも云へずに居た自身の心がぴつたりと云ひ得たといふ歡びはそれは云ひ難いまでの歡びで、例へば痛んでゐた蟲齒を取り去つてしまつたやうな心持である。この歡びの經驗をもつてゐる人は、それをもつて何にも換へ難いものとして、謂はゆる老いの到るを忘れるといふ溺れ方をするのである。

さうした精神力の發揮は、ひとり作歌によつてのみ得られるものではなく、如何なる爲事からでも得られるものでは無いか。例へば書家の字を書く、畫家の畫を描く、樂人の樂を奏する、工人の工をする、總て同樣ではないかといふ人があるかも知れない。

云ふまでもなくその趣は同樣である。精神力の發揮といふことの伴はない爲事は全く無いといつてもよい。併し私より觀れば、歌といふものはさうした狀態に我々を導き入れることに於て、最も容易(たやす)いものの一つではないかと思はれる。如何となれば、歌は其形式が單純なものであるだけに扱ひやすいものである。何所でも、又如何なる時に於てでも出來る。歌を詠む爲には全く何の準備もいらないと云ひ得られる。それに又歌に詠まうとするものは、我々に最も親しいもので且つ詠まずにはゐられないものである。それは我々のその時の精神であつて、即ち我々自身である。そしてその精神は、その時に捉へて表現しなければ、恐らくは忘却してしまうか、忘却はしないまでも多少變化を來してしまうといふやうな、生きて動いてゐるもので、隨つて自身を愛惜する心からは、表現を强ひられるやうなものだからである。

この作歌の歡喜、それと同時に行はれる精神力の發揮、その繰り返し、積み重ねが、やがて我々の精神の向上といふ大事に外ならないを思ふと、「歌道」といふものの尊さを思はずにはゐられない。

三、作歌の實際

表現といふことは精神力の發揮を待たなければ出來ないものだと前回に云つた。かういふと作歌の場合には、一首の歌として言ひ現はさうとすることを、前から、はつきりと分つた狀態に於て胸に蓄へて居て、そして何等かの方法に於て精神力の發揮を得て、初めて歌とするのだといふやうに取れる。しかし作歌の實際はさうではない。上に云つた言葉は、作歌の場合を概

括して云つたことで、大體はそれに相違はないが、實際の場合には大分趣がちがつてゐる。

有名な俳人が、作句の實際を語つてかういふ意味のことを云つてゐる。「俳句といふものは變なもので、もうこれきり作る事はないと思ふ頃になつて、新規に幾らでも作る事が出て來るものである。その工合はちやうど井戸の水を汲み上げるやうで、汲み上げ汲み上げして、もう水が無くなつてしまつたと思はれる頃に、新しい清らかな水が幾らでも湧き出して來るに似てゐる」といふのである。

この經驗談は、歌の上にも同様である。今この談を土臺として、作歌の實際を語ると、歌を詠み始めて、詠まうと思ふ材料の無くなるまでが一くぎり、無いと思つた材料が、その時になると幾らでも胸に現はれて來るのが一くぎりである。そしてこの談の中心は、無くなつてしまつたと思つた材料が、新たに幾らでも現はれて來るといふ、一見不思議なところにある。

今、前の一くぎりに就て說明すると、歌は精神力の發揮が伴はないと詠めないものだと云つたが、それではその精神力の發揮は何によつて得るのかといふと、やはり歌を詠む事によつて得るより外は無い。そこに矛盾がある。實際の場合をいふと、第一首目の歌を詠む場合には、精神力が發揮されては居ない。もつと具體的にいふと心が熟して來ては居ない。それでも第一

首目はさう骨を折らずに詠める。何故かといふと、第一首目として詠まうとする歌は、比較的長い間心に懸つて居て、詠まう詠まうと覘(ねら)つて居たもので、謂(いは)ゆる胸で熟してゐるものである。即ち言葉に移しては錬られて居ないが、胸の中だけでは相應に錬られて居たものだからである。この一首を詠むことによつて、心は或る程度までは熱し、或る程度の調子（心の）が附いて來てゐる。そこで第二首に移るのである。第二首は第一首程は强く心に懸つては居ず、隨つて餘り纏まつても居ないのであるが、熱した心と調子づいた心とによつて、第一首と似た容易さをもつて詠める。第三首は第二首より纏まらず、第四首は第三首よりも纏まつては居ないが、反對に心は益々熱し、益々調子づいて、謂はゆる感興を得てゐるので殆ど同じ程度の勞力をもつて詠めるものである。かういつた工合で、四五首又は五六首の歌を詠んでしまふと、詠まうと思つて胸に溜めて置いた材料は詠みつくして、材料が無くなつてしまふ、材料は無くなつた、しかし感興はといふと、感興はその頂點にある。即ち精神力は次第次第に發揮されて來て、今初めてその本來の力を現はしてゐるのである。

この發揮された精神力を持(ぢ)して、今は材料のない、空虛だと思はれる胸を見詰めると、不思議にも、そこには、詠まれるべき材料があつて、ちやうど沼の水面に泡が浮びあがるやうに、

浮び出して來るのである。それはどういふ種類のものかといふと、古い印象で、今はもう薄れて、平生は全く忘れてしまつて居たものがそれを受けた當時の鮮やかさをもつて甦つて來、又近く受けた印象ではあるが、さして心には感じず、その上を辷つて消えて了つたと思はれるやうなものが、新たに興味深いものとなつて思ひ浮べられて來るといつた風である。

さて、これらをも一くぎりの歌に詠んで、前の一くぎりの歌と比較して、その何方が胸に親しいものであるか、隨つて何方がより多く愛惜に値するものであるかと思ふと、初めから詠まうと思つて懸つた前の一くぎりの歌は、ともすると知識的で、纏まり過ぎ、堅くなり過ぎてゐるのに、中途で拾ひ物をしたにも似てゐる後の一くぎりの歌は、よく纏まらず、柔らかで、全體に明らかなものでは無いが、その中に幽かながら自身の心が流れ貫いてゐるといふ理由で、却つてよい物であると思はれる。

以上の某俳人の作句で經驗してゐることを、私は作歌で經驗してゐるのであるが、この事の中心になつてゐる所の、精神力が發揮して來ると、自身はもう材料が無いと思つてゐる胸の中から、不思議にも相應に材料が現はれて來るといふ事は、私から觀ると、作歌の上で何よりも大事な事で、若し作歌といふ事に、それに就ての祕密があるとすれば、此一事が卽ちそれであると思はれるまでの事である。

四、歌道の極所

精神力が發揮してゐると、卽ち緊張した心を持續してゐると、平生は歌のないと思はれる境が、不思議にもすべて歌となつて來るといふことを前に云つた。これは言葉としては云ひ易いことであるが、事實としてはなかなかに到り難い境である。しかし比較的たやすくさうした狀態に精神を導き入れ、比較的長い間をさうした狀態に精神を置き、そしてそこにあつて歌を詠むといふことが、作歌の上の極所で、「歌道」を進んで行つて止まるべき所はさうした境地である。

藝術の上では昔から、「感興」といふことを云つて、この上なく尊いことにしてゐる。又「入神の技」といふことを云ひ、「天來の妙想」といふことを云つて、絕妙な藝術を讃へてゐる。又さういふ藝術の出來る人を「天才」と稱して、世に稀れに見られる人としてゐる。

とかく精神を逸して、形によつて物を見ようとしがちな我々は、この「天才」とか「入神の技」とかいふと、非凡な、常人にあつては想像もし難いやうな飛び離れたものででもあるがや

うに思はうとするが、實際に「天才」といはれ「入神の技」といはれてゐる作品を見ると、案外にも平凡なもので、云はうとすれば誰にでも云はれさうなものであるのに不審がるのが常である。實例について云ふと、俳人芭蕉は三百年前の俳壇が生んだ第一の「天才」だといはれてゐる、その「天才」の芭蕉を代表する俳句の一つは「古池や蛙飛びこむ水の音」といふ句だと云はれてゐる。この句を、芭蕉の持つてゐた精神と、その精神から與へられてゐる一種の韻致を除いて單なる寫生の句として見たならば、何といふ平凡な句であらう。光景といふ上からのみ云へば、こんな光景は誰も見てゐる。見ながら氣にも留めずにゐる程のものである。この句の何所(どこ)に「天才」の面影があり、「入神」の技などと褒め得る點があるかと云へば云はれる。

しかし此句を讃へて誠に俳聖芭蕉を代表するに足りる句だといふ者は、此句の持つてゐる韻致を味はつていふのである。その韻致の何によつて添ひ來つたのであるかといふ事までも知つていふのである。その韻致は、弛緩(ちくわん)した精神をもつて物象の中に埋まつてゐ、面白い事を云はうとして、眼を働かせた結果、捉へ得た境を寫生することによつてなどは、とても得られるものではない。それとは反對に緊張した精神をもち、暫く物象を超越して、天地の大精神と交通するやうな狀態に住して居て、その精神に映つた物象を、その時の精神力を盡して寫す事によつて、初めて得る事の出來たものである。さうしたものであればこそ、形から觀ると單純な景象ではあるが、言葉にしては云ひ難いやうな一種の韻致を帶びて來てゐるのである。

上のやうなのはその一例であつて、古來の優れた歌人の優れた歌はみんなかうした精神狀態に於て詠まれたものである。俳人が自己を說いて、云ふ所は花鳥風月の上に過ぎないけれどもしかも其心は造化の妙工に參じてゐるといふのも、上に云ふやうな心の經驗を持つた上で云つてゐるので、決して誇張して云つて居るのではない。歌人の心も、其表現の形式は異つてゐるが、內容は同一なものであると云へる。

五、實地の修行

以上概略ではあるが、作歌の目的、方針に就て一わたりを云つた。この境は、かうして言葉として說けば、行くに面倒な境であつて、少數の選ばれた者より外は到りつけない境のやうに思はれるが、事實は誰でも到りつき得る境である。それは上の事も、これを一と口に云へば、自身の其時に於て持つてゐる精神內容を、何物にも妨げられず、稀薄のものともせず、十分に押し出すといふ事に過ぎないからである。更に云へば、自身の生命の頂點と觀るべき現在の瞬

間の精神を、歌といふ形式に表現するといふ事に過ぎないのである。更に又云へばその時その時の心を、心を盡して詠むといふに過ぎない事である。

藝の上では理窟は禁物だと云はれてゐる。それは自身を外物の捉はれから放す爲の理窟が、却つて自身を捉へるものになるからである。作歌の上でも同様に、作歌の目的方針は上に云つたやうなもので、結局は其所へ到達するものだと決めて、それは腹へ藏つてしまひ、さし當つては、その時に詠まうと思つた事を、自由な心をもつて詠んで行きさへすればよい。しかし詠まうと思つた事は、その時の心を盡してだけは詠まなくてはならない。それでないと歌を詠む面白みを減殺されてしまつて、歌がつまらないものになり、隨つて根氣が續かず、進歩もしない事になるからである。

第四章　歌の形式

一、言葉の明瞭

歌は、繪が形であり、文字が線であるやうに、言葉から成り立つたものである。歌の第一の問題は言葉である。

言葉に就て第一に注意すべき事は、そこに使つてある言葉がはつきりして居てよくわかるといふ事である。この事の反對である、はつきりしなく、よく分らないといふ事は、自分の云はうとしてゐる事が自分にもよく呑み込めて居ないといふ場合に起る事である。云はうとしてゐる事がはつきりと分つてゐる場合には、曖昧な言葉などは云はうとしても云へないものである。言葉をはつきりと分るやうにといふ事は、云はうとしてゐる事を自身にはつきりと捉へるといふ事である。心ではよく分つてゐるが、言葉としては云へないといふのは、多くの場合は、分つてゐるやうな氣がしてゐるだけで、その實分つては居ないといふ場合である。この意味で、如何にすればはつきりと分りやすく云へるかといふ表現上の苦勞はその實、ばつと感じてゐる

だけで、明らかには感じて居ない事を、明らかにする爲の苦勞である事が多い。

言葉ははつきりと分りやすい、卽ち明瞭といふ事が第一だといふと、玆に一つの反問が起つて來る。それは、歌の上では、文章などでは全く使はないと云つてもよいやうな耳遠い古語を使ふ事がある。あれはどういふ譯だといふ事である。

それは一と口にいふと、止むを得ずにするのである。卽ち作者は、力强い表現をしなければならない場合だと思ひ、その心に忠實であらうと思ひ、それを現はすに足りる言葉を搜してゐる。然るに現在に用ひ馴らされてゐる言葉の中にはさうしたものが見附からず、たまたま古語の中に適當した言葉を發見し得たといふやうな場合にのみ使つてゐるのである。言ひ換へると、作者は自身の云はうとする內容に最も適切な言葉を選んだ結果として使つてゐるのである。言葉の明瞭といふことは云はうとする事を明瞭にし、それに適切な言葉を當て嵌めた事の結果である。作者は云はうとする事を明瞭にし、それに最も適切な言葉を選んだのであるが、しかも言葉が耳遠いもので、やや分りにくいものだといふならば、これは我國の語彙の乏しい爲だとして、讀者の方から進んで、その稍々分り易くない所は分るやうにしなければならないものである。この意味での古語の使用は當然許さるべきものである。

しかし單に古語としての古語は排斥しなければならない。卽ち單に古語であるからといふ意味での興味を感じて、どんな言葉を使つても作者の勝手だといふ心で使ふのは、これは言葉を弄ぶことである。その意味での古語は排斥すべきである。

しかし言葉といふものは微妙な味ひを持つたもので、一語一語、意味以外の感じを持つて居り、その感じが又意味の一部をも成してゐるといつた所があつて、一と口には云ひ難いものである。だが大體としては、明瞭をと期し、その明瞭は云はうとする事に適切な言葉を選ぶところから來るものだといふ事を信條とすべきである。

二、言葉の雅俗

言葉の事をいふ序に、言葉の雅俗といふ事に就ても一考するのが適當のやうに思はれる。

歌の言葉は雅語でなくてはならない。歌には歌に限つての言葉があるとやうに思つてゐる者がある。歌は長い歷史を持つて居、又貴族の手によつて保たれて來た時が多いといふ關係から、歌といへば雅なもの、歌の言葉といへば雅語であるべきだと因襲的に思つてゐるのである。

歌の言葉は、作者からいへば自身の心に直接だといふことが一番大事な事で、その外には理

窟のあるべき筈がない。當時の歌の革新者であつた香川景樹は、極力此點を說いてゐる。それは今日雅語と稱してゐる古語も、その當時にあつては俗語である。今日の俗語も後代には雅語である。言葉には雅俗などといふことはないといふのである。この意見は、今も後も正しいものと云はなければならない。

しかしさういふ景樹自身も、歌の中へ多くの俗語（口語）は使はなかつた。言葉の雅俗などといふ事は問題ともして居ない現在の歌も、やはり餘り多くの口語は使つては居ない。これは使はないのではなく、面倒で、使ひ得ないのである。何故面倒かといふと、歌は短い形式の中で、落ちついた、一つの纏まつた味ひを出さなければならないものである。ところがさうした味ひは口語を以てしては現はし難い。一首の歌の中に幾らでも口語を取り入れて、しかも落ちついた一つの纏まつた味ひを出すといふ事は、餘程の手腕のある者でなくては出來ないことで、凡手によつてさういふ事をすると、その言葉だけが浮び上り飛び出して、それだけが眼につき、一首の統一を破りがちである。隨つてさういふ試みをする人が少ないのである。

言葉の雅俗などといふ事はない、雅語よりも寧ろ俗語の方がよいのであるが、その俗語を十分にこなし切れない爲に、多くは用ひずにゐるといふのが實際である。

三、五七と七五

言葉の事は以上でとどめて置いて、進んで句の續け工合に就て考へて見なければならない。

歌は一首の全體を讀んで見、その中に詠んである事を考へて見た上で、改めて味ふといふやうな性質のものではない。初句から二句、三句、四句、五句と、讀むに隨つて端から分つて行き、讀み終ると同時に胸に一つの纏まつた味ひを感じるべきものである、讀むだけづつ分つて行き、讀み終ると同時に味ひを感じて、そこに考へて見るといつたやうな他の仲介のいらない所が、卽ち知識辨別を待たない所が、歌の藝術たる所である。

一首の歌は、讀めば讀んだだけづつ分つて行かなければならない。さうした約束から、句と句の續き工合は、しつかりとして、ちやうど一筋の糸のやうに續いて行つて居なければならない。（その糸に、張つた所と弛んだ所とがあつて、それが面白みをなしてゐる事は別にいふ。）それでないと、讀んだだけづつ分つて行き、讀み終ると同時に味ひとなるといふ訣に行かない。

この句の續け工合といふ事は、古人は心を籠めて研究してゐる。橘守部（江戸の有名な歌學者）は萬葉集を尊崇して、萬葉集の句のつゞけ方を研究し、それを正しいものとして、この萬

葉集と對抗してゐる古今集の句のつゞけ方を排斥してゐる。その大體をいふと、萬葉集の歌は「五七」といふことを土臺としてゐる。卽ち五言七言とを續けて一と括りとするのである。例へば百人一首の持統天皇の歌でいへば、「春過ぎて夏來たるらし」（百人一首では、「夏來にけらし」と改作してある）といふやうなのである。この五言「春過ぎて」と七言「夏來たるし」との間がしつかりと續いて、その間が切れてゐるやうな事がない。そして、この七五一と括りを二度繰り返し、それに七言の一句を添へて、一首の歌を組み立ててゐる。さういふ風に、萬葉集の歌は、誠に句の續き工合が正しくて、耳で聞いただけでも直ぐに分る。然るに古今集の系統を引いた歌は、七五といふものを句の土臺としてゐる。卽ち七言に五言を續ける行き方である。例へば百人一首の「契りきな互みに袖をしぼりつつ」といふ歌のやうに、七言の「互みに袖を」に、五言の「しぼりつつ」を續ける行き方をするので、初句の「契りきな」は獨立してしまつて、讀む端から分るといふ譯には行かない、これは正しい句の續け方ではないといふのである。

萬葉集は五七を土臺にしてあつて分り易いが、古今集以後は七五を土臺とする事になり、其爲め句の續き工合が混雜して來て分り惡いものになつてゐるといふ事は、大體から觀て動かし

難い事である。そして何故さういふ違ひが起つて來たかといふと、萬葉集の歌は、耳で聞いて分ることを主としたものであるが、古今集の歌は目で見ることを主とするやうになつたので、自然に知識の力でする巧みが加はつて來て、新古今集、又はその系統を引いた歌になつて來ると、よく讀んで見、考へて見なければ意味の分らないやうなものさへも出來るやうになつて來たのである。

五七が良いか七五が良いかなどいふ事は、きめて懸ることの出來ないことで、又きめる必要もないことである。しかし句に句を續けて行く續け工合ははつきりとして居て、讀んだだけは端から分つて行かせるといふ心掛は必要なことである。

尙ほ、この讀んだだけは端から分るといふ續け工合は、前に云つただけでも十分會得の出來たことだらうと思ふが、一首の表現をする場合に、知識の力を借りて、又はそれを濫用して、小さな巧み、小さな器用を振りまはしてはならないといふ事である。その心があると、表現が小刻みとなり、混雜したものとなつてしまふ。よく腹に入つてゐる心持を、一氣に、ぐつと云ひさへすれば、句と句の續き工合は自然に正しいものとなつて來るものである。元來心に溜つて云ひたいと思つてゐる事を、一氣に、ぐつと云ひ下せば、句と句がしつかりと續いて、すら

りと云ひおほせられるのが當り前で、句の續きの混雜した、分りにくいものになるといふ方が不思議な位である。

句の續き工合の正しいといふ事の中にも、歌の本質のどういふものであるかといふことが語られてゐる譯である。

四、一首の姿

歌では「一首の姿」といふ事を重んじてゐる。姿とはどういふことかといふと一首の歌がちやうど地上に立つてゐる一本の木のやうに又は威儀を正して坐つてゐる樣にしやんとしてゐる事である。尙ほ云へば、人でも、頭が重くて尻の輕いといふ姿は厭はしいものである。歌もそれと同じく、頭は輕く尻に力の入つた姿でなくてはならない。又人でも、頭が輕く尻が重くとも、腹の細いといふ姿は厭はしいものである、歌もその通りに、腹が太くなくては姿をなさない。かういふやうに數へ立てて來た結果、一首の歌は人の體を手本として、頭は小さく、腹は太く、尻は重いといふ姿にならなければ面白くないと云ふやうに說いてゐる。

この事は歌に限つた事ではなく、繪でも字でも挿花のやうなものでもすべて同樣である。例

へば山水の畫を見ても、先づ上の方に淡い遠景があり、中邊に中景が主としてあり、それから下の方に前景がしつかりと描かれてゐる。一幅の畫に一つの纏まつた味ひを持たせようとすると、さういふ方法を取るのが最も適當なのだと思はれる。「歌の姿」といふのも、やはり一首の歌に一つの纏つた味ひを持たせようとすると、勢ひ前に云つたやうな布置結構となるので、これは古人が實地に經驗した上での言葉だと思はれる。

今、實例に就ていふと、前に擧げた百人一首の持統天皇の歌の如きも、よくそれにかなつたものである。

「春過ぎて夏來にけらし」「白妙の衣ほしたり」「天の香具山」

「春過ぎて夏來にけらし」までは頭で、輕く推察を云つてある。山水の繪でいふと遠景である。「白妙の衣ほしたり」は腹部で、大事な所である。一首の主なる部分をここに云つてある。繪の中景に當る。「天の香具山」は尻で、力强く据わるべき所である。七言で短くはあるが、その力からいふと、一首の眼目程のものをここに据ゑてゐる。繪の前景である。

大抵の歌は皆この結構で一首の姿を作つてゐる。前の橘守部の意見によると、「五七、五七、七」といふ形で、初めの「五七」は輕く、次ぎの「五七」は重く終りの「七」は最も重く詠ん

であるといふのである。

この邊の消息は、優れたといはれてゐる歌を、少しく心を潜めて詠み味つて見ると、容易く會得される事である。

第五章　歌の趣向

一、感動を與へた一切の事物

歌の趣向といふのは、歌の內容といふ事である。卽ち一首の歌の中に、言葉を借りて現はされてゐる事物である。

歌を詠まうと思ふが、何ういふ事を詠めばいいのだらうかといふ疑ひを持つてゐる人が、歌に對して極めて初心な人の中にはある。又、この事を歌に詠んで見たいが、こんな事は歌の材料には成りかねるやうな氣がすると、遠慮に似た惑ひを持つてゐる人がある。さうした人は旣に多少歌も詠み、古い歌集なども讀んで見て、歌の取材の範圍のおのづから限られてゐるのに心附いてゐる程度の人である。

歌の材料には、何の制限もない。これだけの範圍の事物は歌材になるが、その外の事物はならないといふやうな制限は全然ない。天地の間に存在してゐる物、人の行動、人の心に生滅（しやうめつ）する感情、總ては歌の材料となるべきもので、如何なるものでも、これを捉へて詠めば、歌の材

料となつたのである、材料にするしないといふ事はあつても、なる、ならないといふ事は無いのである。

かういふと抽象的で、やや不安に思はれるかも知らないが、試みに古い歌を讀んで見たならば、直ぐにその事實であるのを頷かれるであらう。例せば萬葉集を取つて見ても、普通には云ふを憚られてゐる閨中の事も材料となつてをり、野に糞をしてゐる女人も材料となつてゐる。人を莫迦にしてからかつた心などは喜んで材料とされてゐる。そしてそれらの材料を詠んだものが、殆ど皆相當の歌となつてゐる。

歌の材料の上に制限の附いたやうに見え出したのは、古今集以後である。そしてそれには、何うでもさうならなければならない理由があつたからである。理由といふは、當時の歌人は、皆殆ど京都の地を離れたことのない役人であつた。それで自然を詠んでも京都で見る自然に制せられ、人事を詠んでも役人としての生活をしてゐる上で經驗する事だけだつた爲である。今一つの理由は、當時は氣魄のある歌人が少なかつたので、自分の見たり感じたりした事物を詠まうとするよりも、古人の作を模倣しようとし、其所に詠まれてある事物に大同小異な事物をのみ詠まうとした事である。さうした理由で、歌の材料にも自然に制限があるらしく見えるやうになつて來たのである。

この事の誤つてゐる事は、江戸時代になつて明らかにされ、歌は何でも材料にすべきであるといふ事が事實として現はれて、次第々々に濃厚となつて行き、そして現在に及んでゐる。現在では少しく歌を詠み馴れてゐる者は、もう此點には疑ひを持たなくなつて來てゐる。

何でも歌の材料にすればなる譯だと前に云つたが、しかし事實としては此事は容易に出來ない事である。何故といふに、歌の材料は、強弱の差はあつても、とにかくその人に何等かの感動を與へたものでなければ、てんで捉へて詠まうとする心も起させなく、隨つて捉へられる筈がないからである。

實際歌の材料はその人に感動を與へた事物である。何等かの意味に於て、その人の精神と關係のあつた事物である。苟くも此事があつた以上は、縱令その事物が何であらうとも、安心して材料とすべきである。安心してする程度では、進んで爲るべきで、それによつて歌の材料は廣さを加へ、歌の世界は開拓されて行く譯である。

萬葉集時代は取材が自由で、古今集以後近代までは自然に制限が附いて來たと云つたが、一方から觀ると、この自由な時代の歌は面白く、制限の附いた時代のものは反對に面白くなくな

つてゐる。それは、自由の時代の歌は活きて居、制限の附いた時代のものは死んでゐるからである。何故さういふ事が起つてゐるかといふに、一方は材料は何でも、かまはずに捉へてはゐるが、感動を起したものを捉へて居るのに一方は、材料は選擇はしてゐるが、感動が伴はずに捉へてゐる爲である。

歌の材料は、苟くも我に感動を起したものであれば、それが何であらうとも少しも顧慮する必要がない。前人の捉へなかつたものであれば、それだけ自負を持つて捉へ行くべきで、それがやがて我が個性を重〳〵じることであり、歌の世界を廣めて行くことでもある。

二、如何なる材料より初むべきか

歌の材料は、自分に感動を與へたものでさへあれば何でもかまはないとは云つたが、これは何方(どちら)かといふと理想で、實際の場合には、中々さうは行かないのである。

何故といふに、歌は云ふまでもなく一首の中に、一つの纏つた味ひを持つたものでなくてはならない。そして一首の形式は短いものである。この短い中に、一つの纏まつた味ひを出すといふ事は、實際はたやすい事ではない。更に云ふと、一首の歌は、それが何を材料としてゐるかといふことよりも、捉へられた材料が如何なる味ひを持つてゐるかといふ事の方が重いことである。面白い材料さへ捉へてあれば自然面白い筈だといふのは單なる理窟であつて、藝術の心ではない。藝術の心からいふと、一つの材料を詠み活かして、味ひを持つたものにするといふことで、その味ひの如何によつて其作の價値は定まることである。それは古い材料よりも新しい材料の方がいいにきまつてゐるが、それは同じ手腕によつて詠まれた場合にのみ云はれることである。

前に、古今集以後近代までの歌人は、氣魄に乏しくて新しい材料を捉へ得なかつたと云つたが、それだから彼等の歌は味ひのないものだとは云ひかねる。歌は味ひを主としたものである。味ひといふ點では彼等の歌も相應の味ひを持つてゐて、必ずしも下手なものだとは云へない。云ふ所は、彼等はそれだけの手腕を持つて居たので、新しい材料を捉へようとすれば捉へて詠み活かし得たらうに、進んでさうした困難を冒さうとはせず、味ひを出し易い古人の踏襲ばかりをしてゐたので、その意味で氣魄が足りないと難じたのである。若し又彼等が事實彼等が殘して置いた歌のやうな古人の踏襲以上の事は出來ない人であつたとするならば彼等は自身に適當な事をして居たので、難はあるにしても、歌の大道を踏みはづしたのではないと云へる。

前に歸つて、今歌を詠まうとするに當つては、何でも材料にしようとすることは抱負として胸に蓄へて置いて、何よりも先に一つの纏まつた味ひを持つた歌を詠まうと覘ひを据ゑ、そして、それがたやすく出來さうな材料から捉へて行くべきである。そして捉へて詠み〳〵してゐる中に、自然に易より難へと向つて行き、結局は抱負を實現すべきである。

何故このやうな事を絮說するかといふに、初めから面倒な材料を捉へて詠まうとすると、歌は徒らに面倒なもの、苦しいものとなつて、詠み續けて行く事が厭になつてしまふからである。そして又、さうした困難を忍んで詠んだ歌は、それを讀む者も同じく息苦しさを覺えるのみに終るものである。歌は作者にも讀者にも、程度の差はあるにしても一種の面白みが感じられなくては、甲斐のないものである。

三、趣向を立てる上の階段

詠み易い趣向のものから次第に詠み難い趣向のものへと進むべきだと云つたが、それに續いては、何ういふ趣向が詠み易く、何ういふ趣向が詠み難いものであるかといふ事が問題となつて來る。

この趣向の難易といふ事は、一つはその人々の性分によつて定まる事で、一概に云ふ事は出來ない。今趣向を大別して自然と人事の二つにすると、或る人は自然の方が詠み易いと感じるが、或る人は人事の方が詠み易いと感じるやうなものである。更に云へば、心のおとなしい人は自然の方が詠み易いと云はうし、我の强い人は、人事でなければ詠まうとも思はず、又詠み易いと云ふだらう、更に年齡から云つても、年若い人は人事といふ中、自身の思ひを抒べる歌を詠みやすいと云ひ、やや年をした者は人事を詠まうとし、年が老いて來ると、自然の歌でなければ趣が淺いとも思ふであらう。

かういふ風で一概には云へないが、しかし今大體として云ふと、動き移つて行く物よりも、靜かにぢつとしてゐる物の方が捉へやすい。この意味で、人事よりも自然の方が捉へやすい。又、廣い漠とした物の一部を捉へて云ふよりも、おのづから小さく纏まつた物を捉へて云つた方が、讀む者に印象を與へやすい。この意味で、人事よりも自然の方が捉へやすい。又、形の無いものよりも形のある物の方が捉へやすい。この意味で、思ひを抒べるよりも自然の方が一應の歌は出來やすい譯である。

かういふ理由で、最も捉へやすく、又歌に詠んだ上で、他人に最も感銘を與へやすい境は自

然である。自然の靜的な方面で、そして此方で選擇など加へるまでもなく、その物としやんと纏まつてゐる物は、何方を向いても、そして何時でも四季に、朝、晝、夕に、それ〴〵に違つた趣を現はしてゐる。これを寫生して歌にしようといふ心を持つて向つて行けば、自然はさうされるのを待つてゐるがやうに限りなく擴がり、積み重つてゐる。

先づ自分の最も見馴れてゐる周圍から始め、其所で一くだり詠んでしまつたならば、やや離れた新しい所をといふ風に向つて行くと、五十首百首位の歌は、さう困難を感じずに誰れにでも出來るものである。

これをするに當つて、よく注意すべきは、寫生の心を失はない事である。ここに寫生といふのは、此方の心を抑へて、落ちついた心を以て、寫さうとする物象を十分に言葉にする意味に於てゞある。ちやうど字を習ひ畫を習ふやうな心持でするのである。歌にあつては、とかくに此方の心持が先へ出たがる。それをその儘にすると、感歎の言葉が出たがる、感歎の言葉が出るやうだと、寫さうとする物象は、大まかに扱はれてしまつて、微細な、面白いところまでは入れずにしまふものである。

さうした心持で少し根氣よく續けてゐると、自然に歌といふものを會得して來て、進んで人

事の難きに向つても、捉へるべき點を捉へ得るやうになるものである。

四、單純にと志せ

寫生をするには、此方の心持を抑へて懸り、努めて對象を詠み生かすやうにと云つたが、それに續いて今一つ云ふべき事がある。それは趣向は、成るべく單純にせよと云ふ事である。この單純といふ事は、心持を抑へて懸ると自然にさうなつて行くべきもので、云はば自然の結果として出て來ることであるが、それにしても改めて云ふだけの意味のあることである。

歌は材料の如何よりも味ひの如何にあるといふ事は前に云つた。この味ひといふものは微妙なもので一と口では云ひ難いが、しかし歌に於ける味ひの何ういふものの中にあるかといふ事は云へなくはない。味ひのある歌といふのは、第一に生きた歌である。生きて居ないと味ひが無い。それで歌にあつては、味ひのある作をと心懸けるよりも、生きた歌を詠まうとする方が適當で、味ひといふものは、詠まれた境を詠み生かして、生きたものとする事と同意義であると解しても差閊はないまでゞある。

一首の歌にあつては、多くの材料を活かす事は實際に於て出來難い。それで生かすが主であ

る歌にあつては、その捉へる材料を成るべく單純にするより外は無い。即ち二つの物を或る程度で生かしてゐるといふ事よりも、一つの物をしつかりと生かした方が歌の本意である所から思ひ切つて一つにしてしまひ、他の一つは、他の歌で生かすといふ方法を執るのである。

自然に對して初心の間は、廣い物、多くの物を漠と見ての喜びを感じて、狹い物、一つの物をしみじみと觀て、その趣を喜ぶといふ事は出來難いものである。廣より狹に、多より一にといふ事は、單に歌の爲に鑑賞力を高めて行くといふ事ではなく、自然に對する鑑賞力を高めて行く事でもある。所が歌は、その廣と多とを現はす事は出來ない形式なものなので、何でも狹と一とに向つて行かなければならない。それでないと、歌の何よりの約束である生きた趣をあらはす事が出來ないからである。

生きた歌といふ事を今一層明かにする爲に尙一つの事を云ひ添へる。生きた歌即ち單純な趣向をよく詠み生かした歌、言換へるとよい歌と云ふのは作者を離れて生きてゐるものである。或人が或時に何ういふ境を詠んだものだなぞといふ一切の背景を離れて、歌その物だけで生きてゐるのである。それは宛然自然に對するやうに、其歌を讀むと何時でも或る感じを受けるものである。そして又さういふ歌を詠むのが詠歌の本意でもある。前に、寫生をする時には此方

の心持を抑へて懸れと云つたが、いい歌がかうしたものである以上、さうした境を見る時に、作者が泣いて見ようが笑つて見ようが、又眼を見張つて見ようが細めて見ようが、そんな事は一首を詠み生かす上には何の關係もない事である。否、ある爲に甚しく邪魔にさへなる事である。對象を詠み生かさうと思へば、實際心持を抑へて懸らなければならない。然るに事實を見るとこの眼を見張つたとか、細めて見たとかいふ事を說明し、その爲にその歌を殺してゐるやうなものが相應にある。これは注意しなければならない。又心持を抑へるやうにと云つたが、心持は抑へたとて抑へ切れるものではない。抑へきつたと思ふ位で、ちやうど適當な程度に現はれるものである。

五、詠み難い趣向

以上云つて來た事によつて中世の歌が、自然を對象とした中、殊に花鳥風月を對象としたものの多い理由が分つたらうと思ふ。花鳥風月は感動を誘ひやすいものである。趣向として捉へるにも捉へやすい。又讀者の方も感動を誘ひやすいので、相應に詠めてさへあれば、此方の心で補つて、纏まつた味ひ、進んでは生きた感じも受け易いのである。これを一と口に云へば、

詠み易いから詠んだので、又詠み易い境だけ詠んで、詠み難い方面へは手を觸れなかつたのである。

花鳥風月の美しさと脆さとに感動する外に、そこに詠まれるべき限りなきものがある。例せば我々が世間に立ちまじり、人との交渉の上で得る精神の波瀾の如きも、やはり歌の對象となるべきものである。中世から近代へ懸けての歌にも、この境がないではない、否、戀の歌は誰の家集にも相應に多くあり、又世に處しての上の喜びを詠んだもの、近親の死を悲んだものなども相應にある。しかし此の人事の歌は自然の歌の生氣の乏しいよりも一層乏しいものである。それは自然の歌は、知識を働かせる事によつて前人の作を摸倣したゞけのものであつても、それによつて實在の自然を聯想して、補つて味ふ事が出來るものであるが、同じ態度で詠んだ、形の無い我々の心内の世界は、さういふ便利がないので、一層生氣の無いものに感じられるのは致し方のないことである。

この心内の世界を歌とするといふことは、自然を歌とするには優つて味ひのあることに違ひない。しかし複雜した心内の世界から、その一角を捉へ來り、それが作者を離れて生きてゐられるまでのものにするのは、餘程の手腕を要するのである。この方面は近代の歌から現代の歌

へかけて次第に現はれて來てゐるが、此の先まだ限りなく伸びて行かなければならないものに見える。それは近代の歌のさうした方面のものと、それよりも先に出來たところの民謡、俗謡などを較べて見ると、後のものの方が遙に立派なものに見えるからである。

更に又、心の境涯を自然に托して現はしてゐるところの、一見自然の寫生とも見える方面などになると、俳句の或る物は歌よりも遙に進んだ境を現はしてゐると見なければならない。

趣向は易より難に向ふやうにと云つたが、その難の方面は、現在でもまだ手を附けたばかりのやうな狀態である。進むところは限りなくある。今は趣向といふ事に就て云つてゐるのであるが、これは單に趣向といふだけの事ではなく、歌を詠む人の精神の問題である。で此所では、趣向は限りのないものである。始めるには易きよりすべきだが、何時までも其所に留まつてゐるべきではないといふ事を云ふにとゞめて置く。

第六章　歌の調子

一、調子は歌の生命

我々が歌を讀んで見て、面白いと感じるのは、何よりもその調子である。例せば、そこに云はれてゐる事柄は、單に事柄として考へると誠に泣かなくては濟まぬやうな極悲な事柄を云つてあるのであるが、それは考へて見てさう思ふだけでその歌を讀み終つた瞬間には、それとは感じられず、泣きたいやうな氣にはされないといふことがある。反對に、或る歌を讀むと、妙に釣り込まれて行つて、讀み終ると同時に、思はずも靜かに微笑をせられる。一體何んな面白い事が云つてあるのだらうと、今一度その作の內容を見直すと、事柄としてはそれはほんのつまらない事で、云ふにも足りない事であるといふ事實を發見する例が往々にある。

そこで、一首の歌の內容とは、一體何ういふものだらうといふ事が今一度問題になつて來る。

表面的に考へると、一首の歌の內容とは、そこに捉へられてゐる事物のやうな氣がする。事

物を外にしては內容といふものは無いといふ氣がする。しかし今云つたやうに、立派な事物が捉へられて居るにもかかはらず讀んで見ても味ひのない歌のあると共に、一方には、捉へてある事物は何でもない物だが、讀んでも見ると味ひのある歌のあるのを見ると、歌の內容といふものは、そこに捉へられてゐる事物だけではないといふ事を認めずにはゐられない事になる。

材料を離れて存在してゐるのではないが、しかも材料とは別のもので、その材料を活かしも殺しもしてゐる。今一つの物は何であるかといふと、それは其材料を云ひ現はしてゐるところの言葉の上手下手で、更にいふと、その言葉に調子が有るか無いかである。

歌の調子といふものは實際微妙な働きをなしてゐるものである。調子のある言葉で云つてあると、如何につまらない事物でも、しみじみと胸に流れ込み、心に響いて來て、實際の事物に對するよりも強い力をもつて我々に迫つて來るものである。普通には、言葉では思ふ事を傳へられないと云つてゐる。そして文字は言葉にもまして心を傳へ難いものだとされてゐる、然るに調子のある歌を讀むと、言葉で云つてはとても此れ程までに微細な氣分は現はせまいと思はれるまでに現はし、又とても此れ程に、力強くは現はせまいと思はれるまでに現はしてゐる。實際如何に親しい人の言葉でも、程を經ると、その言葉も聞かされた當時だけの力は持つて居

難いものであるが、調子を持つた言葉である所の歌は、一度身にしみて聞くと、多くの場合は何時までたつても忘れず、又讀み味ふと、何時でも初めて聞く時のやうな力を感じるものである。

これらの點から考へると、歌はそれに捉へられてゐる材料よりも、その材料を言ひ現はしてゐる言葉の調子の方がより多く大事なものだといふ事が思はれる。實際歌の生命は調子にある。近世の歌壇の大才で「新古今集」以後の趣向をのみ重んじた歌を排斥して、清新な歌風を興したところの香川景樹が「歌は調ぶるものなり」といふ一點を力説し、歌にあつては趣向などは念とするにも及ばない、見るままを云へば十分である。大事なのは一首の調べ卽ち調子だといつて、その一點から歌壇の革新を遂げたのを思つても、此事の眞實な事が思はれる。

この微妙な力を持つてゐる調子といふものは、一體何ういふものであらうか。

二、調子は精神の現はれ

「調べ」といふ事で最も多く苦んだ香川景樹は、力を籠めて此「調べ」といふものを說いてゐる。その大體をいふと、天地の間にあるものは悉く、「感」を持つてゐる。その「感」は本能的

に我々に感じられるものである。さてその「感」を如何にして言葉とするかといふに、先づ誠心誠意の我となつて、詠み上げ、詠み上げしてゐると、言葉がおのづからにその感と一致して來るものであるといひ、そして其誠心誠意といふ點に特に注意を拂ひ、誠心誠意とは、我等を不純としてゐる知識、雜念を拂ひ去り、至純の一念、天地と合體し得る底のものであるといふのである。

ここに「感」といふのは、事物の持つてゐる生命、精神、又は氣分を指してゐるのである。そしてそれは、至純の念を持して、詠み上げしてゐると、自然に言葉の中に溶かし込むことの出來るもので、その事の出來たのが調べ、卽ち調子のある言葉だといふのは、分り難くはなく、又頷き得らるる敎へでもある。

我々は今暫く景樹の解釋から離れ、自身作歌をする時の心持を顧みる事にする。

普通作歌をしようとする時には、嬉しいとか、悲しいとかいふ心持が胸に滿ちて、自然にそれを外に現はしたいと思ふ場合である。例へば嬉しい事があれば、我々は獨りで微笑もし、坐つてじつとしてはゐられずに、起つて歩き廻り、手足を動かして見たりなどする。この心を言葉に現はさうと思ひ立つて、文章に書き又は歌にするのである。

同じく嬉しい心持を現はすのではあるが、文章と歌とは趣を異にしてゐる。文章だと、自分を嬉しく感じさせた事柄の方を主して書くのである。それを讀む者が、成る程嬉しかつたらうと思ひ得るまでに卽ち心の上だけでは自分と同じ經驗をしたやうに感じるまでに書くのである。さういふ風に書くには、心を靜めて、ちやうど他人の事でも書くやうな態度で書かなければ書けるものではない。しかし歌にするには、現在胸に抱いてゐる嬉しい心持を、直ちに他人の胸に訴へようとするのである。一つの事柄が惹き起した嬉しさではあるが、その事柄を說く事によつて同感を喚ばうとするやうな間接な方法は執らず、現在躍つてゐるところの心持を、胸から胸へと直接に訴へようとするのである。

卽ち文章では事實を主としてゐるのであるが、歌では躍つてゐる心持その物を主としてゐるのである。

さて、歌とするとして、これを如何にして傳へるか。出來る事であれば、事實などいふ物は全然介さずに傳へたいのであるが、人と人との間には、我々の感能によつて感じ合ふ何物かがなくては傳へる譯に行かない。止むを得ず歌にあつても、その事實を簡單にいふか、又はその事實の中の最も力强い一點を捉へて云ふかするのであるが、それは文章を書く場合の事實とは

大分重みを異にした、現在の躍つてゐる心持を傳へて行く方便に過ぎないものである。(文章でも方便といへ無くはないが、其所に輕重の差がある。卽ち文章では靜かに描き出す所を、歌では訴へて行く言ひぐさにするのである。)

歌では、止むを得ず事實を假りるが、それは輕いものとして置いてその代りに極力現在のこの心持を現はさうとする。その心持は借りて來た事實に托して現はすより外が無いので、さういふ方法を執るが、その方法は、事實を云ふ言葉を、現在の心持に浸して、その心持を現はし傳へ得る言葉として云ふといふ方法である。さうした要求の下に生まれたさうした使命を果さうとする言葉が、卽ち調子のある言葉である。

上に云つたやうな場合の事實と調子との關係をいふと、事實は方便であつて、調子は目的である。尙ほ云へば、事實は形式であつて、調子は精神である。尙ほ更に云へば、調子は、躍つてゐる心持その物を言葉といふ形あるものを借りて現はしたので、本來を云へば言葉などいふ物無しに現はしたいものなのである。

以上作歌の實際の場合を腹に置いて、景樹の「感」といふ言葉を思ふと、容易く解く事が出來る。

景樹は天地間の總ての物は感を持つてゐるといふが、それは物自身が持つてゐるのでは無くて、その時此方の心に持つ感が、先方に映つて見えるのである。樂しくて見る空は微笑し、苦しくて見る空はしかめ顏をしてゐる。晝の心で見る空と、夜の心で見る空も既に相應にちがつてゐる。卽ち空に一つの定まつた感があるのでは無くて、その時々の此方の持つてゐる心持が空の上に映つて見えて來るのである。隨つて、物の「感」を云ひ現はすのが、「調べ」だといふ言葉は、我々の心持を、嬉しく笑つてゐる氣分を、悲しくて咽んでゐる胸の咽びを、事物に托して調子ある言葉として現はすといふ事と同一である。

さて、此の調子は如何にすれば得られるか。景樹の誠心誠意となつて詠み上げ詠み上げするといふ方法は何ういふものであらうか。

三、調子は緊張せる心より出づ

如何にすれば調子を得られるかといふ事は全く祕密に屬してゐる事で、如何なる人も、かういふ方法によれば得られると語り得たものは無い。景樹が前に云つたやうに、先づ雜念を拂ひ、集中した心を以て詠み上げしてゐると、おのづからにして物が「感」を、卽ち我がその時の精

神氣分を調べ出し得るのものだと說いてゐるのは、やや輪廓的な嫌ひがあるが、比較的、最も說き得たものといふより外は無からう。

實際調子を得るといふ事は、その人の自得に待つより外は爲方の無いものである。卽ち調子の生まれて來る母胎ともいふべきは、その人のその時の精神氣分であつて、それを出來得る限り緊密に言葉となし得たものがその人のその時の調子である。これは實際その人が自得するより外に無いもので、他からは指も染められないものである。

自得の捷徑は、一には錬達であるが、一には緊張した精神を以て練習することである。景樹の謂ふ所の、無念無想となり、天地の精神と合體しようとするやうな緊張し集中した精神を以て練習することが出來れば上乘である。

如何となれば、この調子といふものは極めて紛れやすいものである。卽ち形と精神とを混同しやすいものである。

調子は素より言葉を離れてはない。言葉によつて現はれるものである。それでは言葉に屬したものかといふと、斷じてさうでは無く、前に云つたやうに精神に屬したものである。卽ち言葉と共にはあるが、何ういふ徑路を踏んで共にあるやうになつたかといふと、一つの調子を持

つてゐる此方の其時の精神が、外にある言葉を捉へて、それに調子を與へる事によつて共にあるやうになつたものである。此點は十分に覺悟して居なくてはならない。

この點が明瞭になつて居ないと、調子のある言葉といふのは、謂はゆる流暢な口つがりのいい言葉と誤解されるやうになるからである。元來我國の言葉は、流暢な、口つがりのいいものとなり易い傾向を持つてゐる。それに又古來の歌にはさうした調子のものが多いので、歴史的にもさう思はれやすいからである。

本當の意味の調子のある言葉といふのは、前にも云つたやうに、精神氣分を直接に現はしたもので、隨つて他の精神に、微妙なる親しさを以て感じられるものである。卽ち胸より胸へ貫き入り、忍び入る力を持つたものである。或る時に拮屈ともなり、或る時には苦澁ともなり、或る時には急促してゐるといつたやうなものである。謂はゆる調子のいい言葉といはれる流暢一點張りのものとは遠いものである。この流暢一點張りの言葉は、他の胸に貫き入るどころではなく、總ての場合に於て上すべりをしてしまふ言葉で、普通の言葉で普通の言葉よりも一層力の弱い言葉である。

調子のある言葉を生み出すには緊張した精神が必要であるといふのは、緊張した精神を持し

て居なければ、自分のその時その精神をもつて言葉を捉へ來るといふ困難な事は出來ないからである。此事は實際困難な事で、謂はゆる藝術的良心の强いものによつて初めて成し得られる事である。此方の精神が弛緩してゐると精神を以て言葉を捉へ來たる反對に、言葉の方へ此方の精神を以つて行つて托してしまふやうになり、忽ちにして謂はゆる流暢なる言葉に墮落して行つてしまふ。

ここに云ふ調子のある言葉の奥を捉へ得た歌人といふ者は、極めて少いものである。生涯をその爲に費した景樹の如きさへ後人から非難を蒙ることを免れ得ない程である。

第七章　秀歌の解剖

一、古名家の踏んだ道程

以上、概略ではあるが、作歌の目的方針の何ういふものであるか、用語につき、趣向につき、調子について、如何なる用意を持つべきものであるかは云つた譯である。今は、かうした用意の下に詠まれた謂はゆる秀歌を取つて、これらの用意を如何に實現してゐるかを觀て、以上の事を一層明らかにするべき事となつた。

その前に、謂はゆる高名の歌人といふものは、何ういふ道程を踏んだ者であるかを思つて見るのは、適當な事であらうと思ふ。

高名の歌人とは、異つた言葉でいふと、最も深く歌に苦んだ人といふ事である。即ち最初に云つた、「歌道」の上に、その生涯を捧げた人である。彼等も歌の詠み初めには定めて拙い歌を詠んだ人であつたらう。しかし拙いといふ事の爲に失望して、歌から離れて行かなかつた人である事は極めて確かな事である。藝術は歌に限らず、文章でも繪でも、また末技と稱せらるる

碁將棋のやうなものでも、上手でなければ面白くないといふものではない。その面白いといふ上からいふと、上手も下手もさしたる違ひはないものである。しかし、心を盡してその事をするのでなければその面白みは味ふことが出來ない。彼等が下手ながらもそれから離れずに詠み續けて行つたといふのは、この心を盡して詠むといふ事をし、その爲に面白みを感じ、離れる離れないなどといふ事は思ふ間もなく、その事に惹かれ、その事に溺れて行つたものだと思はれる。

詠歌に面白みを感じ、面白いが故に專念詠み續けるといふ狀態にあつた彼等はその狀態に於て歌といふものと次第次第に關係が深くなつて行つて、その中には歌と自身とは全く同一のものとなるやうな深い關係をまで結んで行つたのである。さて其の關係の深まり方は、大凡何んな工合であつたらうかといふ事は、必ずしも察し難い事ではない。

最初には彼等に取つても、歌といふものは自身とは殆ど關係のない一つの世界に見えた事であらう。即ち歌といへば、古人によつて詠まれて、書物の中に貯へられてゐるものであつて、自身とは親しみのないものであつた。さすがにそれを讀むと、一種の面白みを感じて、自分も詠んで見たいといふ心持は起すものの、何となく面倒らしい一種の壓迫を感じるといふやうな

ものであつたに違ひない。即ち關係の極めて薄い、全く身外に横たはつてゐる一つの他の世界であつたのである。

彼等は、それ〴〵或る時一首の歌を、その書物の中にある歌を眞似をしたに過ぎないやうな歌を詠む事によつて、その世界と自身との間に、以前より親しい關係を發見した。そしてそれが非常に嬉しかつたのである。

歌といふものに關係が附き初めると、その關係を深いものにしなければゐられない要求が彼等に起つたらう。それをするには先づ、歌といふものは何ういふものか、即ち何ういふ「格」を持つたものか、何ういふ「型」を持つたものであるかを知りたくなつた事であらう。歴史といふものを大きく觀、反對に自分を小さく見ようとする時代にあつては、現今の者には想像しかねる程の心持をもつてそれを知らうとした事であらう。そして書物の得やすくもなかつた當時の事とて、是非ともその道の先輩を師としてそれを學ぶより外はなかつた。

かくして「格」を學び「型」を學んで、古歌を模倣した歌を如何に多く詠んだ事であらう。即ち彼方にある歌の世界の中へ、自身といふものを沒して持ち込んで行き、古人のした生活を繰り返したのであつた。

その中に「格」として「型」として仰いで居たものは、足の下にある物となる日が來た。「格」も「型」も、古人が自身の心を抒べる上で、さうするのが便利だと思つて行つて居た一つの手法に過ぎないものであつて、後の者がその手法にさういふ名を附けたのに過ぎないものである事を會得して來たのである。さう思ふと共に、苦んで入つた「格」も「型」も、離れて出て行かなければならないものになつて來た。同時に、歌には「格」も「型」もない。否、無いではないが、さういふ物よりも、自身の心の方がもつと重んずべき物である。自身の心を盡して詠みさへすればそれで十分であるといふ事を會得したのである。

かういふ信念を持つと同時に、今までは身外に存在して居た歌の世界が無くなつてしまつて、歌とは自分の胸にあるものである、自分の思ふ事を抒べたものが即ち歌である。我が即ち歌であるといふ信念を持つやうになつた。

かうした信念に到達して、初めてその人の歌が詠め出すのである。一家の特色を備へた歌といふのは、この境涯から詠まれた歌である。

此道程は歌ばかりではなく、何の道に於ても、苟くも一つの道に志した人で、初志を守つて動かなかつた人の踏んだものである。「格に入つて、格を出づ」といふ言葉があるが、この境涯

を語つたものである。「型を破つて出る」といふのも同じである。「古を成す」といふのも、古の名家も他に法があつたのではない、一にその心を盡すことによつて其處へ到つたものだと思ひ得、我もそれをしようと思つて仕終せた人に對して云つた言葉である。

一定の方針を立てて修行を積んで行き、我が心を盡すといふ上では古も今の如く、今も亦古の如しで、少しも違ふ所がない。古の高名の歌人といふのも、誰しも持つてゐる自身に對して の誠實と、誰しもなし得る自身の爲の忍耐とを常人よりやや多量に持ち得たといふに過ぎないのである。

二、大隈言道の自然の歌

大隈言道は近代の巨匠の一人である。筑前福岡の人で、慶應四年に七十一歳をもつて歿した人である。今作例として、その歌の十首ばかりを引くことにする。

○

長閑な春の夕暮に、作者は何事にか心を捉はれてぼんやりしてゐた。(春の夕暮にはさうした物思はしい狀態にされがちな事は誰しも經驗してゐることである) ふと鐘の聲が聞えて來て、

一つ鳴つたきりで止んでしまつた。後の續かないのによつて、それは何時も夕暮に鳴る鐘の一番終りの聲であることに心附いた。すると、今まで鳴り續けてゐた筈の鐘の聲が耳へ入らなかつたのが不思議な氣がして、一體何時から鳴つてゐたのだらうといふ氣がした。

心に緊張を與へられる程の事柄ではないが、そのままにしてしまふには惜しいやうな感じのすることである。作者はそれを歌にした。歌にするに當つては、心に感じた通りをすらりと現はした。事柄をあつた順序通りに云ふと、上に云つたやうであるが、その總てを云はうとすると一首の歌には纏まらない。併し心持からいふと、一首の歌で澤山な程のものである、それで作者は、終りの鐘の音を聞いて怪しく感じた瞬間の心持を云ふだけに止めて、春の夕の長閑さも、心を物に捉はれてゐた事も、鐘の音を聞きもらした事を云ふ事によつて自然に現はれるものにしようとした。卽ち事柄を凝集させて單純なものにしようとした(この事は歌のやうな形式の短いものにあつては極めて必要な事である。)さて凝集して單純にする法はといふと、複雜した事柄を短い言葉に押し詰めるのは、かうした輕い趣を云ふは、適當な法ではない。又單純といつても、單に事柄を省略しての單純であつては味ひのないものになつてしまふ。全部を含んでの單純でなくてはならない。さういふ理由から作者は、事柄を云ふのではあるが、事柄全

體を一應心の中へ入れて溶かしてしまつて、それを感じに變へてしまつて、今一度事柄として流し出す方法を執つた。（これは歌の上で最も普通な手段である。）

さて事柄からいふと、終りの一聲だけを心附いたのであるから、それが一首の大事な所で、中心とするべきものである。その次ぎは、一體何時から鳴つてゐたのだらうといふ怪しみの情である。これは前の事柄に續いて起つた感じで、相待つて一つの纏まつた味ひを成すものであるが、しかし前の事柄程重いものではない。歌では頭の重く、尻の輕い事を厭ふので（その理由は前に云つた）ここは作歌の術として倒さにするのが至當である。そこで作者は、第一に「何時よりか入相の鐘は鳴りつらむ」と、先づ上三句を詠んだ。誠にあり通りであつて何の巧みも加へては居ない。しかしここに注意すべき事は「入相」といふ言葉を鐘に添へた事である。この言葉はこの場合大事なものであるが、ともすると、餘りに眼前な事なので、忘れようとする事である。實際その場合の感じからいふと、「何時よりか鐘は鳴りつらむ」といひたいところである。それへ「入相」といふ言葉を添へて、感じといふ上からいふと、その感じを一歩離れて見ての上で説明の言葉を添へてゐるのは、その感じをそのままに他人に傳へようとする歌にあつては極めて大事なことである。この餘分にも思はれる説明の言葉があつて初めて感じが丁度に

傳へられるのである。客觀化といふのは此の事である。作者は次ぎに、大事な事實を云つて來た。それは「心づきたる果ての一聲」といふのである。これは如何にも事實をはつきりと言ひ現はし得た言葉である。「心附きたる」といふのは、それに相違ない事であるが、この口語脈を含んだ句は、却つて歌の上では云ひ難いものである。「果ての一聲」といふ句も、引き締つた、力のある句で、結句として然るべきものである。作者はこれへ題を添へて次ぎのやうに云つてゐる。

晩　鐘

何時よりか入相の鐘は鳴りつらむ心づきたる果ての一聲

さて以上のやうにいふと、作者は如何にも苦心して詠んでゐるやうであるが、實は容易く詠んだものだらうと思はれる。しかしその容易さは、苦心の結果として得たものである事は云ふまでもない。

○

早春の頃に作者は、何等かの用事を持つて或る村の中の道を歩いて居た。吹くともない風の吹いてゐる日であつた。（早春の頃にはよくある事だ）。その風と一緒に、梅の花の香がして來

た。（風の吹いて來る方向に梅の木のあるのが知れた）。すると、そのままそこを通り過ぎてしまふに忍びなくなつて、行かうとする道とは違ふのであるが、暫く躊躇した後に、其方の方へと曲つて入つて行つた。（そして思ひ懸けない看梅をした。）

作者はこの看梅を歌にしてゐるが、肝腎の看梅の事は云はずに、それをするまでの所を歌にしてゐる。普通からいふと、歌のある所を捨てて歌の無い所を捉へてゐるのが、先づ心にくく思はれる。高手にして初めて出來ることである。それから又、何所までも實際を離れずに用足しの途上の出來心の看梅といふ、歌としては詠みやすくない複雜した氣分を現はさうとして現はしてゐることは、一層に高手でなくては出來ない事である。

風が傳へて來る梅の花の香に出來心を起してといふ心持を、作者は「梅かをる風に迷ひて」といふ二句で現はしてゐる。平坦に云つてゐるやうではあるが、その實極めて緊密な句である。「迷ひて」といふ言葉の微細な働きは、その後を讀めば自然に感じられる。そして歩いて來た里中の道を、その香のする方へと、俄に方角を變へて行つたといふ事を「そなたへと俄に折るる里の中道」といふ三句で現はしてゐる。さて事柄の順序からいふと、第三句目に「里の中道」といふ句があるべきである。しかし此の歌では、「里の中道」を曲つて入り込んで行つたことが

中心になつてゐるので、例の中心を重く現はす爲に結句へ持つて行く必要があつた。それに又、「風に迷ひて其方へと」と、句と句の續け工合を直接にして行かなければ、第一意味が通らず、第二には感情の調子が拔けてしまふ所からさういふ風にしてゐるのである。（句の續け方は前に云つた。）「俄に折るる」といふ句は味ひのある句である。この「俄に」といふ言葉は、第二句の「迷ひて」と響き合つて、微細な心の働きを現はしてゐる。卽ち出來心を起して、多少思ひ惑つて、急にといふ程の心持である。單に慌しくといふ意味ではない。次ぎに「里の中道」を折れて入つたといふので、その梅が小路の奥の方にあるのも自然に知られるのである。

單純に、自然に言ひ下してはあるが、誠に複雜した場合と心持とをよく現はしてゐる作である。書き直すと、

行　路　梅

梅かをる風に迷ひて其方へと俄に折るる里の中道

といふのである。

○

作者は夏の日に小川の水を眺めて立つて居た。それは誠の小川で、底にある小石も水を透い

てはつきり見えてゐる。流れる水は、その小石に障り障して、波といふ程でもないか、波らしいものを立て立てして流れて行く。作者はその様子が面白くて見恍れて居た。(誰にもよくある事である。)いや面白いといふのは當らない。寧ろ可愛いといつた方が近い。いや可愛いといふのも當らない。寧ろ幼い子供らしい様子といふ方が近いと感じた。作者は此の微細な感情をそのままに現はさうとして、そして見た通り、思つた通りを云つてゐる。

小　流

小流の小石に障へて行く水の波立たしげに見ゆる幼さ

作者の現はさうとした中心は結句の「幼さ」である。しかしその幼さは、小流の持つてゐるもので、それを十分に云はなけば現はすことが出來ない。慌しくそればかりをいふと、一つの感想になつてしまつて、藝術としての味ひのないものとなつてしまふ。で作者はその一句にも足らない心持をいふ爲に、小流の狀態を丹念に云つてゐる。柔らかな、しかも緊密な「波立たしげに見ゆる」といふやう適切な狀態描寫をした上で、初めて云つてある「幼さ」なので、それが如何にも利いたものとなつてゐるのである。

○

初夏の頃、作者は山里へ行つて、或る貧しい家の軒の下近い所に、山吹の花が美しく咲き盛つてゐるのを見た。美しい山吹の花と貧しい山家とは既に對照が似合はしくない。それに又、その家には、その花のある方には戸口が無いばかりではなく、窓さへも明いては居ない。美しい山吹の花は、咲き場所を誤つてゐるばかりではなく、見られることもないのが一と目に察しられて、それが口惜しい氣がした。作者はそれを歌とした。歌にするに當つて作者は、その口惜しい心持を云ふまいとした。美しい物が居るべき適當の所に居ないのを嘆き怒る心は、限りなく歌に詠まれてゐる。その事は、その狀態をはつきりと云ひさへすれば、誰にでも自然に感じられることで、云はない方が却つて深く感じられることであると思つた爲であらう。

山吹の花が一首の中心であるから、例によつて結句へ据ゑることにした。今見る山吹の花は、山里の家の側にある。その位置は、山吹の花に冠らすべきものとして、「山里の家の外面の山吹の花」と三四五の句を作つて、そして見られることのない口惜しい心を、その境から得た感慨を、云つたやうに形として、「そなたには窓さへなくて」といふ言葉を以て現はした。即ち花のある方には、戸が無いのみならず窓までも無くてといふ意味である。書き直すと、

山　家　山　吹

其方(そなた)には窓さへなくて山里の家の外面(とのも)の山吹の花

といふのである。一讀何でもない歌のやうに見えて、しかも心惹く所のある歌で、それは全く一二句で、主觀を客觀化した爲である。高手だと思はれる。

○

作者は秋の月をただ獨りで眺めて居た。誰にもあるやうに、靜かな清らかな月に對してゐると、作者の心には一脉の寂しさが起つて來た。そして一緒に月を觀る人を欲しくなつた。さうした心持でゐると、月光が描き出した自分の影法師がふと目に着いた。この影法師よ、そのやうに背後の方にばかり隱れて居ずに、せめて側まで出て來て自分と並んで居て、そして一緒に月見をせよといふ氣がした。

作者はその心を歌として、

獨　居　月

隱れ居てわが蔭去らぬ影法師居並びてだに月は見よかし

と詠んだ。見る通り、寂しい、相手欲しい心に映つて來た實境を捉へて、そのままを言葉としたものである。かうした歌はともするると、着想奇拔だなどと評されて、詠み難いもののや

うに云はれることがあるが、凡手には詠めない事は事實であるが、作者からいふと寂しい心に形を與へたもので、その形はその時の作者の在りのままの狀態だつたのである。卽ち主觀をその時の極めて自然な方法に於て客觀化したのに過ぎないものである。

○

作者は秋の朝、草の葉に宿つた露をしみじみと眺めて居た。最初は露の清らかさ、愛らしさなどを感じてゐたらうが、眺めてゐるうちに作者の平生胸にある一つの心持は、その露の上に現はれて來た。それは露が、宿るところもあらうに、草の上葉の危いところを選びて、宿つてゐることである。そしてその狹いところに、窮屈さうにして、宿つてゐながら、しかもさうしてゐるのが樂しさうに、人で云ふと、端居(はしゐ)したやうな恰好で、宿つてゐるのである。(その樣は、芭蕉の「白露や無分別なる置きどころ」といふ句の心を思はせる)。それでは轉び落ちるかといふに、案外に轉び落ちもしずに、晏如としてゐる。その露の姿は、自分を貧しとして、貧しさを忘れて道を樂しんでゐる心に似てゐる。作者は今、自分の境涯を、その露の上で發見したのである。

さて作者はそれを云はうと思つたが、今の場合、よく人のするやうに、露を譬喩にして、自

分の心持を云つてしまつては、餘りに露骨で理窟ぽいものになつてしまふ。作者の藝術心はそれは許さない。そこで、思ひ切つて心持の方は云はないことにして、さうした心で見た露の狀態だけを云ふことにした。そしてそれをしさへすれば、一見間接のやうではあるが、却つて自分の心持を十分に、卽ち理窟としては云へない複雜した心持を現はせると思つたのである。

危き所にも安んじて居れば、安んじてゐられる所の露よといふ心を、

露

所せく草の上葉の端居してまろびも落ちぬ露のしら玉

と詠んでゐる。「所せく」といふのは窮屈さうにの意で、言葉のもとの意味は所狹くといふのである。上三句は、窮屈さうに草の上葉に端居をして、の意である。この表現は行き屆いた、且つ緊張したものである。「所せく」といふ言葉は、文章にはよく用ひられてゐる言葉であるが、歌としては用例の少いものである。四五の句は、上を承けて轉じて、それでゐて轉び落ちもしない露の玉かなの意である。結句の「露の白玉」といふは何でもないやうであるが、白玉といふ譬喩に重さも美しさもあつて、此の場合の心をよく現はしてゐる。

かうした狀態描寫は、不用意に見ると、着想の奇拔を求めたものとも、又は觀察の細微をも

とめたものとも思はれるが、作者からいふとさうした心持は全然なく、平生胸にある心持が、露に對することによつて自然に發して來たものである。卽ち物象を借りて作者の主觀をあらはしたもので、心の境涯を客觀的に描き出したものと見るべきである。

今は言道の歌の評釋をしようとするのではなく、一首の歌の纏め方の例として云つてゐるから、餘り一人に偏るのも如何であるし、又それ程の要もなからうから、以上だけで止めて置く。そして次には、自然を對象としたものではなく、自身の心持を直寫した方の歌を擧げて行くこととする。

三、橘曙覽の抒情の歌

橘曙覽は越前福井の人で、言道と同じく近代の巨匠の一人である。慶應四年に五十七歳を以て歿した人である。

ここに引くのは抒情の歌で、抒情の歌が如何にして詠まれるかの實際を觀ようとしてである。又さういふ上から見ると、謂はゆる連作の歌の方が便利な點があるので、それを引く事とす

る。

○

作者の知人に、幸山長遠（ゆきやまながとほ）といふ醫術の心得のある人があつた。國粹發揮の念を持つて居た人で、その點で作者と心が合つて居たと見える（維新前の事とて、さうした思想を持つてゐる者は少なかつた。）この人は、その修めて來た醫術によつて國粹を發揮しようとした、それには、我が國で發達して來た醫術で、今は亡びようとしてゐるものを、出來る限り蒐集して置かうと志し、その事に着手したが、十卷で一部になるべき書物を、七冊まで書いた時に病氣に罹り、その事を果し得ずして死ぬのを口惜しがりながら死んでしまつた。作者がその人の死後に弔ひに行くと、妻であつた人は夫の心中を憐んで具に話した。作者もその心を憐んで、靈前へ歌を手向けたのであつた。

さて、作者が長遠の靈に對つて第一に思つたことは、志を果し得なかつたのを憐む心であつた。志すところは一部の書物を書き終へることである。それだけの事すら出來なかつたのは、その人と共に悲しいことである。死生は天命である。世に在るも無いも一に天命で致し方のないことである。愚痴に陷るべきではないが、しかし天に對しても怒りを思はずにはゐられない

といふ事であつた。作者はその心を、

一部（ひとと）の文書き終へむ程をだにこの長遠を世には在らせで

と詠んだ。歌の意味は前に云つた通りであるが、この歌を讀んで第一に感じることは、作者が自身の感じた通りを直寫して、少しの誇張少しのお座なりも云つてゐないことである。追悼の歌などといふものは得て誇張と、お座なりに陷りやすいもので自身の感情を守つて動かない程の正直と強さが無いと出來ないことである。そして抒情の歌の活き死には、一に此れが守れるか守れないかの一點に繫つてゐる。何が感情の眞を守つた點かといふと、云つてゐる所は、單に死を悲しむといふのではなく、志を果せなかつたのを憐む心である。即ち事業を生命としてゐる男子が、その事業を果すことの出來なかつたといふ一點を、此方も同じ心を持つてゐる男子として述べてゐるのである。丈夫が丈夫に對して云つてゐる言葉である。それに又作者は、死といふ事に對しても、世俗のやうには云はず、死といふ事に對して、自身の抱いてゐる心持の上から述べてゐる。「世には在らせで」といふのが即ちそれである。その意味は、「長遠なる者を、この世には置かずして」といふので、生死は測り難い天命で、しかも靈魂は、その身は亡びても亡びずに存在してゐるものと信じて（作者の信じてゐた神道の精神によつて）云つてゐる

るのである。

この、作者の感情の眞と、それを一氣に云ひ下してゐる所に、自然に嘆きと、餘儀なさとの相まじつた情が強く現はれてゐて、誠に丈夫の丈夫に對する追悼の歌となつてゐる。「長遠」といふその人の名を詠み込んであるのも、萬葉集時代にはよくした事で、必ずしも珍しい事ではないが、その人をしつかりと其所に現はし得ることで、強さを添へる上で極めて有效な事である。

○

この一首だけでは、作者は心の總てを盡し得たとは思へなかつた。この歌は、長遠が志を果し得なかつたのを悲しむ心に驅られて、悲しみの情を云ひ過ぎた感がある。志は果さなかつたといふものの、現に、ここに一部十卷の書の中、その七卷までは書いてある。しかもその七卷は、曾て此世に存在して居なかつたところの尊いものである。その功績だけでも、立派なものといはなければならない。さうだ、一つの功績を樹てえたものである。それは讃へるに足りるものだと思つた。作者は次いでそれを詠んだ。

一部(ひととも)に滿ち足らずとて嘆かめや世に無き文を書きし七卷(ななまき)

意味は上で盡きてゐる。四五の句の「世に無き文を書きし七卷」といふ表現は、如何にも緊張を持つた、適切なものである。「尊き文」をといふやうな弛緩した、抽象的な表現をすると、この慰めの心も、力の無いものとなつて、その心の現はれないものとなつてしまふ。「世に無き文」といふ具體的な表現をして、初めてその物の尊さが現はれる次第である。しかもそれは事實で、事實を適切に云つたものである。適切に事實を表現をするといふ事は、緊張した精神を持つてゐなければ出來ない事であるのが、この邊でも窺はれる。

○

世の爲に一つの功績を樹てえたのだと慰めると、更に慰めの心を盡したくなつて來た。さうだ、その功績は全いものだとは云へない、しかしながらその功績は、誰かが全いものにして呉れよう。卽ちこの立派な精神を承け繼いで、それを完成させようとする者が、將來必ず出る時があらう。さうなければ長遠の果しえなかつた志は果され、自然長遠の功績も全いものとして現はれる譯である。それに又、長遠の志したことも、畢竟は世の爲である。誰の手によつて完成されても完成さへすれば長遠は滿足しうる譯であると思ひ續けて來た。その心を更に一首の歌に詠んだ。

書き繼がむ人また有りて汝が功績(いさを)終には全くならむ行末

○

さて、最初の一首で悲しみの心を抒べ得、次ぎの二首で慰め心を抒べ得た。心は略ぼ盡し得た。しかし靜かに思ひかへすと、友の死を見て、その死の一點だけを重く見過ぎ、それに捉へられた形となつて長遠といふ丈夫を、生きてゐた長遠の精神の高邁を云はずに居た。今は死といふ事を離れ、全體として觀た長遠に對しての心を云つて、故人となつた友に最後の情をいたすべきだと思つて來た。長遠の精神はかの汚き外夷、又は支那をのみ過重してゐる一般の者の心情を憎み、皇國に古からある醫術を明らかにし、それによつて皇國の尊さを發揮しようとしたのである。而して、さうした精神を起し、さうした事に着手した者は、世に醫術を修めた者も多くはあるが、ただ一人友の長遠があつたのみである。それを思ふと長遠の精神は誠に尊ぶべきで世の一人者と云はなければならない。その心を作者は歌とした。

夷唐土(えんしから)きたなき國の術(すべ)からぬくすしの書(ふみ)を一人書き出づ

「術(すべ)からぬ」は術ならぬの意、「くすしの書」は醫書である「一人書き出づ」といふ結句は、如何にも緊張と適切を持つたものである。「一人」は世にただ一人の意である。「書き出づ」と現在

として云つてゐるのも、力强さを添へてゐる事である。

○

作者は本保(ほんぼう)といふ村へ行つた。そこに「吉野瀨の橋」といふあぶない橋がある。作者が以前その村へ行くたびに、作者の叔父にあたる老人で、今は故人となつた人が、「あの橋はあぶない、氣を附けて行け」と注意をして呉れた。それでその橋を渡るたび毎に、その言葉を思ひ出すのを例として居たが、今日また其所へ來ると、老人のさういつて呉れた情が、身にしみて思はれた。

心せよといひし一言いつもいつも思ひぞわたる吉野瀨の橋

故人を思つて、靜かに、あつさりと心を抒べた歌ではあるが、しみじみとした作である。かうした輕い哀愁は、誰しも心に持つてゐて、言葉になし得ずにゐるものである。なぜ言葉にならないかといふと、それを事柄に托すことが出來ないからである。心は心としては現はせない事に觸れて思ひを發しる。その瞬間に於て、事と共に捉へるのである。そして、心を靜めて、事を主として詠めば、おのづから現はれて來るものである。この歌の如きは卽ちそれで、ただありのままを云つてあるのみで、何の巧みをも用ひては居ないと云へる。心を發した時の狀態

そのものが卽ち心といふ事は、老手でなくてはうまく行かないものであるが、しかも誰にも出來る事である。

○

吉野瀨の橋を渡つて、先へ進んだ時である。友人の島崎某といふ人で、本保の出先へ作者を訪ねて來たのと逢つた。某は作者に、隨意に行く方へ行つて呉れ、此所で逢つただけで十分である、これで別れようといつた。作者は滿足が出來なかつた。それでは本保の通雄の家へ行つて、話でもして別れようなぞと云つて、佇んでゐるうちに詠んだ歌は、

いざ來ませ通雄(みちを)が家は酒もあり主人に乞ひて飲みて別れむ

といふのである。意味は、通雄の家には酒がある、貰つて飲んで別れよう、さあ行かうといふので誠に口頭でいふ言葉を歌の形にして云つたといふに過ぎないものであるが、歌といふ形式を十分手に入れてしまつて、それを樂に使ひこなしてゐる爲に、おのづから一種の味ひが添つて來て、棄て難い抒情の歌となつて來てゐる。歌の面白みといふものは、力を入れて詠むところばかりではなく、かうした所にも案外に現はれるものであることが知られて、「歌」といふものに對しての親しみを覺えさせられる。

かうして例を擧げて行くと、限りないまでにあるが、抒情の歌を詠む手心は、以上のものを讀み味はつただけでも略ぼ解せられると思ふから、以上だけで止める事にする。

（第一篇終り）

第二篇　作歌上の諸問題

一、大隈言道が添削のあと

佐々木博士の努力によつて大隈言道の歌集とその人と爲りの發見され紹介されたことは、我國の歌の上から觀て、大いなる意義のある事である。博士はその歌集の一部を續歌學全書の中に收められたのを初めとし、近世名家歌選の中には、近世の大歌人を、萬葉派、古今派、獨創派の三つに分け、その獨創派を代表するものとして更に言道を擧げられ、同時に、歌學論叢、心の花、その他の物の上で、言道に對する研究を發表して、この埋もれて居た歌の光を發揮するに努められてゐる事は、我々の等しく感謝してゐる所である。

私が初めて言道の歌を讀んだのは、近世名家歌選に於てゞある。初めはそれ程にも思はなかつたが、讀み進めて行くに隨つて、近世の歌人を貫いて流れてゐる實景實情を詠まうとする精神が可なり高い程度にまで發揮されてゐる點に牽きつけられ出した。それに續いては、極めて多作であるにもかゝはらず歌の粒が揃つて居て、屑といふものゝ殆ど無いのは心を牽かれた。

更にそれに續いては、今から見ると、當時の歌人には餘りにも多くあり過ぎると思はれる經世家の態度がなく、何所までも自身を一歌人として、歌といふものに沒頭し耽溺して詠んで居たと見えるその詠み口を懷かしいものと思つた。そして靜かではあるが飽くまでも世味を味つた、鋭いとまでは思へないが如何にも行き屆いた、その歌の持つてゐる一種の味ひに醉つて、卷の終るのを惜しむ心で讀み續けたのであつた。

もう少し言道の事を知りたいと思つて居るうちに、岡山縣の正宗敦夫氏が歌文珍書保存會といふものを組織して名の如き書物を會員に頒つてゐる中に、言道翁全集といふものが加へられて居り、殊にそれは言道が自選の集を出す前に、稿本を添削のままを活字に移したものだと聞いて一層見たくなり、漸く手に入れて今は讀み始めて居る所である。

以上のやうな次第で、私が今言道の歌に就いて何事かを云はうとするのは、早まり過ぎた事ではあるが、この書物は云ふ通り會員にだけ頒つ非賣品もので、讀者の多數は多分は見て居られまいと思ふ所から、この近世の巨匠が自分の歌に對して何んな添削を加へて居るか、その見本を紹介しようといふ心から一部分を此所へ拔き出す事とした。尤も此所へ拔くのは初めから順次にするのではなく、飛び飛びにするのである。

○

いや高くなるかと思へば更に又この下音なる鶯の聲

これは原作である。捉へてゐる所は鶯の高く低く聲を弄してゐる所で、狙つた味ひは多分、次第に高め高めて行くかと思つた聲を、ふと低く落したといふ所に一種の人間味を感じたのであらう。

改作したものは、意味は少しも變へずに、措辭だけを改めて、次ぎのやうにしてある。

いや高くなるかと聞けば鶯のこの下音にも音を變へて啼く

この一首の添削のあとを見ても、言道が如何なる精神をもつて歌を詠んで居たかといふ事は、或る程度まで窺はれる感がする。即ち原作は、その中心として居る所は鶯の聲その物で高めて行くかと思つた聲を又低めて來たといふ所で、そこに主觀を寫したのである。然るに改作したものは、鶯の聲よりも鶯その物を中心として來て居る。更に云ふと、鶯の聲に依つて我が主觀を現はさうとするのを暫く抑へて、先づ鶯その物を活かし、さうする事によつて、我が主觀をより自然に現はさうとしたのである。

今、形について見ても、原作では、二句に「なるかと思へば」と抽象的に云つたのを、具象

的に「なるかと聞けば」と改め、更に原作では、第五句に「鶯の聲」を据ゑて、それまでの四句を形容詞句のやうに扱ひ、三句には「さらにまた」といふ抽象的の言葉を續けて居るのに、改作の方では、三句に「鶯の」として、何所までも景その物に即した表現をし、そして結句に、「音を變へて啼く」といふ眼目の心を云つて、渾然とした姿の中に、その主觀をあらはさうとして居る。

心に即し過ぎた、隨つて抽象的な歌から、形に即した、隨つて具象的な歌へ、あらはではあるが、説明的な歌から、隱約には見えるが、客觀的な、渾然とした歌へと移つて居る所に參考とすべきものがあると思はれる。

○

三日月

さながらにありつるものを目惑ひに失はれたる三日月のかげ

ほのかな三日月に對して、ふとした在所を誤つて、今まであつたものが無くなつたやうな、輕い驚きをする事は誰しもある事である。この歌はそれを捉へたので、そして前の歌と同じやうにさうした事の中に深い人間味を感じて、感慨を先きに立てて詠んだものである。

この歌は改作して次ぎのやうにしてある。

さながらにありつるものを暫し我が見失ひたる三日月のかげ

改めてある所は唯三四の二句だけで、原作は「目惑ひに失はれたる」を改作では「暫し我が見失ひたる」としてあるだけである。

この兩方を較べてみると、原作の方が實際に卽いたもので、そしてその實際を細叙したもので、改作の方は、實際をやや離れて見て、そして略叙したものである。この實際に卽くと、やや離れると、細叙すると、略叙すると、何方がよいかといふ事は、一概には云へない事であるが、今此歌の場合で見ると、原作は改作に較べて、感味の散漫な、品位の劣つたものだと云へる。

實際に卽けば卽いたで趣があり、細叙すればしたで趣があるが、それは横の趣で、同時に縱の趣が添つて居なければ力の乏しいものとなつてしまふ。言道の歌は、謂はゆる小味な所に趣があるが、しかもこの「目惑ひに」といふやうな單に言葉として見ても面白い、彼としては恐らくは其時は得意であつたらうと思はれるものを棄ててその代りに「暫し我が」といふやうな極めて素朴な言葉としなければならなかつた所に、彼の精神が思はれる。

○

柱

假睡めば寄り添ふ閨の柱さへ一木の花の心地こそすれ

この歌は、四句の「一木の花の」を「花の一木の」と改めてある。何でもないやうではあるが、さう改めた爲に、唯一本の櫻の木といふ感じが、多くある櫻の木の中の一本といふ意味になつて來て、言葉としては遙かに作意に近いものになつたらうと思はれる。又假りに同じ意味だとして、單に言葉として見ただけでも此の場合は、「一木の花」よりも、「花の一木」の方が言葉の續きが順當で、適確の度を加へて來る事になる。

○

柚月

立ち並ぶ柚山松を切りしより思ひもかけず出づる月かげ

此歌は類歌の多い、云ふ程のものでも無いが、改作は二句の「柚山松」をといふのを、「柚の松山」と改めて、「の」を添へて「を」を削つてある。作者の意は、その「を」を削る所にあつたらうと思はれる。原作と改作とを讀み較べて見ると、「を」と云ふ助辭は強い意味をもつた助

辭であるにも拘らず、この場合には、それのあるが爲に一首を散漫にしてしまひ、心に響く力を弱いものとしてしまつて居る。言葉と語調といふものの關係を思はせられる改作である。

○

かうして擧げて來ると苦心の跡の思はれるものが限りなくなる。

二、統一した味ひといふ事に就て

歌を詠み初めた人に寄せる書

お需めのまゝに、一日の長ある者として歌話を一則申上げようと思つて筆を執ります。

豫めお斷りして置かなくてはならない事は、私の歌話には何の新規な事もないといふ事です。實際歌話は、作歌の態度、用意などといふ事は、古人に盡きてゐる。現在とは用語が多少違つて居、又簡潔に云はなければならなかつた必要などから、今から見るとややそれに過ぎた點などもあつて、何となく間接なもののやうな感じがするのであるが、少し我慢して、嚙みしめて味つて見ると、さすがにその道の上で生涯を費した人の言葉だと思つて感心しずにはゐられないものが澤山あります。博文館から出版されてゐる「和歌叢書」の中に「和歌作法集」といふ本があります。得やすい本で、又讀みやすくもなつて居る本ですが、その本を一冊讀んだだけでも、實際學ぶに餘りあるといふ感を起させます。

それはとにかくにして、今私は、自身の思ひ寄りを申す事にします。作歌といふ事に指を染めた際、第一に問題になつて來る事は、一首の纏まりといふ事です。短歌といふ一定の形式を持つたものを作らうとする以上は、内容をその形式に過不及のないものとして行かなければなりません。この事は、本當の意味での歌の詠み初めの人々は案外樂に行つて、さう問題にならないやうですが、少し詠み進んで來ると、又案外にも面倒な事になつて、改めて問題となつて來るものゝやうです。

今一首の歌の取り纏め方といふ問題を限つて申上げようとするのですが、私はその事を自身の話し易いやうに言ひ換へて、次ぎのやうに云はうと思ひます。それは一首の歌は一つの統一した味ひを持つて居なくてはならない。この事をはつきり腹へ入れるのが作歌の上では何より大事な事だといふのです。

一首の歌は一つの統一した味ひを持つて居なくてはならないといふ事は、餘りにも分りきつ

た事で、問題にするにも及ばない事だと思はれるかも知れませんが、實地に歌を詠んで行く場合には、案外問題になるものです。それについて私は思ひ出して來る幾つもの實例を持つて居ます。

三木露風君が私の爲に詩の話をして呉れた事があります。三木君はその中の一節として「詩は何よりも先づ、しやんと額縁の中へをさまつたものでなくてはならない」といふ意味の事を聞せました。額縁の中へをさまる、何といふ解りやすい、適切な、いい譬喩だらうと感心して聞いて、今に忘れずに居ます。この譬喩が何ういふ事を意味してゐるか君には分つてゐるでせう。それは詩は何よりも統一した味ひを尊ぶものである。何の行も何の聯も、オーケストラに於ける一つ一つの樂器のやうなもので、單にその行、その聯として美しいものだけではなく、同時に相合して一つの美しい旋律をなすがやうに、全體が一つの統一した味ひになつて行かなければならない、それが肝腎な事だといふのです。

この統一した味ひといふ事は、單に詩ばかりではなく、短歌でも、又は小説でも、苟くも文藝品である限りは何よりも大事なものです。優れた文藝品は、部分の美といふことも大事ではあるが、それよりも大事なのは、それを讀み終つた後、全體として與へる所の味ひ、胸で味はせる所の味ひにあります。

しかし此の統一した味ひは、知名の作家の作にも必ずしもあるといふ譯には行きません。三木君が詩の話をされた時にも、額縁にをさまつた詩はさう多くは無いといふ事を云はれたと記憶して居ます。又此頃、半田良平君が「國民文學」の誌上で、この頃流行してゐる連作の歌の中には、一首として切り離して見ると、獨立性の乏しいものがある。假令連歌にもせよ一首の歌である以上は、一首としての獨立性がなくてはならないといふ事を論じて居ました。これは私も同感の事で、然るべき歌人の作でありながら、連作中の一首を切り離して見ると、意味すらもなさない物のあるのを見て不思議に感じて居ます。半田君は獨立性といふ言葉で現はして居ましたが、私は今の場合は一首としての統一した味ひの無い作だと言ひ換へたいと思ひます。一首としての統一した味ひ、この約束を守れない歌は必ずしもさう少いものでは無いと云へませう。又、これは話が少し離れますが、或る有名な小説家が、短篇小説として書いたものを、そのまゝ長篇小説の一部として書き入れてある、ああいふ事は何ういふものだらうと、或青年が私の友人に質問して出したといふ事を聞きました。小説にあつても、一つの短篇小説は、或る統一した味ひを持つてゐるべきで、それがそのまま長篇小説の一部となるといふ事は如何か

と思ひます。それだと短篇小説は長篇小説の一部といふ事になつてしまふが、さういふものでは無いでせう。とにかく、さういふ事は歌にあつては出來ない事です。

一首の歌として持つべき統一した味ひといふ事は歌に取つては何よりも肝要な事です。古人の作歌法を讀んで見ても、この間の消息は極めて深切に說いて居ます。

何事も形式の方から說く癖を持つてゐた古人は、かうした事も形式から說いて居ます。それは統一した味ひを持つてゐる位な歌は、その形を見ても、整つた、しつかりしたものである。それで、整つた、しつかりした形を持つた歌を詠めば、自然統一した味ひも出て來るものだといふ見方です。そうした見方から「歌」は姿が大事であると云つて、第一に姿の美を說いて居ます。又、歌は、頭を輕く腹を大きく、尻を堅く詠むべきものだ、卽ち人がしやんと坐つてゐる時の姿のやうに詠むべきだと說いても居ます。さういふ姿を持つた歌は、しやんと言ひ据ゑられた歌で、自然統一した味ひを持つ事にならうと思はれます。

又、言葉の方から說いて、歌は調べ上げ調べ上げして、その境とその調べと融合して一つになつて初めて止むべきものであるといふ說き方をしてゐる人もあります。又古歌を標準として その形式の方から研究して、古歌は五七を一と括りとし、五七、五七、を二つ繰り返し、それ

に七を添へたものであると說いて居る人もあります。これらの說き方も、形から見ての說き方であるが、成る程さういふ心懸で詠んだならば、その姿がすつきりとし、又はしつかりとしたものとなつて、自然統一した味ひを持つたものにならうと思はれます。

その說き方は過去のものです。現在ではこの點を何う說いてゐるかと見ると、一に作歌の態度如何によつて自然に得られるものとして說いてゐるやうです。卽ち歌話といひますと、殆ど全部態度論であつて、一切態度の如何による事だとしてゐるらしく見えます。

歌話は暫くおいて、實地には何ういふ歌を詠んでゐるのかと觀ますと、新しい歌の作者といふ中、年若い人であればある程、一首の取り纏めを、物象の取り集めによつてしてゐます。卽ち一首にをさまる分量だけの物象を捉へて來て、それを堆積することによつて一首の歌を成り立たせようとしてゐるらしいのが見受けられます。卽ち一首の取り纏めを、一首の統一した味ひといふ精神の方でしようとはせずに、一首に盛り加減の材料、又は分量といふ事でしようとしてゐるのです。實際一首の歌の中に驚くべき多くの名詞を使つた歌を見る事があります。又、材料によつて一首を取り纏めようとするところから、その作者が年若いにもかゝはらず、謂はゆる叙景の歌が多く、抒情の歌が少いといふ事も伴つて來てゐるらしく思はれます。

かうした事を言ひ續けて來ると、一首の歌の取り纒め、言ひ換へると、一首の歌の統一した味ひといふものは、何所から來るものかといふ事に話が落ちて行きます。詩や小說などと違つて、短い、一定の形式を持つてゐる短歌は、その點では樂なところがあります。前に云つた、物象の堆積によつて取り纒めようとしてゐるのでは無いかと思はれる一派があると云ひましたが實際短歌はさうしたものであつても、少し手際よくすると、餘り可笑しくはなく纒める事が出來るといふ危險があります。客觀的といふ事の尊さを穿きちがへて、客觀的でありさへすればいゝやうに思つて、聊かも統一した味ひを持たない、單なる記述の連作をして滿足してゐる年若い作者も少くはありません。

東（ひむがし）の野（ぬ）にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月かたぶきぬ

これは云ふまでもなく柿本人麿の秀歌の一つで、荒野に野宿をして黎明の大觀を歌つたものです。かうした歌を讀み味つて、今云つたところの統一した味ひは何所から來てゐるかと思ふと、それが物象の取り纒めの中から出て來てゐるなどとは決して思はれません。實際かうした物象を捉へるといふ事は捉へて取り纒めようとするやうな心からでは捉へる事すら出來るものではありません。これは非常に強い精神力を持つて初めて捉へる事の出來るものです。卽ち大

きな精神力が大きな物象を支配し得た狀態といふべきです。

三、歌に於ける主觀の現はし方

歌は事柄又は物象を假りて、作者の主觀を現はしたものである。同じく作者の主觀といつても、その內容のちがふと同樣に、程度もちがつてゐる。例せば同一の作者であつても、若い時には主觀が淺く、單純で、老いて來ると深くなり、複雜になつて來る。又同じく若いといひ、老いてゐるといつても、その人の性分で、この淺い深い、單純複雜のちがひがある。

今ここに云はうとするのは、第一には、この程度の差のある主觀が、歌の上に何ういふ風に現はれてゐるかといふ事である。主觀の現はれである歌は、その主觀の要求してゐる通りに現はれて來るので、その歌を觀ると、何ういふ程度の主觀を持つてゐる人の作であるかといふ事は察し難くない事である。卽ちその假りてゐる材料は、略ぼ同じやうな事柄又は物象であつても、それを扱つて行く態度の上に、蔽ひ難くその人の主觀の程度を現はして來るからである。第二には、近來になつて近代の巨匠だと云はれ出して來てゐる大隈言道の歌を、その材料の扱ひ方、卽ち態度の上から觀て、大凡何れ位の程度の主觀を持つてゐた人であるかを瞥見しよう

とする事である。

○

歌の上の主觀の現はれ方は、假りに大別すると、四つの階段があると云へる。今下の方から順次に、その一つ一つについて簡單に云ふことにする。

○

第一の階段は、作者自身では主觀が現はれてゐ、又は現はれてゐる筈であると信じてゐるにもかかはらず、讀者として觀ると、その現はれが極めて稀薄で、殆んど現はれてゐないと云つても過言ではないところの歌である。これは主觀が淺い爲めに、或は惡い意味でいふ單純な爲に、或は淺くも單純でもないが、たまたま主觀が弛緩してゐて、それと同じ狀態になつてゐる爲に出來る歌である。

この階段に屬する歌は、いはゆる「單なる寫生の歌」又「報告歌」である。更にいふと、然るべき感動もなく、又緊張もなく、ただ眼に映じた通りの物象又は事實を歌の形式によつて現はしたものである。この階段の歌は例を擧げるまでもなく、月々の雜誌の上に限りないまでにある。此頃も或る人が、「秋になると毎月、霧の歌が二千首位は活字になる」といつて笑つたが

さうした歌の大部分はこの歌である。そして其の作者はその一首一首に相當な主觀が籠つてゐると信じてゐる。それは自分といふ特殊の人間が、特殊の境に於て見たもので、又それに心を動かしたものであるから主觀が籠もつて居ない筈はないといふのである。この主張は、人といふものを肉體の方面から觀ての主張である。歌はいふまでもなく精神に處したものであるから、かうした主張は全く意味を成さないものだといへる。

主觀が弛緩してゐる爲に現はれないといふ事に就ては、河井酔茗の「詩と散文との差別」を說いてゐる一節が、極めて要を得たものであるから、ここに借りる事とする。

散文は不斷の心持である、平らな不斷な心持を表出したものを散文として取扱ふに異議はない。けれども詩は然うでない。不斷の心持を强く握りしめた時、高く積上げた時、奥深く凝視した時の表出が詩である。平地を歩く時と階段を昇る時とは歩調が異ふ。散文だからとて調子はないとはいはぬ、でも詩の調子は更に高く强く、深い。

ここに云つてある「詩」といふ言葉を「歌」といふ言葉に置きかへれば、弛緩した主觀をもつて現はした歌は、主觀の淺くまたは單純なものと選ぶところのないものだといふ說明となつて來る。さうした態度で出來た歌は、散文の一句に過ぎないもので、形は歌であるが、精神は

歌ではないものである。

○

「單なる寫生の歌」、「報告歌」といふ階段から一と階段昇つた、直ぐその上の階段に屬してゐる歌は、一讀甚だ濃厚に主觀が現はれてゐるらしく感じられて、再讀するとその主觀は極めて空疎なものだといふ階段である。更にいふと、濃厚に現はれてゐると見えた主觀は、その實作者の主觀ではなくて、廣義にいふところの「人情」である。自己の主觀を現はすべき歌が、單に「人情」を現はしてゐるのみで、その歌は獨立した一つの世界ではなくて、「人情」の世界を歌はせる窓の役目をしてゐるといふ歌である。最も多くの讀者、讃美者を有してゐる歌は此の階段に屬するもので、知名の作者の作にもさうした歌は相應に多く含まれてゐる。

此の階段に屬してゐるものでも、更に幾つかの階段がある。第一は「優美」といふ事に捉へられてその事に殉じてゐる歌である。歌は「物のあはれ」を詠むものだと云はれてゐる。この「物のあはれ」といふ事は、高くも低くも取れる言葉である。低く取ると「物のあはれ」は卽優美といふことになる。「優美」といふ事は、若い心を捉へるに足りる十分な力を持つたものである。「歌には理窟はない、自分には優美なものだけが面白い」といつてゐる讀者は相應に多い

作者の方はさすがに其所にのみは止まつては居ない。物の眞を重んじる思想界の大勢は、そこに止まつてゐる事を許さないので、知らず識らず前方へ進んで行つた。しかし其所を發足然とした爲に、何時までたつても其の心を脫しきれずにゐる作者はまだ可なり多くあつて、一讀した所ではさうらしく見えないものの、やはりさうした心持を背景にしてゐる作が相應に多いといへる。

第二には、感傷の世界である。更にいふと、「甘い悲哀」の世界である。優美なものだけが面白いといふ程度の主觀を持つてゐる眼を、外界から內界へ向けると、そこに「甘い悲哀」の世界を發見して來る。現在の刺戟の多い、隨つて動搖の多い社會的氣分の中に生きてゐる所から、その「甘い悲哀」の世界は、一抹の「暗い影」を帶びてゐる。この暗い影を帶びてゐる甘い悲哀の世界は、「優美」にもまして、若い心を强く捉へる力を持つてゐる。卽ち謂はゆる共鳴を感じる世界である。言ひ換へると、「新しい人情」である。

この「新しい人情」を、調子のある言葉で訴へると容易く若い心を動かす事が出來る。實際調子のある言葉だけで十分で、事柄又は物象を假りるだけの必要のないものである。更に云ふと、さういふ物を假りなければならないだけな明らかな主觀ではないのである。卽ち嚴密な意

味でいふところのその人の主觀ではないからである。例をかりると一種の「新内(しんない)」であつて、その歌詞などは何うでもよく、「甘い悲哀」に浸つた一種の節廻しさへあれば十分な程度のものである。

主觀の此の程度に止まつてゐるものを現はした作は現在の歌には相應に多い。或は數に於ては最も多いといふのが適當であるかも知れない。

以上の「優美」、「甘い悲哀」は、主觀から觀ると同じ程度を現はしたものと見るべきもので、「娑婆卽淨土」ともいふべき一つの觀念を背景に置いて、眼前の物象からさうした意味を捉へて來て歌としたもの。やや趣は異にしてゐるが、をりをり詩の上に見る所の、「人生は灰色なり」といふ觀念と同じ程度に於て、社會の不平均、矛盾などに對して持つ不平を、卽ち一感想を、歌の形にしてゐるものがある。これ等に就て、又主觀の第三、第四の階段に就ては、次に云ふことにする。

○

歌に現はれてゐる主觀で、第二の階段に屬すべきものとして、その第三に、「娑婆卽淨土」といふやうな一つの觀念を腹に置き、それを背景として、その觀念に適合するやうな材料をのみ

選んで歌としたものが相應に多いことは旣に云つた。

何故さうした傾向が「優美」に捉はれ、「新しい人情」に甘んじてゐると同じ程度に於てつまらないかといふと、それは一つの知識だからである。我々の心の一部の働きに過ぎないからである。又は我々の心の弛緩した狀態の現はれだからである。そして、この一部の働き、弛緩した狀態といふ上から觀ると、因襲的な「優美」に捉はれ、又は自身の感情に盲目的に阿つてゐる心持と、全く異つたところがないからである。强いて異つたところを求めると、かの自身の感情に阿つてばかりゐる心から生まれる歌は、前にも云つたやうに、主として言葉の調子のみの歌となり、一種の「新内」となつてしまふのに對して、この一つの觀念を具象しようとしたものは、必ず繪畫的になつて來ることである。その繪畫も、拵へたものであるので、平面的な、陰影のない、一種の模樣となつて來る。

歌にあつては知識は全然斥けなければならないものである事は、古い歷史が證明してゐる。「古今集」系統の歌が、味ひのないものとなり、行き詰まつてしまつたのは、一つに知識を取り入れようとしたところにある。香川景樹の仕事は、その知識を拂ひ去らうとした事で、そしてその精神は今にも及んでゐるのであるが、それにも拘らず「古今集」の系統を引いた歌には

面白いものが見えない。今歌を一つの觀念を持つて歌はうとする事は、「古今集」を離れて、更に新たなる「古今集」を作らうとする事である。

しかし、この觀念を背景として詠んだ歌は、一般の歌の愛好者から相應に歡迎されてゐるらしく見える。歌を通じて或る種の思想に觸れようとし、又は思想のかをりを嗅がうとするのは、多數の歌の讀者の殆んど本能的の要求らしい。殊に現在のやうに思想が重んじられる社會にあつては、それに又、我が國の歌に比較しては遙かに思想味を帶びてゐる歐米の詩に馴れた心は、一層さうした要求を助長させてゐる。讀者のこの要求に擁されて、上に云つたやうな、觀念を無上のものとして歌つてゐる作者の歌の相應に多いのを見る。

第四は、實生活の上の實感を歌つてゐるものである。歌は素よりその範圍を離れないものであるが、ここに云ふ實生活といふのは、主として金錢の授受を主とした社會上の生活で、そして實感といふのは、心ならず執る職務の不快、貧しさに對する怒、弱者として强者に對する不平などである。

作者はかうした範圍の事を歌ふのを以て、生活に切實な事としてゐるが、それと意識して歌ふかうした事は一つの觀念であり、知識に過ぎないもので、上に云ふところのものと少しも異

つて居ない。上のものは、同じく知識ではあつても、內にある知識と、外にある物象との調和を保たうと努めるところがあるだけに、多少の沈潛があり、隨つて潛熱もあるのであるが、これは、外にある事象に刺戟されて、神經的に反撥して、言葉を投げ懸けて行くに止まつたものなので、極めて具象に乏しい。それで、一讀痛快な趣があつて、新味ある歌のやうには見えるが、實は歌の形式を假りた一種の斷片的な感想錄であつて、歌として見ると、上のものよりも更に低い主觀から生まれたものとよりは見えない。

以上の四つの方面、卽ち「優美」に捉はれたもの、「新しい人情」に止まつたもの、一つの觀念を具象したもの、一つの觀念を標準として社會的生活を批評(?)したものは、その數から觀ると、現在の歌の中で最も多くを占めてゐるといへる。そしてその作を生み出した主觀からいふと、何れも尊むに足りないのである。

○

主觀の第三の階段に屬する歌は、一見、何等主觀が現はれてゐるやうには見えないが、しかしその作者でなくては詠めないと思はれる特殊な所を持つたものである。更にいふと、作者その人の心から詠み出したもので、かの第二の階段に屬してゐる「優美」、「新しい人情」などい

ふ、作者の心外にあるものに依り縋つた所のないもので、これを心の働きから觀ると、心の一部分である所の知識だけを强調したやうなものではなく、心の全體を働かせて詠んだもので、何の點が面白いといふやうなものではなく、全體として面白いといつたやうなものである。

かうした主觀狀態から詠まれてゐる歌は、必ず作者の「境涯」を語つたものとなつてゐる。「境涯」といふものは、捉へて歌つてゐる所は自然の風物であるが、その風物の中に作者の精神を溶かし込んで、彼であると共に我であるものである、風物そのものが譬喩などといつたやうな知識的な、隨つて間接にするものを介在させることなく、おのづからさうした感じを持つたのである。又、この程度の主觀に達して來ると、抒情の歌でも、作者を離れて生きてゐるものとなつて、それが或る一人の人の心であると思はせるものとなつて來る。卽ち作者の心を抒べたものではあるが、他の人の心を抒べたものであるやうな味ひを持つたものとなる。

此の階段に屬する歌は、現在にあつては、さう多いとは云へないが、さすがに少いとも云へない。少數の作者の歌は此の階段に屬したものである。

これを古人に觀ると、私の知つてゐる範圍の俳人では、一茶の句はこの階段のものと思はれる。歌人では大隈言道の歌は、殆ど全部この階段のもので、靜かに純粹な態度を以て、その心

の境涯を自然の風物に托して現はしてゐる事は、前後に例の少い人のやうに思はれる。

歌が一つの藝術だといふのは、主觀がこの境まで到達し、それに相當する表現が伴つて來て初めて評し得られる事である。

○

主觀の第四の階段は、私には俳人芭蕉の或る句、或は柿本人麿の或る歌などを讀み味ふことによつて、僅に想像される境である。例せば芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」、「道ばたの木槿は馬に食はれけり」などいふ句、人麿の「物部の八十うぢ川の網代木にいざよふ浪の行方知らずも」、「足曳の山川の瀨の鳴るなべに弓槻が岳に雲たち渡る」などといふ歌を讀むと、かうした句又は歌は、物に托して心を現はすといつたやうな、多少なりとも思慮の加はつた後に出來たものではない。さうした相對的なものではない。强ひていふと、絶對に近い心が、端的に現はれて來たものだらうと思はれる。更にいふと、作者の心が、心それ自らで足つて、周圍の何物にも捉はれず、煩はされず、緊張した狀態になる時に、卒然として、その觸れた物と合體して、言葉となつたものだと思はれる。これを例すると、深く湛へた池水が靜かな輝きを帶びて、幽闇な光の中に横たはつてゐる上に、ふと物の影が映つて來て、池水がその影と一つにな

つた瞬間の狀態のやうなものだらうと思はれる。

主觀が如何なる狀態にあらうとも、所詮物象を假らなければ現はすことは出來ない。假りてある物象に卽いて觀れば、第一の階段にある主觀のものも、第四の階段の主觀にあるものも同一であるけれども、若き心を以て向ふと飽き足りなく、しかも棄て難いものに見え、老いた心を以て向つて漸く領き得るといふやうなものは、この第四の階段に屬する主觀から生まれたものである。

四、戀歌の詠み難いといふ人に

現在の自分としては、何よりも戀の歌が一番詠みやすい譯である。自然を對象とした歌よりも、廣い意味での人事を對象とした歌よりも、現在の自分の胸に鬱結してゐる此の情を抒べた歌が一番詠みやすくて、隨つて自分としては割合にいい歌も出來なくてはならない譯だと思つてゐる。然るにその實際をいふと、戀の歌は不思議な位まで詠めない。詠めないのではないが、意に滿つるものが詠めない。たまたま詠みえたと思ふものが出來ても、先輩の批點を請ふと、一度もよいと云はれない。これは何ういふ譯だらう、といふのが貴君のお手紙の主意だらうと

思ひます。

お手紙を讀んでゐながら、私は一つの記憶を思ひ出しました。側道へ入るやうではあるがその事を云はせていただきませう。

先年私たちの連中で「北光」といふ歌の雜誌を出して居た事がありました。その時某君といふ年若い一人の連中は、しきりに戀の歌を詠んでは送つて來ました。年齡の關係上、私が歌の選をする事になつて居ましたが、私は某君の歌つた部分は抹殺してしまひました。さうした事を繰り返してゐる中に某君はたうとう歌を送らなくなつてしまひました。程經て某君にいひますと、某君は當惑した面持で「北光の連中は親孝行の歌ばかり詠んでゐるので、私だけが不良青年のやうで氣がさして、たうとう歌も送れなくなつてしまひました」と自分の心持を說明して聞かせました。

この親孝行の歌といふ言葉は、某君としては適當な言葉として他意なく云つたのでしたが、連中の歌の選をして、みんなが何んな歌を詠んでゐるかを知つてゐる私には、皮肉な言葉のやうに聞えて、苦笑をしずには居られませんでした。それは戀の歌を詠んだのは一人某君ばかりでなく、他の多くの者も詠んで居ました。しかし大概はまづいので抹殺されて居て、そしてたま

たま雑じつてゐる親を思ふ歌が雑誌の上に出るので、その雑誌だけを見て内情は知らない某君は、他の連中はみんな親孝行だと誤解したのでした。

戀の歌の詠みにくいといふのは一人貴君ばかりではなく某君もそれでした。某君が見て親孝行の歌ばかり詠んでゐると評した連中も同じく其事を思つて居たでせう。それよりもさうした事を聞かされる私自身が、やはり戀の歌の詠みにくいものである事を感じてゐる者で、善惡は別として、他の方面の歌は或る數までは詠んでゐますが、戀の歌に限つては殆ど詠んで居ないといつてもいい程の有様です。

戀の歌を詠むには何か特別の心懸けでもいるのであらうか。かう私が自身に向つて自問したとすると、私は直ちに否と自答します。歌はただ眞實を語るだけのもので、その外に何の祕密もあるものではない。古人の詠んだすぐれた戀の歌を見ると、ただ此事をしてゐるだけで、それ以外には何もしては居ない。實際一人の心が萬人の心に響くといふ事は、その心が眞實に滿ちた時だけで、藝術の持つ客觀性といふ事も、その藝術の持つてゐる眞實が他の多くの眞實を求めてゐる心に響くといふ事です。

戀の歌にいいものが少ないといふ事は、やがて其戀に眞實が多く現はれて居ないといふ事で

す。戀をしてゐる場合には誰の心も眞實に滿されてゐます。それで居てその心を詠んだ歌にはその割合に眞實が現はれてゐない。これは何ういふ譯でせうか。

抽象的な事をいふよりも實例について云ひませう。實例としては、新古今集、古今集、萬葉集から、戀の歌の最初に載つてゐる歌を一首づつ引いて來る事にしませう。この三つの歌集は、長い歌の歷史を代表してゐるものですから、例とするには最も適當だらうと思ひます。

攝政

和歌所歌合に、久忍戀

石の上ふるの神杉歷りぬれど色には出でず露も時雨も

これは新古今集の戀の歌の最初の歌で、大意をいふと、一二句は、大和の石の上の布留の社の神杉の意で、その杉が年たつてゐる所から歷るの序としてある。三四句の歷りぬれど色には出でずは、我が戀は人目を忍ぶもので、忍びつつ年を歷てはゐるが、それと顏にも出さずにゐる意で、これが一首の中心になつてゐる。結句の露も時雨もは、露にも時雨にもの意で、序の神杉を再び利かして、神杉が露に逢つても時雨に逢つても變ちないやうに、色にも出さずにゐるといふ意です。

眞實を現はすといふ事は云ふまでもなく有りのまゝを云ふといふ事です。その標準から此の

歌を見ると、如何に有りのまゝを離れて遠いものでせう。こゝには久しく忍ぶ戀の苦しさなどは全くない、有るものは平氣な冷たい心持で、自分を神杉に譬へて眺めたところの智惠才覺ばかりです。我々に見えるものは全く智惠才覺だけで、それが憶面もなく眞實を追ひ出してしまつた形だけです。

題しらず　　素性法師

音にのみ菊の白露よるはおきて晝は思ひにあへず消ぬべし

これは古今集の戀の歌の第二首目の歌で、一首は讀人知らずになつて居ます、大意をいふと、上三句は、噂に聞くばかりでまだ見た事もない人を思つて、夜は寢られずに起きて居てで、下三句は、さて晝は戀しい思ひに堪へずに、死にさうに思はれるといふのであるが、聞くに菊といふ懸詞を持ち出し菊から白露を持ち出し、それから露の夜、葉の上に置くのと起きてと懸詞にし、序に、露の消えるといふのと、命の死ぬのを消ゆるといふのと懸詞にしてあります。見ぬ人を戀ふる、戀を戀するといふ憧れの心はかうした表現を取つてゐます。此の歌の何所に眞實があるでせう。前の歌と同じやうに、智惠才覺が眞實を惜しげもなく壓し殺してしまつて居ます。

仁德天皇をしぬびたまひて　　磐姫皇后

君が行け長くなりぬ山たづの迎へか行かむ待ちにか待たむ

これは萬葉集の相聞の最初のもので、連作の一首です。大意をいふと、上二句は、天皇の行幸は長い月日となつた（け長くのけは來經の意で、日の移りゆきをいふ）。三句の山たづのは迎への枕詞で、四五の句は今は戀しさに堪へぬから、お迎ひに行かうか、それとも更に堪へ忍んで、待ちに待たうかの意です。此の歌を讀んで、我々は初めて眞實といふものに觸れえた歡びを感じます。これを前の二つの歌と較べると、前の歌は智惠才覺を加へて、心を刻み畸形にし、生命までも奪つてあるのに、此の歌にはさうした餘分なものを加へず、直接に、卒直に、有りのままを云つてあるといふ事を感じます。

歌は眞實を抒べるものだといふ歌の大本はきまつて居て、既に後のやうな歌もあるものに、何故同時に前のやうな歌もあるかといふに、前の歌は讀者を豫想して、讀者を感心させよう、驚かさうと思つて詠んでゐます。同時に又、一首の上での手柄を現さうと思つて、そして其の事は、一首の中へ成るべく多くの分量を詰め込んだ事だとしてゐます。これは言換へると讀者といふものに捉へられ、歌といふものに捉へられて居るのです。然るに後の歌は、唯自身の心の

苦しさを遣らうとして、相手などは眼中に置かずに、天地に對して呟くやうに詠んで居ます。そして一首の分量などといふ事は全く思はずに、一首で足りなければ二首三首を連ねて、四首まで詠んで居ます。卽ち一切から放たれて詠んで居ます。既に放たれてゐるので、ただ眞實を語らう、さうする事によつて情意の滿足をえようとするのみで、智惠才覺などを用ゐる必要を認めて居ないのです。

話を前へ引き戻しますと、我々の戀の歌も、眞實が現れさへすれば客觀性を持つたいい歌となるべきであるが、それが現はれない爲にいいものとならない。身にあるものが何故現はれないかといふと、何物かに捉へられてゐる爲で、その爲に現はれたくてゐる眞實を我と現はさずにゐるといふ事に歸して來ます。

この事は、云ふまでもない當り前の事とお思ひになるかも知れません。しかし其の當り前が出來難い事で、歌を詠みつつ歌に捉へられないといふ事は、餘程のすぐれた人でなければ出來ない事です。我々は此の當り前の事を當り前にしようと念々に心懸けなければならないと思ひます。

更に又表現といふ上から思つても、戀の歌は叙景の歌などに較べては遙かに詠みにくい理由

があります。それは叙景の歌だと、眼前に形を備へたものがあつて、それを捉へて來さへすれば一と通りの歌にはなるといふ容易な點がありますが、戀の歌はそれとはちがつて、大體に於て形のない心持を押し出して行かなければならないといふたよりなさがあります。それに此の形のない心は流れて止まないもので、餘程機敏に、且つしつかりと捉へないと、前の心持と後の心持とが一緒になるなどの事が起つて來、知らず識らず變形して來ます。隨つて其所へ智惠才覺が加はつて行く隙間もあらうといふものです。聊かでもさうした氣分が加はると、もう其の歌は眞實を離れたものとなり、拵へものといふ感じを持つたものとなつて來ます。流れて止まない現在の心を機敏に且つしつかり捉へる、これは中々困難な事で、餘程の修行を要する事です。この事は、比較的詠みやすいといふ叙景の歌でも、旅の歌となるともう詠みにくいといふ事から推しても見やすい事です。此方の眼と共に移る風景でさへ既に捉へ難いのだから、我が情意の全體の移つて行くのを、我が心をもつて捉へるといふ事の困難なのは云ふまでもない事です。

しかし大本は定まつてゐる、後は修行のみであると思ふと、その修行は直ちに限りない樂しいものとなつて行くべきだと思ひます。

五、歌の立脚地

——作歌を勸むるの書——

××君、貴君が擔任してをられる文藝欄の爲に、私に何事かをいへとの命であるが、私は今歌を愛してゐる所から、寧ろ歌といふものを片思ひしてゐる所から、歌について、少しばかりの事を言はせて頂きたい。

歌は一般の人からは、敬して遠ざくべきものと見られて居る。或は敬するにも値しないものに見られて居る。これは漠とした意味に於てではあるが、しかしかなり根强いものである。そして、次第に薄らいで來ては居るが、まだ相應に廣くはびこつて居るものである。

何故歌はそんな誤解を蒙つてゐるかといふと、一つは歴史から來てゐる。歌は一時貴族の手に委ねられた事があるので、歌といふと閑人の詠むもの、又は老後に、閑餘のすさびとして詠むものと思はれて居る。今一つは、若くして歌を詠む者は、とかくその精神が不健全に傾いて行くとしか見えぬ。それは歌といふもののうちには、何等かの若い心を毒するものが、含まれて居る爲であらうと、思はれてゐるからである。

現在の歌は、そのやうに我々の生活から懸け離れたものでもなく、又我々を向上させこそすれ、斷じて墮落などさせるものでは無い。

我々の生活して居る狀態は、これを外面から觀ると、いかにも複雜を極めたものに觀えるが飜つてこれを內面から觀ると、いかにも單純を極めたもので、ただ一つの事をして居るのみである。それは思つた事を形に現はすといふ事である。藝術上の言葉でいふと、自己を表現するといふ事である。百般の實業も、教育も、政治も、これを行つて居る人から觀ると、ただそれをして居るだけの事である。そして又我々の第一の願ひである所の、我々の精神を豐かにして行くこと、我々の精神を高めて行くといふことも、この心を形に現はして行くことによつて、自己を表現することによつて、卽ち日々の仕事によつて爲る外に路はない。我々の爲てゐることとは、唯それだけの事である。

そして又、多くの人の自己を表現して居る方法は、それぞれの事情の下に於てして居る。決して無條件ではして居ない。或る人は、その爲て居る事が自分の性に合つてゐるのではないが、餘儀ない事情の爲にして居る。或る人は又、周圍から牽制される事が餘りにも多く、喜びをも

つて爲てゐるよりも苦しみをもつて爲してゐるといふ事もある。隨つて、努力してその事はしてゐるが、その事が自身の精神は豐かにもしず、高めもしないといふ結果に陷る事が少なからずある。

かうした事實から觀ると、歌（又は俳句）を詠むといふ、爲ようと思へば誰にでも出來る事で、何等の條件も拘束もなく、自由に自己を表現する事の出來る事は、一般の人の解して居るが如く、我々の生活といふものと懸け離れたものでなく、又我々の精神の上から見て、無意味な事でもないといふ事がうなづき得られようと思ふ。

最後に、歌とは何ぞといふ事になるがこれは一と口にいふと、歌といふ形式によつて自己を表現する事である。更にいふと、歌を詠むといふ事は、進んで止むまいとする本能を持つて我我の精神が、新たに進み得た境涯を、歌といふ形式を借りて、言葉に表現する事である。

かういふ意味で詠み得た歌が、我々の進歩の記念となつて、我々に歡びを與へると共に、一方では、我々の進歩の機緣となつて行くものである事は云ふまでもない事である。

歌を詠む事によつて失つた人、魂に傷つけられた人といふものを私はまだ聞かない。私は多くの人が安んじて、歌といふものに指を染められる事を希つて居る。

六、散文俳句と歌との立場の相違

——作歌を勸むるの書——

御申聞けの趣はよく分りました。職業その物を直ちに趣味として行くべきだが、そこまでは心が進んではゐないといふ御嘆息も、何か心を轉じさせ得る慰みものを欲しいが、語るべき友は土地がらとして得られず、さりとて酒色も碁も厭はしい、その外で何か恰好なものはなからうかと思つて搜してゐるとの仰せは、何れも御尤の事と御察し申しました。小生が若し貴兄の境遇にゐたとしましたならば、恐らく同じやうな心持がする事だらうと思ひます。いな貴兄と小生のみではなく、同じやうな心持を抱いてゐる人が隨分と多い事だらうと思ひました。

お手紙を假りに、小生に對して御相談下すつたものとしますと、小生は、歌をお詠みになつては如何ですとお勸めします。これは小生が歌が好きだからと申すといふばかりではなく、歌といふものは、貴兄のやうなお心持を抱いてゐる方には一番に手の附けやすい、そして恐らくは一番に面白いものだらうと信じられるからです。

心に思ふ事を、憚りなくそこに現はして見る面白さは、これは申すまでもありません。この面白みは、恐らくは親友と心ゆくまでに雑談をする面白味と相並んで、我々の至幸の中に數へるべき者だと思ひます。或る人に取りますと、この思ふ事を言ひ現すといふ事の方が親友と話すよりもずつと面白い事のやうです。「文藝家には友人は贅澤なものだ」と或る文藝家はいつてゐますが、その言葉が文藝に志してゐる人には胸に應(こた)へる言葉になつてゐるのを見ても、その事は窺はれます。

さて、思ふ事を言ひ現す事ですが、一般の者に――一方に職業を持つてゐる者に取りましては、短い散文を書くか、俳句を作るか、歌を詠むか、大凡それ位の事より外は出來ません。

第一の文章ですが、これは相應に思考の力も要する、時間も要する。隨つて、何時何所ででも作る事の出來るといふものでないことは、既に御存知の通りです。特にお好きであるならば格別ですが、貴兄のやうに劇職にある方には、ちょつと、手の附きかねるものだと思ひます。

それでは第二の俳句は何うかといふ事になります。俳句については小生は殆ど知る所がないので、口を出す權利もない次第ですが、しかし竊に思つてゐる所を申しますと、あれは容易さうに見えて、案外易くはないものだ、うつかり、手を附けるべきものではないと思つてゐます。

それは何ういふ譯かといひますと、俳句は歌から分れたものですが觀方によつては、歌よりは一段と進んだものです、一と口に申しますと、歌は悲しいといひ嬉しいといつて、心に思ふ事をそのままに、生地のままにさらけ出したものですが、俳句は一旦その心を捕へて、それを外界のものと結び附けて現したものです。この事は、歌は手紙の代りにして來たものですが、俳句は季題を離れては作る事の出來ないものとして來たのでも大體に察しられます。

第三の歌ですが、手の附けやすい上からいひますと、小生はこれが第一だと思つてゐます。申しましたやうに、歌は自分の心を押し出して行くのを本質としてをります。形式の上の約束はありますが、それを除いては全く何の約束もないものです。昔の歌人は歌を讃へる理由として、その歴史の古い事をいつてをります。しかし古いといふ事は言ひ換へると、原始的なものだ、單純なものだといふ事です。そして歌がずつと永い間を通じて續いて來た事も、その原始的な單純なものであるが爲です。誰にでも出來る文藝で、一番手の附けやすいものは歌だといふ事は、これを理窟ではなくて、歌の歴史が明らかに證據立ててゐます。

仰せのやうでしたら、何よりも先づ歌を詠んで御覽になつては何うですと申すのは、以上の理由からです。極めて大ざつぱな申分ですがこれでお汲取りを願ひます。

お斷りしておかなくてはならない事は、歌が一番手の附けやすいものだから、一番面白いものだと申すのではない事です。文藝はその形式の違ふに從つて、その味ひが違ひます。そしてその味ひの違ふのはこれを作る精神が幾分かづつ違ふ爲で、その精神と申すのはその人の性分です。

例へば以上擧げました、三つの例に就て申しましても自分の感情を主として、思つた事をその儘に言ひ現して行かうといふのは歌の本意です。極く生一本なものです。これを時代から觀ますと、原始時代の心持で、年齢から申ますと、若い者の心持です。歌が主觀的な傾向を持つた人に喜ばれるのもこの理由です。

隨つて歌では、餘り內容の事を申しません。もとより內容がなくては歌にはなりませんが、他の物のやうに新奇を求めずに、その如何に生き生きと强く現れてゐるかを主として居ます。これは我々の感情が大體に於ては昔も今も、甲も乙もさう變つてはゐない爲です。

俳句になりますと、そこが大分違つてゐるやうです。俳句は文明が或る程度迄進步して來る時に初めて生れて來たものだけあつて、歌のやうな感情一點張りではなく、幾分智的になつてをります。俳句から小生などの受ける味ひは、その靜かな觀照的な、やや餘裕を持つた所です。

隨つて形式は短いが、內容は歌などより却つて複雜してゐて同時に新奇なものがあります。俳句が寫生を唱へるのも、尤もな事だと思ひます。年齢からいひますと、中年の者の心で、體が据わつて靜かに周圍を見廻してゐるといふ所があります。

散文になりますと、これは範圍が廣いので、その初步のものになりますと、一首の歌にも詠めるやうなこと、一句の俳句でも盡きるやうな事を長々と書いたに過ぎないと思はれるものもありますが、その本來からいひますと、歌俳句などいふ主觀を主としたものとは違つて、何處までも客觀的なもので、いはば思慮の熟し切つた人が、靜かに自身の見聞を、批評を加へながら話してゐるといふ調子のものです。

申すやうに、それぞれ味ひが違ひますから、何れをお選びにならうとも、一に貴兄のお好み次第の事で、結局自身の性分に合つたものが、その人には一番面白いといふ事です。しかし小生としては、やはり歌からお初めになる事を貴兄にお勸め致します。將來何が面白いものになるに致しましても、歌は原始的な、若い心を現はすに適したものですから、一應はこれに指を染めて御覽になつて、大まかながらに主觀をほしいままに現して見るといふ面白みを御經驗になる事を希ひます。これはあらゆる文藝の面白みの土臺ですから、よしんば歌をお棄てになる日

が來るにしましても、それを試みた事を悔いるといふ事は萬々なからうと信じます。

餘事ですが、最近の歌壇俳壇には、一つの興味ある運動が、暗默の間に行はれてゐるやうに小生には見えます。一と口に申すと、歌と俳句と接近させようといふ運動です。歌人の或る人は、歌の中に俳句を攝取して、俳句の靜觀的な、微細な味ひを此方へ加へようとしてゐます。卽ち主觀的であると同時に客觀的の趣をも併せもたうといふのです。又俳人の或る人は、歌の主觀を主としてゐる所から來る强みを俳句にも持たせようとし、それによつて輕い趣味に墮さうとする俳句を自身の中心に觸れたものとしようとしてゐます。此の運動が何ういふ結果を齎すかは將來を待たなければ分らない事ですが、とにかく現在の歌壇俳壇といふものはさうした所まで進んで來てゐます。

何よりも先づ、御實行をお勸めします。文藝の面白みは、食物の旨みと同じで、口で說いても耳で聽いても分るものではありません。親しく指を染めて味はつて見る事です。必ず案外な味ひを發見して、何故もつと前から爲て見なかつたらうと思はれる時のあるのを保證致します。講釋めいた事を長々と申して、恐縮の感もありますが、畢竟我が好きをすすめたい一念からです。草々。

七、「古今集」を排する所以

一

田山花袋氏は最近の「文章世界」に於て、最近の「國民文學」に載せた私の「古今和歌集研究」の中の

二條后の春のはじめの御歌

雪の內に春は來にけり鶯の氷れる涙今や解くらん

といふ歌についてその中の「鶯の氷れる涙」といふ句を、私は誇張だといつて非難すると、氏は、誇張だとは思はない、感情の自然の流露だと思ふと難じられた。そして、この歌はいい歌だと思ふと賞讃の言葉までも添へられた。

私は自分の言ひ現し方が足りなかつたらうと思つた。私は歌は感動の直接の表現である程價値があると思つてゐる。否それでなければ歌ではないと思つてゐる。若しかういふ言葉が言ひ得らるるものとすると、歌は感動の第一印象である。それより出ても引つ込んでもならないものと思つてゐる。

「鶯の氷れる涙」といふのが感動の表現であるのは言ふまでもないが、私には直接の表現だとは思はれない。これを作者の作をした時の態度から見ると、その感動を一度智的に飜譯したものに見える。或は無意識にしたのかも知れないが、それは機智を加へたものに見える。この機智が無理なものに見え、不自然にも見え、言ひ換へると誇張にも見える。

私の誇張と言つたのは、この感動の上に加へて來た機智を言つたのである。その不純な部分を言つたのであつた。

私にはその意味で、いい歌とは思はれない。

二

田山氏が最近の「國民文學」の上で說かれた「創作上に於ける『全』と『箇』」といふ議論は教へられる所の多いものであつた。氏の例の、創作の勞苦を通して到達された所の尊い心境からの聲だと思つた。

氏の「箇」と「全」といふ言葉は、歌の上にも直ちに適用される最もよい言葉だと思ふ。古今集の歌は總體に「全」に卽き過ぎた歌である。古今集ばかりではなく、單純を旨としてゐる我が國の歌は、えて「全」に卽き過ぎようとする傾向を持つてゐる。單純ながらに心を盡さな

くてはならない、相手にもうなづかせなくてはならないと思ふと、自然に我々に共通なものにたよらうとする心を起して來る。壓へるともなく「箇」を壓へて「全」の方を重んじる。人情の說明の歌が出來、道德の說明の歌（道歌）が出來て、さういふものが一般から愛誦されてゐるのも無理のない所がある。その結果、多少なりとも「箇」を重んじた歌があると、讀む者は、歌に對して豫想してゐた感情の常識からはづれてゐるといふ意味で、分らない歌と一と口に言つてしまはうとする。古今集はかうした歌の手本で、彼の集は理智といふものに依つて、「箇」の感動を「全化」しようとしてゐる。そしてそれをするに、一見氣が利いて見える機才に依つてしてゐる。

謂はゆる新しい歌の起つたのは、その「全」の壓迫を、かたい殼を脫いで、新たに「箇」にかへさうとしたのであつた。さうした運動であつた。萬葉集が唱へられ、それが次第に流布して、彼の集としては恐らく空前の讀まれ方をしてゐるのも、萬葉集が「箇」を重んじ、「箇」を通して「全」に迫つてゐる秀歌の多くを持つてゐる爲である。或は萬葉集は現實を重んじてゐる爲とも言へるが、現實とは卽ち「箇」で、名前は違ふが實體は同じものである。

三

田山氏は、作と時との關係を説かれた。書かうと思ふ事は、適當な時に於て書かなければ、卽き過ぎたものとなつたり離れ過ぎたものになるとの意であつた。

經驗から説かれた意味深い教へだと思つてそれも私は聞いた。

私自身の乏しい經驗から言つても、自身を感動させた事は、それが歌ともなり、小説ともなり、論文ともなると思つてゐる。

若し感動を得たと殆ど同時に、卽ち時を置かなくてその感動を表現しようとすれば、恐らくは誰でも抒情の形式を便利とするであらう。旅行中の感動が自然に歌となるのは誰しも經驗することである。

やや時を經て、感動を得た場合を想ひ起すと、我々は感動その物は大分薄らいで、そして、感動を與へた境の方が比較的鮮かに眼に浮かんで來るのを經驗する。それに又、その時は自身と對象と一緒になつてゐて、強い感動ではあつたが、何故に起つた感動であるかはよく分らなかつたのが、靜かに振り返つて見て、初めてその理由を解し得るといふ事もある。今一度その時を喚び戻さう、その境を再現させようと思ふと、我々は散文によるのを便利とするだらうと思ふ。

更に時を經て、その境を思ひ返したとすると、我々は、感動も薄らぎ、又その時には複雜にも、異常なものにも見えた事象も、極めて單純なものとなつて、今一度それを再現して見ようといふだけの情熱も感じないものになつてゐるのを感じる。が、單純なものと化してしまつた事象は、同時に觀念化されて來てゐて、それを表現しようとすると論文の形式を取るのを便利に感じる事を思はせられる。

もとよりその人の性格で、初めから論文になつてしまふ人もある、散文になる人もある、又抒情詩だけで終る人もある。が同時に、その論文の中に小説があり、詩があり、小説の中に論文があり、詩があるといふことも當然あり得ることである。そして又それが自然であると思はれる。

詩、小説、論文と、形式から見ると大分距離のあるやうに見えるが、それを作する上から言へば、單に時の近い遠いの差であると思ふ。

八、田安宗武の歌論

賀茂眞淵を師として萬葉風の歌を詠み、萬葉の骨髓を得た點に於ては、その師眞淵に優るば

かりではなく、近代を通じて殆ど獨歩の觀のある、田安宗武は歌論としても、その歌にふさはしいまでの極めて徹底したことを云つてゐる。それは、

「歌詠む事は、もとより己が心を述ぶるなれば、あながちに好くせむと求むべき業にあらず、ただ心にのみ好からむ事を思ひて、その業をたやすくなすべき事にや」

といふのである。これを試みに我々に親しい言葉に言ひ換へると、

「作歌といふことは、云ふまでもなく、自己を表現するといふことを目的としてゐるのである。他人に見せるといふ事は附隨して起つて來る事であつて、目的とすべき事ではない。隨つて作歌の態度としては、ただ自己に忠實にしようといふ一點だけを思つて、他人が見ての思はくなどといふ事は念頭に上せないやうに、又さういふ事には少しも捉はれないやうに、即ち表現は容易くするべきである」

といふ事である。これを更に言ひ換へると、

「心には忠實に、表現としては容易く。」といふ事である。

この「心には忠實に、表現としては容易く」といふ事は極めて味ひの深い言葉である。作歌の態度としては、恐らく至上の態度だらうと思はれる。

作歌に志した者は（作歌のみではなく、何でも同樣である）幾つもの階段を踏まなければならない。第一の階段は、秀歌を讀んで、それに感激を覺えて來て、何うすればかうした作が出來るだらうかと、その要素を解剖して捉へ、そしてさうしたものを自身にも得ようと思ひ立つ時である。その時には、第一に表現の技巧といふものが問題となつて來る。とにかく表現の技巧を得る事が何よりである。それさへ得れば、秀歌は詠めずとも一應の歌は詠めると思つて來る。

さて一わたりの表現の法を覺えて來ると、次ぎに、表現の法を得ただけではやはり秀歌は得られない、歌は生活の表現であるから、根本であるその生活を高めて行くのでなければ、如何に表現の法を得たからといつて、秀歌の出來る筈がないと思つて來る。これが作歌の第二階段である。

さて、如何にして生活を高めて行くかといふ事になると、其所には樣々の道が見えて來る。向上の願ひを胸に抱き、緊張した心をもつて向つて行けば、何事も皆自身の生活を高めて行く材料になる。實務を執りつつ多くの人と接觸するのもその一つの道であれば、讀書をして優れた精神と交通するのもその一つの道である。しかし、歌に志した者に取つては、その歌を力作

し、苦吟するといふ事も、無論自身の生活を高めて行く一つの道である。そして比較的樂しくもあれば確實でもある道である。

さてその力作苦吟であるが、この事は、往々にして、その所期と反對な結果を齎すものである。それは一と口にいふと、力作苦吟する時には、卽ちいい歌を詠まうと思つて眞劍になつてかかる時には、不思議にもいい物が出來なくて、時として興を得て、平氣で詠んだものにも劣る事である。ここの消息は、多少なりとも作歌に親しんだ者は、誰でも解し得ることである。

興を得て平氣で詠んだ時にはいい物が出來るのに、いい物を得ようと思つて力作苦吟すると却つてそれにも劣つた物になるといふ此の矛盾した事は何うして起るのであらうか。これは謂はゆる眞劍になつてゐると、眞劍の爲に捉へられてしまふのである。捉へられて、心の持つてゐる全體を發露させる事が出來ないのである。反對に、興を得て平氣でしてゐる時には、捉へられる物がないので、心の持つてゐる全體を發露するのである。卽ち眞劍その物が惡いのではなく、それに捉へられる事の惡いのは、作歌の上では眞劍でない爲に蒙る惡るさよりも更に惡いといふのである。

眞劍でなくてはならない、しかし眞劍に捉へられてはならない。これは誠に困難な境である。この矛盾が矛盾でない境まで進まなければ秀歌は出て來ない。これを出來上つた歌の方から觀ると、その心からといふと、眞實に滿ちた、謂はゆる眞劍なものであるが、その形から觀ると、餘裕のある、隨つて一種のうるほひも持つて、言葉の味ひを湛へてゐるといふやうな歌を詠む心が、卽ちその心である。

上に言つた宗武の歌論は、卽ちこの境を語つてゐるのである。「心には眞實に、表現としては容易く」といふのは、此の矛盾した境を明らかに言葉としたものである。態度として至上の態度だといふのはその意味に於てである。

尙この境は、他に求める所がなく、又自信も持ち得るまでになつた人にして初めて占め得る境であつて、作歌を通して其所まで進まうとする境で、道程としての境ではないとも云へる。しかしそれを期してゐれば、比較的容易にその境を窺へる道理で、やはり尊い敎といはなければならない。

九、秀歌を生み得る心境

歌は心の表現であるから、心が進んで來なければ、いい歌は出來ない譯である。進んだ心さへ持つてゐれば、それに一通りの表現の技巧さへ添へば、いい歌は詠み得る譯である。

進んだ心といふと何ういふ心かといふと、歌の上にあつては、學問の上に於けるやうに、天分素質に待つ所が多くない。卽ち純眞な心でその心が何物にも捉へられず、十分に發露さへすればよいのである。古來の秀歌といふものは、殆ど皆さうした心の現はれである。

純眞といふことは暫く措いて、捉はれざる心とは何ういふ心であらうか。それは實例について觀るが一番觀やすいことである。そしてそのよい例と思はれる話を私は聞く事が出來た。それを紹介する。

今から八九十年前、寛政の頃に、鎌倉の建長寺に誠拙和尙と云ふ高德の僧が居た。この人は近世では白隱禪師か誠拙和尙かと稱された程の人であつた。和尙が高德な爲に、歸依者も新たに加はつて來て、寺の普請なども出來ることになつて、山門の建て替へなどもあつた。その時に淺草の藏前に大口屋五郎兵衞といふ豪商があつた。これも歸依者の一人で、それを機會に、青銅の五百羅漢を寄進して、山門の上に据ゑた、三尺位の像五百體のことであるから、當時の金で千兩以上もかかつたので、寄進としては莫大なものと噂された。

いよ〳〵据附けも濟んだと聞いて、大口屋五郎兵衞寺まゐり旁々それを見ようと思つて鎌倉へ行くことにした。五郎兵衞は腹の中ではその寄進が自慢であつた。あれだけの寄進をしたことだ、寺からいつても大檀那である。きつと大事にしてくれるだらうと思つて、何月幾日に參るからと豫め案內狀を出しなどもした。

定めて迎ひの者も出てゐようと思つて鎌倉へ着いて見ると、さうした者も見えない。變だなと思ひつつ建長寺の境內へはひつて見てもやはり小僧一人出迎へもしては居なかつた。寺なんてものは氣の利かないものだと、五郎兵衞はやや不平で、庫裡へ行つてその名を告げた。

遠路の御參詣で、と言つて役僧は客間へ案內をしたが、つい通りの扱ひで何といふこともない。案內狀のことがまだ通じてないと見えると五郎兵衞は察して、和尙へ面會を求めた。すると和尙の室へ導かれた。

寒暖の挨拶が濟むと、五郎兵衞は、和尙が寄進の禮を言つてくれるだらうと思つて、今に言ひ出すか今に言ひ出すかと待つてゐたが、そんな樣子もない。たうとう五郎兵衞は我慢がしきれなくなつてしまつた。

「時に今度の寄進の事ですが、あなた方は何う思召すか存じませんが、商人に取つては千兩と

いふ金は大金です。禮を言つていただかうとも思ひませんが、せめて何とか・・・滿足に思ふ位のことは仰しやつて頂けようと思つてをりましたんですが」

五郎兵衞の口上を聞いて誠拙和尙は大喝した。そして言ふに、

「大口屋五郎兵衞が、自分の爲に善業を積んだからと言つて、この和尙がそれに禮を言はなくちやならないと言ふのか」と叱つた。

さう言はれて五郎兵衞は、初めて自分の間違つてゐたのを悟つた。それから修業を積んで好い境涯に進み得た。

話の大意は以上のやうである。この事は禪道の上の事であるが、直ちに歌の上へ移す事が出來る。大口屋五郎兵衞の態度をもつて歌を詠んでゐると、歌は一つの遊戯である。又幾ら苦勞して詠んでも、他から觀て、遊戯以上だと思はれるやうな歌は詠めない。卽ち歌は何等かの方便で、自分以外の物で、自分自身の現はれではないからである。歌は誠に誠拙和尙の如き態度から詠まれなくてはならない。卽ち相手を絶した、自分自身だけで滿ち足りた心から詠まれるべきもので、其所まで行つて初めて自分の全體が現はれ、同時に秀歌も得られるのである。古の名高い歌人俳人などの心境も、この誠拙和尙の心境に外ならないものである。

十、拙劣歌と秀歌との區別

自分の心を書き現はした物に對して、他人から惡いものだと評された時には、私は、それは私がまだ幼稚なからだからと思ふ。

一つの生命に善し惡しといふ事のある筈はない。惡いとすると、それはまだ發達しない幼稚な狀態にあるからである。發達すれば必ず善いものになるべきである。卽ち質の問題ではなくて量の問題だと思つてゐる。

かう思つてゐる所から私は、我々の祖先である古代の人の、善惡に對する心持に親しみを感じてゐる。彼等は、善いものとは强いもの、惡いものとは弱いものだと思つてゐたらしい。彼等は「ちはやぶる神」と言つてゐる。「ちはやぶる」といふのは學者の說く所によると、「いちはやぶる」で、今の言葉で言へば「荒らぶる」とか「平和を亂す」とかいふ意味である。いはゆる善惡の標準からいふと惡い神々である。しかもその神が强いと、彼等は神として崇敬してゐるのである。又、「男子美名を殘すことが出來ないならば寧ろ醜名を千載に殘さう」といふ。これを善惡の上から見ると途方もない心持ちも、不思議にも我々には一種の韻(にほひ)をもつて聞える。

誘惑を帶びてゐる。現に我が國には、强盜や殺人者で、義賊とか俠客とかいふ冠せられて、憧憬されてゐる者が少くない。

この一種の氣分は、如何に世態は變つて來ても、滅し難いものとなつて我々に傳はつてゐるやうに思はれる。そして樣々な形を取つて、社會の表面に現はれてゐるやうに思はれる。この氣分を如何に導いて行くかといふことが、經世といふ上からは案外に大きな問題だと私には思はれる。

十一、物の觀方の兩面

先頃、地方にゐる某氏から、現在の歌壇に對して三四の質問を出して、その答を徵された。その一は、現代の短歌作者は、誰々を以てその尤なるものと見なすべきかといふので、第二は、古來の歌の論議書で、何々が最も信條に價ひすべきかなどであつた。

私はその一條一條の文字を眺めて茫然としてゐた。某氏から觀ると、多少なりとも現代の歌に注意を拂つてゐる者である以上は、その答の適否は別として、當然何等かの答の出來る質問とされたのであらう。しかし私から言ふと、私はさうした事に、平生多くの注意を拂つてゐなかつた。隨つて私は、俄に答へるべき言葉を知らなかつたからである。

それにつけて私はかう思つた。某氏のこの質問は、さう價のある質問ではない。少くとも他人の意見までも徵して、自分の參考とするまでの價を持つたものではないと思つた。

某氏のこの質問の背景となつてゐる心持を察しると、我を摑まうとして、先づその我と對してゐる彼を知らうとしてゐるのである。我が主でなくて彼が主である。それはかうした觀かたも、或る程度までは言ふまでもなく必要ではあるが、某氏は既に相當に自身を摑まへてゐるべき筈の人である。その人にしてかうした態度を續けてゐられるのをあきたらず思つた。我を摑むことは我を主としなければならない。我に對してゐる彼などは拂ひのけてかからなければならない。又それが當り前ではないかと私は思つてゐる。

次いでかうも思つた。物の觀かたに二た通りある。形體を主として精神はその中に宿つてゐると觀る觀かたと、精神を主として、形體はその現はれだとして觀る觀かたである。私は後の觀かたの方に親しさを感じてゐる。それが至當だとも信じてゐる。そして、古來の日本人は、何れもさうであつたとも思つてゐる。某氏のこの質問は、前の觀かたをしてゐる所に由來してゐるのではないかと思つた。

かう思つて私は、答の出來ないのを多く恥づかしく思はなかつた。

十二、自然を詠める歌

一

暑い暮しにくい夏ではあるが、趣といふ方から觀ると、夏には夏でないと見られない趣があります。自然の力の強い方面のあらはれてゐること、夏のやうな時はありません。空を見ると空は濃い綠にかゞやいてゐる。地を見ると、山も野も海も、同じく濃い綠を涯もなく伸びてかゞやいてゐる。それを見ると自然の力の強さが感じられて、我々は半ば無意識に、その強い力に親しみ、強い力と呼吸をあはせて見たいといふ欲望が起つて來ます。夏になると誰しも旅行を思ひ立ちますが、これは必ずしも暑さを避けようと思ふばかりでなく、半ば以上は、此の自然の強い力にそそのかされるからでせう。

この同じ心持は住み馴れた家に居ても感じられます。庭前の僅かな草木に對しても、春や秋はそれを愛して眺めるに過ぎないのが、その植物に手を觸れなければ止まない心になります。そこの土を跣足になつて踏んで見ようといふ心を起させます。それと共に戸外が慕はしくなつ

て、晩凉となると、何時にはないまでの輕い打開いた心持になつて、人は人の居る方へと歩みを向けるやうになります。

それに又、夏といふ季節ほど變化の際やかな時はありません。朝と晝と夜とは異つた季節かと思はれる程はつきりと區別がされます。晴れた空には忽ち雲の峰が湧き、それが崩れると見ると夕立になつて、忽ちにまた晴れて行きます。凉しい夜は短くて、しみじみと惜しい思ひをさせます。かうした變化のおもしろみも、夏といふ季節に限られたものです。

よろづに亙つて物靜かに、上品にと思つてゐた古人の生活からいふと、殊に知識階級であつた貴族の生活からいふと、夏といふ季節は餘り好ましい時ではなかつたらしい。隨つて歌も、夏に關するものは他の季節に較べて割合に少なく、興趣を感じた範圍も極めて狹かつたやうです。しかし、流石におもしろいと思はれる多くの歌があります。ここにはその一種を紹介します。

夏　夜

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ

清原深養父

深養父（ふかやぶ）は平安朝時代の歌人で、この歌は百人一首の中に入つてゐるので、誰でも知つてゐる

歌です。

「夏は夜」と清少納言もいつて居ます。實際夏の趣の一半は夜にあつて、夏の夜は單なる夜ではなく、晝の續きとして、誰しも遲くまで起きてゐます。

この歌は夏の夜の短かさに、輕い驚きを感じて詠んだもので、まだ宵であるのに、夏の夜はもう明け離れて行く。これでは空の月は、山まで行く間がなくて、中空の雲を宿とするより外はなからうが、何所の雲を宿とするのだらうといふのです。

巧みに詠んだ歌です。夏の夜の短かさは誰しも感じる事ですが、それを言葉にしようとすると案外しにくいものです。それを捉へてゐるのは上手と云へます。言葉も氣が利いてゐます。「まだ宵ながら明けぬるを」といふのは、氣の利いた言ひ現はしで、隨分誇張してあるが、それ程には感じさせない。それに「明けぬるを」は、惡くすると「明けぬるに」と云ひたい所ですが、さうすると調子が詰まつて來て、窮窟なものになつてしまひます。「を」と續けて、伸びやかに、又後の句を自然に喚び起すやうにしてゐる所など、言葉に對しての神經の鋭敏を思はせます。「雲のいづこに月宿るらむ」といふ誇張した想像も氣の利いたもので、作者としては恐らく會心の笑みを洩らした程の句でせう。

平安朝の貴族は、暢びやかに、上品に、氣の利いた言ひ現はしをとばかり覘つて居ました。さうした標準からいふと上手な歌です。併し現在の我々は、もつと切實な、もつと力のある歌をと思つてゐます。さうした立場からいふと、「夏の夜は」と第一句に据ゑて、夏の夜といふものを外から說明しようとするやうな感じ方はしず、直ちに自身を夏の夜の中に置いて、そこで感じる一點を、もつと生き生きと、はつきりと云はうとします。

熊谷直好

閨中扇

手に鳴らす閨の扇も今はとてたためば明くる夏の夜半かな

直好は江戸時代の歌人で、香川景樹の門人ですが、師の景樹よりも却つて好い歌を詠んだと云はれてゐる人です。この歌は夏の夜の暑さに、閨に入つてまでも扇をつかつて居たが、もう止めようと思つて止めると、短い夏の夜は明け方になつたとの意味です。

歌の境からいふと、前の歌もこの歌も夏の夜の心持を捉へたものですが、前の歌の說明的なのに較べて、後の歌は寫生的です。隨つて前の歌は、ちよつと見は面白さうであるが、よく見ると籠もつた味ひはないが、後の歌は、それとは全く反對になつてゐます。これは前の歌は事實を輕く見て心持ばかりを重じてゐるのに、後の歌は事實を重じて心持を壓へて歌つてゐる爲

です。一人の人の作として見ると、前の歌は年の若い時の作、後の歌はやや年をして心の熟して來てからの作です。「手に鳴らす閨の扇も」と引き締まつた寫生をし、「今はとてたためば」と同じく引き締つた、しかも巧みな續け方をして「明くる夏の夜半かな」と第五句になつて、眼目にしてゐる所を初めて云つて云ひ据ゑてゐるなど、いはゆる歌の格にかなつた、確かな詠み口です。難をいへば「今はとてたためば明くる」などの云ひ續けがやや巧みに過ぎるのと、一首の味ひが、題詠風な窮窟さを持つてゐる事です。

題しらず　　香川景樹

大空に月は照りながら夏の夜は行く道くらし物かげにして

夏の夜をいへば夏の月は云はなければならない。景樹は近世の歌人だと云はれてゐる人で、歌は寫生である。歌の歌たる所は調にある。「調とは心の感じをそのままに言葉とすること」と主張した人で、それは當時にあつては新しい主張だつたのです。歌の意味は極めて分りやすく、夏の月夜、外を歩いてゐると、道がたまたま物の蔭に入つた。すると空には月が照つてゐながら、我が行く道はまつ暗になつたといふので、これは恐くは誰しも經驗してゐる所です。

誰でも經驗してゐる平凡な境で、しかも強い感じをもつてゐるといふ歌は、歌としては、極

めて好いものです。しかしさうした歌は、ちよつと見れば幾らでも出來さうに見えて、實際にはなかなか出來ないものです。何故といふに、誰でも經驗してゐるやうな事は、作者もやはり馴れてしまつて居て、その事から強い感じを受ける事は出來ない。しかし如何に作者にもせよ、強い感じを受けなければ強い感じを持つた歌とはならないからです。この平凡な境から強い感じを受けるといふ事は、その人の心が幼兒のやうな純粹を保つてゐないと無い事だからです。

この作は、境は平凡ですが、中に一種の光を包んでゐて、何度讀んでも飽かせない所があります。景樹といふ人はかういふ境ばかり詠まうとして居た人ですがかうした自然な作はさう多くはありません。

明治卅三年六月七日の夜　　正岡子規

紙をもてラムプおほへばガラス戸の外の月夜のあきらけく見ゆ

正岡子規は明治に於ける俳句の革新者で、晩年には短歌をも革新しようとし、短歌も寫生を旨とすべき事、その意味に於て萬葉集の歌が一番すぐれてゐるから、それを學ぶべき事を唱へた人です。この作は同じ題で何首か連作してある中の一首です。その境は、夏の月夜に、室内にラムプを點して居たが、紙をもつてラムプを蔽ふと、ラムプの光の薄らぐと同時に、ガラス

戸を透いて、戸外の月夜であるのが鮮かに見えたといふのです。

取材は、奇拔とか平凡とかいふ境を通り越した、日常生活の一斷片ですが、調子の高い言葉を以てしつかりと寫生してある爲に、その境と、作者の感じとがまざまざと現はされてゐて、讀む者も同じ感じを受ける事が出來ます。

清　水　　西行法師

道の邊に清水ながるる柳蔭しばしとてこそ立ち留りけれ

西行は平安朝の終りの頃の歌人で、政權が皇室を去つて、武家へ移らうとする時代の人です。もと朝廷に仕へてゐた名譽ある武士であつたが、餘りにもはげしい變遷を眼にして世を厭ふ心を起し、生涯を行脚の中に送りつつ道を求めた人で、歌はその傍ら詠んだのです。當時歌は技巧のみが過重されたが、その間にあつて西行は技巧に捉へられず自身の心を重んじた歌を詠みました。この歌は、夏の日、暑さに惱みつつ路を歩いて行くと、路ばたに柳の木があつて涼しい蔭をつくつてゐ、そこに清水も流れてゐる。暫く休んで行かうと思つて立ち寄つたといふのです。

この歌の上手な所は、離れて詠んでゐる所です。その境も、自分自身もまるで、餘所事のやうにして、繪でも書くやうな心持で詠んでゐる所です。その爲に、道の暑さも、涼しい所を見附けた嬉しさも一言もいはずに、瞬間の行動だけを寫してさうした心持を十分に味はせる事が出來るのです。この離れた、餘裕をもつて詠むといふ事は大事な事であつて、そして程よいといふ事は極めて困難な事です。若し離れ過ぎると力のないものになつて、卽き過ぎた窮窟な作と同じやうに趣のないものになります。この作は、かうした繪があつて、その繪に題したものだとも傳へられて居ます。成る程さうかとも思はれますが、題詠であるとすると、題詠に伴ひがちな一種の臭ひのない、一層よい作だといふ氣がします。

澤　邊　螢　　和泉式部

物思へば澤の螢も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る

和泉式部は平安朝の女歌人の中でも傑出した人で、殊に情熱をもつて奔放な歌を詠んだ點で有名な人です。此歌は戀する心の苦しさを詠んだもので、苦しい物思ひをしてゐると、今眼の前の澤から、闇に照らして舞ひ立つ螢も、思ふ人にあこがれて、自分の體から脫け出して其方へ迷つて行く魂かと思はれる（さうした信仰が當時はあつたのです）といふのです。

これは螢を詠んだ歌ではあるが、螢はただ材料につかはれてゐるだけで、自分の心持を抒べ

た歌です。歌はこの抒情の方面を重んじて、それを本流ともして居ます。しかし抒情の歌は、力がないと人を動かす事が出來ない。力といふのは強い感動と、それをさながらに現はした所から出て來るものです。この歌は和泉式部としてはさう優れたものではないが、率直に、單純に、何の技巧も加へずに現はしてゐる所に自然にある力を持つて居ます。

二

秋が來ました。強い限りない力の現れのやうに見えた世界も、今はもう、宵毎に朝毎に衰へを見せて來てゐます。夜深く空を眺めた時など、ああ秋が來たと一種驚きに似た感じがして、澄んで來た空に對し、月に對し、風の音に對して、新しいものを見るやうにしみじみと眼を向けさせられます。

私たちの感じるこの感じは、古人も等しく感じたもので、そしてすぐれた多くの歌として殘して居ます。一體自然に關する歌は、春と秋とのものが、他の季節のものよりも多いのですが、さういふ中にも秋の方が多く、隨つて秀歌も多くあります。これは喜びに動かされるよりも、悲みに動かされる方がより強いせゐだらうと思ひます。次に秋の歌を少しばかり紹介します。

七夕

柿本人麻呂

天の川梶の音きこゆ彦星と織女(たなばたつめ)と今夕(こよひ)逢ふらしも

柿本人麻呂は歌聖といはれてゐる人で、奈良朝の人です。この歌は「萬葉集」に載つてゐる歌で、同じ題で三十八首の歌が續いて載つてゐる中の一首です。

意味は明らかで、天の川を振りあふいで見ると、梶の音がきこえて來る。彦星と織女と今夕逢ふのであらうといふのです。梶の音は云ふまでもなく、一年に一夜の逢ふ瀬を許されてゐる彦星が、織女の許へ行く爲に、舟で天の川を渡つて行くその梶の音で、想像で云つてゐるのです。

一讀如何にもいい感じを與へる歌です。そのいい感じは、あざやかに、力強く云つてある所から來てゐます。意味からいへば極めて單純なもので、言ひ現しからいつても此れ以上素朴にはいへまいと思はれるまで素朴なもので、理窟をいふとさうたいした物ではないやうに思はれますが、今一度讀み返すと、思はず聲を立てて朗吟してみたくなる所を持つてゐます。そこが歌の味ひで、さうさせるのは一に作者の心の力です。

かうした作を讀むと、私たちにはかうした心持はたやすくは持てないといふ事を思ひます。この歌にある彦星と織女とは、人麻呂の心には空想中のものではなく實在のものとなつて居ま

す。そして天上の星も、地上にゐる人と同じやうに戀をしてゐるものだと信じて歌つてゐる所があります。この、天も地に近く、星も人と同じものだといふ心持は、もう我々の心持ではありません。梶の音の聞えるのは想像だと云ひましたが、人麻呂の耳にはあざやかに聞えたのでせう。作者の生きて居た時代の信仰を心に置いて讀むと、この歌は一層光輝を持つたものとなつて胸に響いてきます。

晩蝉

大伴家持

隱りのみ居ればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば來鳴く晩蝉

大伴家持もやはり奈良朝の歌人で、「萬葉集」の選者としても有名な人です。

意味は、家の中に籠つてばかりゐるいぶせさに、心を慰めようと思つて戸外へ出て來ると、をりふし晩蝉が來て鳴いたといふのです。

物の姿を第二にして、姿の與へる感じといふ方を第一としてゐる歌風から見ると、徒らに姿ばかりを云つてゐる、丁寧すぎた、氣の利かない姿に見えますが、姿の中に心がある、姿と心とは別々のものとなるべきではないといふ歌風から見ると、よくその場合と、その場合の心持とを一緒にあらはし得た歌だと思ひます。心を主とする方の歌風からいふと、恐らくは晩蝉の

聲の持つてゐる感じをあらはさうとして、そこに中心を置いて、さま〳〵に思案をして現はさうとするでせう。しかしそれだと幾ら云つても限りがなく、結局思ふ事が云へない事になりませう。然るに姿を重んじようとするこの人は、ただ晩蝉が鳴いたといふだけで、それ以上には何事も云はず、そしてその場合を精細にいふ事によつて、晩蝉の聲を生かさうとしてゐます。この邊は、最近の散文を書く人の心持と通つてゐる所があります。實際晩蝉の聲の感じをあらはすとしても、何事かあつて家に籠つてばかりゐて、いぶせさに戸外へ出ると、をりふしそれが鳴いたといふ程、その聲の感じを力强くあらはす方法はなからうと思ひます。

薄

良寛法師

秋の日にひかりかがやく薄の穗ここの高屋にのぼりて見れば

良寛法師は近世の僧で、書にも歌にも非凡な手腕を持つてゐる人です。生涯を越後で過した爲に、一般には知られずに居ましたが、此頃になつて多くの人から紹介されて、一般に知られるやうになつた人です。

意味は極めて明らかで、高い家へ昇つて見渡すと、一面の薄の穗が秋の日光に光りかがやいてゐるといふだけです。

かうした歌の味ひは説明のしようがありません。各自が繰り返して讀んで味ふべきです。強ひていふと、作者のさうした光景に對した瞬間の心持が、何の思慮も分別も加へられず、極めて直接に現はれてゐる所に趣があるのです。更にいふと作者のその瞬間の心持と薄とが一つのものになつて全く區別し難いものになつてゐる所に趣といふよりもむしろ尊さがあるのです。歌も他の藝術と同じやうに、初めのうちは、作る者も讀む者も、思慮分別の加はつたものを面白く思ひ、それがないと飽氣ないやうな氣のするものですが、藝術といふ上からいふとさうした物はいいものではありません。作者も讀者も、心の境が進んで來ると、思慮分別といふものを小さいものだと心附き、自然の大きさを悟つて來て、自然の面影の宿つてゐるもの程面白いと思つて來るものです。この歌などはさうした歌の一首です。かうした歌は何時誰が讀んで見ても、ちよつと見には淡きに過ぎるやうな氣がしながらも、ちやうど自然の見飽かせないやうに、飽かせるといふ事が無いでせう。

女郎花

良寛法師

秋の野をわが分け來れば朝霧に濡れつつ立てり女郎花の花

同じ法師の歌で、趣は前の歌よりも一層分りやすいものです。

かうした歌の趣を味ふには、自分も女郎花の歌を詠んでみようとすると初めてよく分ります。秋の野の女郎花の趣は恐らく誰の胸にも觸れるものですが、さて歌にしようとなると案外にも出來ないものです。「古今集」の系統を引いた思慮分別を重じる歌人は、女郎花といふ名前からそれを女に見立てて、そこに興を寄せて歌としたものがあります。そんな歌の面白くないのは云ふまでもありません。さうかと云つて、女郎花の花その物の形や色を如何に上手に描き出して見ても、その趣は現しきれないでせう。それを思ふと、秋の野を分けて來ると朝霧にぬれながら女郎花が立つて居たと、女郎花その物には何の説明も加へず、それを見出した境だけを、靜かに、しかし確りと云ひあらはしてある。かうした歌の味ひを思はずにはゐられないでせう。

露

西行法師

大方の露には何のなるならむ袂に置くは涙なりけり

西行法師は誰も知つてゐるやうに、人生の不安を痛感すると、名譽ある北面の武士といふ自身の位置も、愛する妻子をも棄て、佛道の修行によつて安心を得ようとして、修行の爲に生涯を旅に送つた人です。この歌もさうした心を抱いて旅をしてゐた時のものでせう。

意味は、この繁くも置き渡してゐる露、この露には何がなつたのであらう。わが袂の上に置くところの露、それはわが涙であるといふのです。

西行の歌は概して主觀の勝つたものが多い。それはこの人の性分が神經質で、一つ事ばかり思ひ詰めてゐるといつた風で、落ちついて外部の物を眺めてそれを歌ふよりも、感を發しると共にその感じを押し出して行く傾向を持つてゐるからでせう。この歌などもやはりそれで、恐くは白露の置き渡した廣い秋野に立つて、天地の寂しさを感じて思はず落涙した時の心を詠んだものだらうと思はれますが眼に見た姿には重きを置かずに、直ちに感じた心持だけを云つて居ます。隨つて露の置き渡した野の姿は見えませんが、その代りに、さうした作からは受けられない、作者の心持が、讀む者には迫つて來るやうな強さをもつて感じられます。この姿を重じるのと心を重じるのとは、その人その人の性分にもよりますが、概していふと、年若い人は心を重じた歌をよみ、年をとると姿を重じた歌を詠むやうになります。

月　　西行法師

諸共に影をならぶる人もあれや月のもり來る笹の庵に

西行法師には月の歌が多い。これはその一首です。これは、修行の爲に山奥に入り、笹で編

んだ庵の中にただ一人で籠もつて居た時の作で、意味は、月光の洩り込んで來るこの笹の庵に、誰か一緒にゐる者があつて、影法師を並べてゐる者があればよいといふのです。一緒にといふのは、同じ心持を持つた者といふ心持で云つて居ます。

前の歌よりはこの方が、その場の姿があらはれてゐますが、心持の勝つたといふ上では同じ事です。その代り心持ははつきりと感じられます。大安心を得たいと思ふ爲には何物をも拋つて修行には出たがさうした境で靜かに月に對してゐると、さすがに人なつかしい思ひを發して、相手を欲しいといふので、そこに生きた西行といふ人が感じられます。率直な、力強い云ひ現しは、一讀、その境も、その心も感じさせて、批評のし難い思ひをさせます。

月　　大伴家持

雨晴れて清く照りたるこの月夜また更にして雲なたなびき

同じ月の歌でも家持の看た月は、ずつと違つたものです。意味は明らかで、雨が霽れて、清く照つてゐるところのこの月夜、重ねては雲よたなびいて、これを曇らせるやうな事はするなといふのです。

何の巧みもない、見たまま思つたままの作ですが、一首の心持がはつきりとしてゐて、言ひ

現しの中に落ちついた上品な所があるので、自然に心を惹かれる作となつて居ます。

三

月の歌にはすぐれたものが多いが、それは暫くやめて、ここには主として秋の野に關したものを紹介することにします。

落　栗　　大田垣蓮月

はら〳〵と落つる木の葉にまじり來て栗の實ひとり地に聲あり

作者の大田垣蓮月は、江戸時代の終りの女歌人で、歌にすぐれてゐたのと、貞節の聞えの高いのとで、一代に名をほしいままにした人です。

秋の山に遊んだことのある人は、誰しも栗の實の落ちて來る面白みを知つてゐます。ゐみ割れた栗の毬の中に危くもかかつてゐる栗の實が、いささかの風にゆられると、その毬から離れて落ちて來ます。をりふし天地は靜まり返つてゐる時なので、小さな實の地を打つ音も割合に高く聞えて、そしてその音があたりの靜かなのと對照されて、却つて物靜かな感じを深めるものです。この歌は落栗の地を打つ音に趣を感じて詠んだもので、單に音ばかりにはしずに、秋風に吹かれて、落葉と共に落ちて來る落栗だけが、ひとり地に高い聲を立てるところに趣を捉

へてゐます。秋風と云はなくてそれと感じさせる所も上手ですが、「栗の實ひとり地に聲あり」といふ四五句の叙し方など、當時にあつては常套を破つた、大膽な叙し方だつたでせう。

○　　橘曙覽

秋風にゆられて落つるささ栗に小笠打たるる秋のみ山路

橘曙覽はやはり江戸時代の終りの人で、越前に住んでゐた人です。その豊な歌才は近年になつて新たに發見されました。

これも同じく落栗に興を寄せた作ですが、その境も心持もちがつてゐます。こちらは旅人となつて、朝早く秋の山を越して行くと、風にゆられて落ちて來るささ栗（小さな栗）が、かぶつてゐる笠（旅行用のもの）を打つといふので、靜かな中に感じる一種の輕い面白みを云つたものです。

前の歌には、强い鋭いところがあつて、そこが味ひとなつてゐたが、この歌はゆつたりと落ちついた所が味ひとなつてゐます。前の歌は唯一點だけを强くあらはさうとしたものですが、これは全體をあらはさうとして居ます。尙ほ云ふと、前の歌は主觀的の歌で、この歌は客觀的な歌です。前の歌には味ひはありますが、この歌の味ひも棄て難いものです。若い心には前の

歌の方がおもしろく、少し年齢をした者には、この歌の方が面白いでせう。

橘　曙覽

○

餘所人は見なれぬ里の一くるわ稻こきやめて我を指さす

同じ作者の歌です。ここは、餘所の者などは殆ど見たこともないやうな片田舍の一部落（一くるわ）のこととて、たま〳〵此所へ來た自分を珍しがつて、稻を扱いて居る者が、扱くことを止めて、何ういふ人だらうと云ひ合つてゐるらしく、此方を指さしして見てゐるといふのです。

よみ人知らず

○

玉梓の君が使の手折りたるこの秋萩は見れど飽かぬかも

詠み人は奈良朝に生きて居た女といふだけで誰とも分りません。歌の意味は、男から女へ使が來たが、その使が途中で、野に咲いてゐる萩の花を折つて持つて來て呉れた。女はその萩の花を手にして、見ても見ても、見飽かぬものに思つて、その心を歌にしたものです。

言外の情の籠つてゐるといふのは、かういふ歌をいふのでせう。萩の花は無論女にとつてもさう珍しいものではない。しかし思ふ人からの使の持つて來た花かと思ふと、その花までが一

種特別なものに思へて、飽くことも知らずに眺められるといふので、女の男に對して如何に深い心を持つてゐるかが自然に感じられます。

言葉も、言ひ現はしの順序も極めて自然で、何の巧みも加へてはない。それでゐて可なり複雜した心持で樂に感じられるやうに云はれて居ます。それは言葉の一句一句が、十分な働きをしてゐる爲です。即ち生きてゐる爲です。第四句の「この秋萩は」と云ひつゞけゐる言葉のしつかりしてゐるところ、それから第五句の「見れど飽かぬかも」と、用ひ馴らされてゐる言葉ではあるが、少しのゆるみもなく、しつくりと云ひ据ゑられてゐるところなど、無造作の樣でゐて、その實は巧みを盡してゐるものと云はなければなりません。序ながら第一句の「玉梓」のは「使」といふ言葉の枕詞で、又第五句の「かも」は「かな」と同じ意味の感嘆詞です。

惠慶法師

○

おもふ人來させまほしきところかな御垣が原の萩の盛りは

作者の惠慶法師は平安朝の人で中古三十六歌仙の一人に數へられた歌人です。歌の意味は、御垣が原（宮中の御垣のほとりの總稱）の萩の盛りのうつくしさ、かうした所を見ると、思ふ人を此所へ來させて見せてやりたいものだといふ氣がするといふのです。

好い景色を見て、これを思ふ人と共に見たいといふ念を起すのは、誰しも經驗してることで、いはば人情です。しかしこの歌ほど單純に此歌ほど自然に云ひ得てゐるのはさう多くはないやうに思はれます。それに又歌として見ても、好い景色などいふものは、如何に言葉をつくしても描きつくせるものではない。それで、そちらへは見切りをつけて、心持の方を主として云つて、その景色までも思はせようとしてゐる所は、やはり巧みだと云はなければなりません。尙ほ又、かういふ詠み方をさせたのは、その場所が「御垣が原」といふやうな特別な所で、誰でも隨意には行かれる所ではないので、自然にかうした心持になつたのでせうが、それが又同時に、その境の美しさ、その心持の强さとなつて居ます。

○

秋かぜの寒く吹くなべ我が宿の淺茅がもとにこほろぎ啼くも　よみ人知らず

詠み人は奈良朝の人であつたといふだけで誰とも知れません。歌の心は明らかで、秋風が寒く吹くに伴つて、我が家の前の（宿は屋戸で家の戸口のといふ意味です）淺茅（淺茅は淺く生えてゐる茅の意で、丈の短いちがやの生えてゐる所をあらはす言葉です）の中で、こほろぎが啼くといふのです。「も」は感嘆をあらはした助辭です。

出來るだけはつきりとその境を云ひ現してあるので、何時見ても快く感じられる作です。この、はつきりといふのは奈良朝の歌風で、かうした作はちよつと見るとそれ程には感じないものですが、その代りに何時見ても見飽かさない力を持つてゐます。そこが尊く思はれます。二句の「なべ」といふ言葉は、今は廢つた言葉ですが、いい言葉です。四句の「淺茅がもとに」の「もと」などといふはつきりした云ひ現しは、何でもないやうでその實言葉に對して鋭敏な神經を持つて居ないと云へない言葉でせう。

○

敷妙の枕の下のきりぎりす我ささめ言人に語るな　香川景樹

香川景樹のことは前に云ひました。歌の心は、枕の下にあたつて啼いてゐるきりぎりすよ、我等が今ささやいて話してゐる話を聞いて、それを人に話すやうな事はするなといふのです。「敷妙の」は枕の枕詞です。

氣の利いたといふだけで、籠つた味ひのある作ではないが、同じ蟲の音も、その人とその場合によつては樣々に聞かれるものだと思つてそこに趣を感じます。

○

藤原俊成

夕されば野邊の秋かぜ身にしみて鶉鳴くなり深草の里

俊成は平安朝の終りの歌人で、その子の定家と共に盛名を保つてゐた人です。歌の意は、夕ぐれになると野の秋風が身に染みて感じられるのに、この深草の里（山城）には鶉がさみしく啼いてゐるといふのです。

俊成といふ人は、歌は巧みを加へるべきものではない、さうした歌は飽かれるものだといふ事を持論として守つた人ですが、この歌などそれで、おだやかに秋の夕べの物寂しさを受け入れた作で、棄て難い味ひを持つて居ます。

○

正岡子規

野良の木に百舌鳥なく聞けば雨霽れぬ田刈れ棉採れ妹よ背と鳴く

正岡子規の事は前に云ひました。歌の意味は、田圃の木の上で百舌鳥が啼いてゐる。その啼き聲を聞いてゐると、雨が霽れた、田圃へ出で稲を刈れ、棉も採り入れろ、女房よ亭主よといつて啼いてゐるといふのです。

滑稽を云はうとしての歌ですが、秋の長雨が霽れてさわやかな感じのする日に、田圃の木の上で鋭い聲をして啼いてる百舌鳥の聲を捉へてあるのと、多くの鳥は人の言葉を語るものだと

いふ傳說に馴らされてゐる私たちには、何となく自然に感じられる所があつて、滑稽とは云ひながら落ちついた、上品な味ひを持つたものとなつて居ます。かうした輕い滑稽を歌にする事は昔からあつて、昔の物にはいいものがありますが、次第に言葉の洒落になつてしまつて、現在では殆ど無くなつてしまつて居ます。あつていいのだと思ひます。

——第二篇終り——

第三篇　作歌問答

一　歌は作つてみる値のあるものか

私はこの頃になつて歌といふものを作つて見たいといふ氣が起りました。

或る信用のできる先輩の言葉によると、歌といふものは危險なものだ、あんなものに指を染めだすと、第一は爲事の邪魔にもなる、それにまた歌といふものはもともと感傷的なもので、ああいふものに親しみ出すと、知らず識らずのうちに中毒して、若い心が一層感傷的になつてしまつて、しまひには取り返しのつかないやうな事になつてしまふかも知れない、それこそ近寄らない方がいい、君子はあやふきに近寄らずだ――とかう申します。

何だか尤もなやうな氣もしますし、さうでもないやうな氣もします。なぜといふに、昔から立派な人だと思つてゐる人々が、隨分大勢歌を作つてもゐますから。

これに就いてお考をお聞かせ下さい。

A　より

歌を作つて見ようとお思ひ立ちになつたといふ事は非常にいい事です。歌はとにかく、さういふ心持があなたの胸のなかに萠して來たといふその事が、私に言はせれば非常に尊い事です。そのお心持を極力尊重する事をお勸めします。

自分の思ふ事を、何か手間暇のいらない形式で言ひ現はして見たい。――かういふ心持は、その人が純良な人である限り、生涯のうちに必ず一度、もしくは二度起つて來るものです。

もともと人間は、自分の思ふ事を言ひ現はしてみたいといふ强い本能を持つてゐます。友達を欲しい、仲間を欲しい、いや相手なしには一日もゐられないといふのは我々の本能で、歌を作つて見たいといふのも、歌といふ形式で、自身をそこへ言はして見たいといふ事です。これは善いの惡いのと批評するべき限りの事ではない、どちらかといふと止むを得ない事です。若し歌を作らなかつたとしたならば、歌以外の何等かの形式のもので、その要求を滿足させずにはゐられないでせう。幸ひに、歌よりももつと善い物が見附かれば、それに越した事はありませんが、私の經驗するところによると、歌を作つてゐた人が、何事かに感じて歌を止めた後には、大抵は、歌よりももつと惡いものでその要求を滿足させてゐるやうです。あれ位ならば、やはり歌を作つてゐた方がよかつたものをと、竊に歎息する事がをりをりあります。

話が横へ逸れてしまひました。

何故私が、あなたの歌を作らうと思ひ立つたそのお心持を尊重なさいとお勸めするかといふに、あなたは今恐くは、御自身に對して、一種の驚きを持つてゐられるだらうと思ひます。その驚きの情が、あなたに、從來は問題ともなさらなかつた歌といふものを作らせようとしてゐるのです。で私は、歌はとにかく、その驚きの情を尊重なさるやうにお勸めします。

あなたは今、生涯のうちの重立つた變遷の時期にゐます、卽ち少年期から青年期へ移らうとしてゐるのです。從來無意識であつた生活が意識的にならうとし無自覺的であつたのが自覺的にならうとしてゐる所です。そしてこの二つの世界へまたがつて、同時に二つの世界へ眼を投げて、そこにゐる御自身をいぶかりもし、怪しみもし、最後には驚いてをられるだらうと思ひます。(これと同じ驚きを、中年にならうとして、又は老年にならうとして感じるやうです。)

變遷の時期は大事です、何時でも大事でない時はありませんが、殊に大事な時です。ぐつと善くなるか、ぐつと惡くなるか、何方かです。非常な勇氣と同時に、非常な省察を要する時です。

歌は省察がなくては出來ません。同時に、省察のある胸からのみこぼれ出して來るものです。

あなたの精神の確實を助ける爲にも、進歩を助ける爲にも、歌をお作りなさいと私はお勸めします。

歌を作ればその爲に勉强が出來ないといふあなたの先輩の言葉は、歌といふものの何ういふものであるかを誤解してゐるのか、それでなければ歌といふものを作つた事が無い爲に言はれた言葉だと思ひます。

歌は緊張した心持を持つてゐないと作れないものです。それに歌といふものはこれを作るに時間を要するものではありません。細工物をするやうに、手間さへかければいい物が出來るといふ性質のものではありません。私の經驗から言ふと明日は試驗だ、何うでもこれだけの下調だけはしなくてはならないと思ひ詰めてゐる時に、ぽつりぽつり幾らでもこぼれ出して來て、今日は暇だから歌でも作らうなんて時には、却つて一つも出來ず、出來てもろくなものではないといふのが通例でした。で、その經驗から言ふと、あなたの先輩の言葉は、腕力つてものは出さなくてしまつて置くと、それが幾らでも體のなかへたまつて來るものだといふやうに、生きた人間の精神の働きを、物質的にばかり解釋した誤つた解釋です。

歌は感傷的なもので、それに親しんでゐると中毒して、遊蕩兒にでもなつてしまふやうな意

見は、明らかに今の歌といふものを知られないからです。それは人間は、もともと感傷的なものです。その感傷のあらはれとしての歌も無論あります。しかし、安價な感傷を現はした歌などは作つてゐたくはないと思つて努力してゐるのが今の歌です。言ひ換へるとそんな安價な心境は、一日も早く解脱したい、そして解脱し得た心境の歌を作りたいと思つてゐるのが、歌を作つてゐるものの願ひです。歌は向上の緣とはなりますが、墮落の緣とはなりません。まして人を遊蕩兒に導くなどとは以つての外で、いい歌を作りつつも遊蕩兒になる位の人は、作らなければ一層早く、一層ひどい遊蕩兒になりませう。それは歌を作るのは、自らをよりよく知らしめる事ですから。

要求をお信じなさい。尊い機緣を逃がさないやうになさいまし。安んじて歌をお作りなさい、とお勸めします。

二　作歌の上の自信がもてないが、何うすればもてるか

お勸めにしたがつて、私も歌を作つて見ようと決心しまして、早速歌を作つて見ました。實際を打ち明けますと、もう三十首ばかり作りました。

さうしますと私は、急に歌に就いてのさまざまな疑問が起つて來ました。そしてその一つさへも解釋が出來ないのです。

これは是非ともあなたに願つて、解釋していただかなければならないと思ひます。

ありやうを申し上げないと、御解釋下さる譯にまゐるまいと思ひますから、せいぜい委しく申します。

私は前便では、歌といふものは少しも知らないやうに申しましたが、何に致せ、これ位歌好きの國民のなかに生まれた一人です、まるまる知らずにゐる筈はありません。それに小學校にはひると第一に教へられる「君が代」の國歌をはじめといたしまして、國語の教科書のなかには、幾らも短歌が載つてゐます、いやおうなしに教へられて覺えてしまひませう、それに又、この頃の新聞でも雜誌でも大抵のものは歌を載せてゐます。如何に私でも、歌とは何ういふものだといふ位の事は、一と通りは覺えずにはゐられませんでした。

さうです、かう思つてゐました。歌は形式からいふと三十一音だ、五七五七七の五句の連續だ。內容からいふと、その人の思つた事を言つただけだ。至極單純なもので、これ位

な事は自分にだつて結構言へると、――大分思ひあがつた言ひ草のやうですが、實際さう思つてゐました。

ですが、自分で作つて見るのは初めてです。私はこはごはながら、そつと指ををつて字數を數へながら、取つて置きの材料を歌にして見ました。

何でもない、らくなものだと思つて、第一首目の作れた時は、それは大得意でした。調子もなかなかうまいと私はうぬぼれました。調子つてものは、あれは自然のみこめます。私だつて百人首の歌ならみんな知つてゐます、調子はもう口へ附いてゐます。あの調子でと思つて、せいぜい眞似をしました。材料は、いつか修學旅行で行つた日光の景色で、あの中禪寺湖から戰場が原へかけての風景は、忘れようと思つたつて忘れられはしません。それから又、私の生活しました所で、身にしみて忘れられずにゐることの、ちつとやそつとはあらうといふものです。內容だつて惡くはない、なかなか隅へは置けないなんて、本當にないないは大得意なものでした。

しかし、この得意は、長くは續きませんでした。作つてしまつた瞬間は得意なものでしたが、一日たち、二日たちして讀み返して見ますと、我ながらまづい、それはがつかりす

る程まづいのです。

それは何うせ初からうまいものの出來る筈はない、と私は一應は自身を慰めて見ましたが、失望はそれだけでは止まりませんでした。最後に私は、こんな物が何時かは「もの」になる時があるだらうか。歌を作らうなぞと思つたのは私のうぬぼれで、私にはそんな才はないのではないか。何うせ駄目な位なら、今のうちによしてしまつた方がいい。善い事にも惡い事にも、これではてんでいやになつてしまつて作り續けて行く勇氣がない。――私はたうとうそんな事まで思つてしまひました。

一と口に申しますと、私は自信が附かないのです。すつかり悲觀してしまひました。

こんな事を申すには、何よりもその作つたといふ歌を御覽に入れるのが當然ですが、それは暫く御免を蒙ります、勇氣が出ませんから。それに、御覽に入れなくとも、私が最初の試みとして、指ををつて字數を數へつつ作つた歌が、大凡そ何れ位の程度のものだといふ事はお察しが附くだらうと思ひますから。

疑問はいろいろありますが、この自信の持てないといふのが何より第一問題です。これが何うにかならない以上は、疑問も何もあつたものではありません。

ばつとした言ひ分ですが、お汲み取りの上、御返事を願ひます。　A　より

お手紙の趣はほぼ分りました。肝腎のそのお歌を見ないので、本當にまづいのか、まづいとしても何れ位の程度までまづいのか、その邊が分りませんから、微細な點は申し上げられませんが、とにかく、あなたのお心持が、大凡そ何ういふ範圍のものだかといふ事は分りました。相應な自信を持つて歌を作つて見たところが、すつかりその自信をなくしてしまつた。如何に今はまづくても、ゆくゆくは上手になり得るといふ自信が持てないと、歌を作り續ける勇氣も出て來ない、と言ふのでせう。そして何うすれば自信が持てるか、自信の持てる方法があるかとかう御相談になつたのでせう。そうした經驗はあなたばかりのものではありません、誰でもします、人の事はとにかく、現にかうして御相談をうけて、間違つてゐるにもせよ自分の心持を申し上げようとしてゐる私自身が、その同じ經驗をして、相應に惱んで來てをります。

自信を持つても善いか惡いか。そんな事は元來は相談にもならない事で、隨つて御返事のしようもない事ですが、それが事實であつて見れば爲方のない事ですし、それに又最も苦しい事實である事も分つてゐますから、私も下手な理窟などは申さず、如何にして私自身が、その同

じ苦しみから脱れ出たかといふ事を申し上げる事にいたしませう。それが私として出來る事の全部です。

一と口に申しますと、己惚れは相應に強いが、氣は相應に弱い私は、一も二もなく自己を肯定する事によつて、その苦しさから脱れて來ました。私はさうするより外は方法を知らなかつたのです。そして、そのあまい方法によつても、その苦しさから脱れ出すには、相應に時間を要しました。ありやうを告白しますと、私は現在でも、あなたと同じ苦しみを苦しんでゐます。しかし、あなたのやうに失望し切つてしまはうとは致しません。そこがあなたと私との相違です。そして又、私があなたに申し上げ得ることも、その相違、その距離に過ぎません。

歌ばかりでなく、何事に限らず、見てゐるのと爲てみるのとは大變な相違です。ちよつとした指さきの細工物でも、ただ見てゐると何でもなく思はれますが、自分で手を出して爲て見ると、今更のやうにその面倒なのに驚くのは、誰しも經驗してゐる事です。型のきまつてゐる、その通りにしさへすればいい物でさへさうです。如何に歌が單純なものであつても、とにかく精神的のことです、その人の全體を打ち込まなければ出來ない事です。思つたより面倒だつた位の事は、當然な事ではありませんか。

それに又、最初の要求が大きければ大きい程失望も大きい譯です。あなたが作をしながら感じたといふその滿足の續き通しでなく、背負投げを食はされたやうに失望したといふのが、私にはずつと意味深く感じられます。

そこで問題は、失望しきつたままで止むべきか、又は、その失望を追ひのけて今一度新規に進み直すべきかといふ、二つに一つです。

私は今はかう思つてゐます、——

如何なる人でも、その人には、他の者は企て及ぶことの出來ない色合ひを持つてゐる、光を持つてゐる。言ひかへると特色ある生命を持つてゐる、と信じてゐます。

これは、それであつていい筈だ、それが當然だと思つてゐます。長い、計算もしきれない程の長い間を、傳へられ傳へられして來た一つの生命の流れの上へ生まれ出て來た我々ですから、遺傳としての相違もある筈です。又その人としても、その特色のある生命が、更に他とは異つた閲歴を經て來てゐるのですから、特色は益々濃くなつて來てゐる筈です。

しかし多くの人は、その特色が何であるかといふ事を意識せずにゐます。意識しようとしないのではない、意識する機會がないのです。まことに、さうした機會は得難いものです。それ

はその人が、全心を傾けて何事をか爲つづけてゐる間に、知らず識らずのうちに自身の全體がそこへ流れ出して來て、そして一種の特色を持つてゐる自身であるのに、我ながら驚くと言つたやうなものです。

さういふ機會の來るまで、この生命の特色は、その人のうちに眠つてゐる狀態でゐます。或は潛んでゐる狀態でゐます。言ひかへると種子として蒔かれたままでゐます。

そして、それでは何時その種子は芽となつて外へあらはれるか、眠つてゐるものは覺め、潛んでゐるものは現はれて來るかといふと、ただ成り行きに任せてゐただけでは、さういふ日がありません、生涯なくしてしまひます。

それならば、何うすればさうした機會が捉へられるかと言ふと、我々の力で出來る方法は、自身の一番好きな事を、腹一杯にしてみるといふ事です。他から加はつて來た力によつてさういふ機會の來ることもありませうが、それは當てにならない事で、我々自身に出來る方法と言へば、何よりもこの、一番好きな事を腹一杯にするといふ事です。

お互の持つてゐる生命の芽を伸して見たいではありませんか、生命の特色を發揮させて、それを自身の眼にはつきりと映じさせて見たいではありませんか。これが人生の歡び、人生の意

味でせう。それを除いては、外にさうたいした物があらうとは思はれないではありませんか。

實際、何が一番の善行だと云へば、自身の持つてゐる限りの力をそこにあらはして、そして自身の値を高めて行く事です。何が一番の悪行だと言へば、この尊い自身の生命の芽を、臆病のために怠惰のために、伸ばさずに終るといふ事です。

歌を作る事が、必ずしもさうした機會を捉へる所以だと申すのではありません。しかしあなたが歌が好きで、歌を作つて見ようと思ひ立つたとしたならば、少くともそのうちに、さうした機會を捉へ得られる可能性があると思はなければなりません。あなたに取つては確かにさうです。

勇氣をお出しなさい。善いものが出來るか出來ないかなぞといふ事は、さう慌てて考へる必要のない事です。今の場合は、將來いい物にしようと思つて勇氣を出して爲つづけて行くといふだけで澤山です。

それから又、上に申した事の續きとして、私はかう信じてゐます。

如何なる物も、それがよくなつて行くべき素質を持つてゐる、可能を持つてゐる、今善くない物に見えるのは、それがまだ幼稚な狀態にゐるからだと。

幼稚なものは發達させて行くべきです。發達をして特色のあざやかなものにするべきです。それは、勇氣に加へるに努力です。

我々は、現在の自身がよい境涯に達してゐないからと言つて自殺しようとはしないではありませんか。否、さう思へばこそ奮發して勉強をしてゐるではありませんか。自身の生命に對してさうであつたならば、自身の生命に繫つてゐる歌に對しても、生命のあらはれである歌に對しても、同樣な愛着を持つてやるといふのが本當ではありませんか。

かへすがへすも、これは出來ない事だと諦めるのは、それも出來ない事、あれも出來ない事となつて行く心持です。臆病な、怠惰な心持です。

信じられなくても、無理にも自身をお信じなさい。信じられる日が、案外早く來るかも知れません。

三　作らうと思ひつゝ歌が作れないが、何ういふ譯か。

何うすれば作れるか

私はこの夏は、信州から越後へかけての溫泉めぐりをしました。信州では澁の溫泉へ、

越後では赤倉の溫泉へまゐりました。旅は結句ひとりの方が自由が利いていいと存じまして、態とひとり出懸けたのでしたが、さてひとり旅となると、ふだん餘り東京を離れた事のない身には、年甲斐もなく寂しさを感じまして、東京へ歸つた時には本當にほつといたしました。

歌を作つてみようと思ひながら、日頃は忙しさにばかり追はれて思ふやうにも出來ませんでしたが、こんな時にこそと思ひまして、手帳と鉛筆とは側を離さずに置きました。湯にはいつてゐる時も、ぼんやりと宿屋の二階にゐて、赤倉に續いた寂しい野を越えて、遠く、夢のやうな日本海を眺めてゐました時も、澁で、音に聞えてゐる日本アルプスの連峯を望んでゐました時も、いいな、ここを一つとしきりにそそられるのですが、何ういふものか少しも歌として摑まつて來ないのです。本當にぢれつたい程つかまりませんでした。

東京を出懸けます時に、新しい歌集の二三冊を持つて行きました。退屈な汽車のなかでも、宿屋でも、その本で何れ位ゐ慰められたか分りません。ところが、その歌集のお歌と私のとを較べますと、歌集のお歌はそれはらくに、やすやすと何でも捉へてゐます。何でもないと思はれる事までも捉へて、一と通りの面白みのあるものとしてゐます。

ここが違ふところだとも思ひましたが、しかし何うすればかういふ風につかまるのだらう、何うかいふ秘傳でもあるのか知ら、秘傳なんてものは無いにしたところが、何うかいふ心得方があるのだらう、と思ひました。

現在、いい景色や、寂しさが胸のなかに有り餘つてゐながら、それが歌として摑まらないといふのは何ういふ譯でせう。摑まへる上の心得ともいふべきものがあるならば、お洩らしを願ひます。

B　よ　り

お手紙の御主旨はよく分りました。あなたに對して講義めかしいことを申し上げるのは恐縮の感がありますが、せつかくのお尋ねですから、敢へて申し上げる事にいたします。

歌をお作りにならうとするお心持がありながら、しかも、歌はうとする材料を眼の前に御覽になりながらお歌がお出來にならないと致しますと、そこに、何か無理があると思ふより外はありません。何か邪魔がある、丁度、水を噴き出さうとしてゐる泉の上に、石でも置かれてゐるやうな工合に邪魔物がある、それで、その邪魔物を取りのけさへしますれば、流れ出ようとしてゐる水の流れ出るやうに、お歌も自由にお作りになれると思ふより外はありません。

邪魔物とは何でせうか。泉の口を塞いでゐる石のやうな物は一體何でせうか。

邪魔物が何かと申すことを考へる前に、更に一歩引き退いて、歌とは何ういふものか、いい歌として傳へられてゐるものは、何ういふものか何ういふ心持から作られたものかと申すことを、今一度御省察になる事を希望致します。

――實は、それ程までに申さずともといふ氣も致しますが、かういふお手紙をお寄せになり、又それに對して思ふ事を申すといふこともたやすくは得難い機會と存じますから、思ひ切つてくどい物言ひをさせていただきます。

「世のなかにある人、事業繁(ことはぎ)きものなれば、心に思ふ事を見るもの聞くものにつけて言ひいだせるなり。」

これは「古今和歌集」の序の一節で、紀貫之の序に下した定義です。簡單な、要領を得た、いい定義だと思つてをります。

「世にある人、事業繁きものなれば」といふ言葉を私は、私共の生命は、まことに要求の多いものである。貪慾だと思ふ程に要求の多いものだ、そして、要求が起る以上、その要求を事實にしようと追求しずにはゐられないものだと解さうと思ひます。實際生命とは申しますものの、その生命が要求と一緒になつて活動してゐる姿だけが私共には捉へられるだけで、それを外に

しては、これが生命だと掌に載せて見せるやうな事は出來ません。

要求の起る時は喜びですが、その結果は多くの場合は悲しみとなります。その悲しみが繰り返されては重い心ともなります。最後には、慘として天地に俯仰するといふやうな心持にもされ、名附け難い重い動かない心持ともされます。「心に思ふ事を」といふのはこの境涯を指して言ふのでせう。そして、この境涯を言ひ現はしたのが卽ち「歌」であるといふのです。

ここまでは、當り前だと言へば言へます。しかし貫之はそれだけでは終つてはゐません。續いて「見るもの聞くものにつけて言ひいだせるなり」と申してゐます。この一句はまことに肝要なもので、親しく作歌をした人の言葉だと思つて頷けます。

それは、要求を追つての我々の生活の上から來る感傷をあらはすのが歌であるが、しかしそれを現はすには、我々を取り繞らしてゐる外界のものを材料としてそれを使つて現はすのだ、とかういふ心持だらうと思ひます。

これをもつと手つ取り早く、現代的の言葉で現はすとしますと、歌は主觀を現はしたものである。しかし主觀その物は單にそれだけでは現はしやうのないものである。強ひて現はさうとしたならば、現はせないこともなからうが、しかし主觀その物、卽ち主觀をそつくりに現はし

て、主觀のありのままを他に感じさせるといふ事は、極めて困難な事である。何故と申しますに、或る瞬間の、私共の高潮させられた主觀は、うれしいとか、悲しいとかいふものに過ぎない。さて、それを現はすとして、何うしたらばよいのでせう。うれしい、悲しいといふ事が、例へば、赤とか黑とかいふやうなものであつたならば、それを言ひさへすれば現はせるのですが、實際は、捉へては言へない、色だけの形さへもないものです。それに又、その瞬間は、その瞬間だけに限られた、或る程度を持つたもので、それから又、それは生きて動いてゐる氣分で、次ぎの瞬間には逃げて消えて行つてしまふべきものです。全く、これは何うしたならば言ひ現はせるのでせう。

一番主觀に直接な言ひ現はし方は、うれしかつたならば、それをそのままに、「うれしい」と言ふ事です。ですが、言ふ人も、さう言つたからとてそのうれしさが現はせたとは思へないでせう。それで、も一度繰り返して「うれしい」と言つて見るでせう。それでもやはりあき足りない。何遍繰り返して見てもあき足りないが、しかしさういふより外爲方がないので、やはりそれを繰り返しませう。

飜つて聞く方は何うかと思ひますと、唯「うれしい」と言はれただけでは、うれしいといふ

言葉の含んでゐる概念を想像して見るだけで、何のやうにうれしいのか殆ど見當も附きません。「うれしい、うれしい」と繰り返されて見た所で、多分非常にうれしいのだらうと想像するだけで、見當の附かない上では少しもちがひがありません。

歌は主觀には相違ありませんが、その主觀をあらはすといふ事は、正直にまつすぐに言つたからとて現はれるものではありません。否、一番正直な方法は、その効果の上から見ますと、一番かけ離れた、言ひかへると一番不正直なものとなつてしまひます。

――甚だくどい申し方をするやうですが、これは往々にして思ひそくなひの起る事ですから、特に御注意を願つて置きたいと存じます。

貫之は、それでは駄目だと言ふ意味で、必須の條件として「見るもの聞くものにつけて」と申してゐるのです。即ち、うれしい心を現はすとして、その時私どもの外界にあるものを捉へて、それによつて現はせ、眼に見てゐるもの、聞いてゐる物をつかつてあらはせ、と申してをるのです。

かう申しますと一見、如何にも間接な、廻りくどい事のやうに見えます。それに相違もありません。しかしながら私共は、形によらなければ、はつきりと心を感じ合ふ事も出來ません、

卽ち五感を離れましては、何事を通じ合ふ事も出來ません。のみならずその五感も、聞くよりは見る方が强く、見るよりも觸つて見る方が强いので、言葉にも「百聞は一見に如かず」とも言つてあり、そしてその事實であることは毎々經驗させられてゐる事であります。それで何うでも私共は、形を通して、成るべくはつきりとした、感じの强い形を通して、その思つてゐる事を現はすより外はありません。

さて、言葉といたしますと、かうした小面倒な事となつてまゐりますが、實例で見ますと何でもありません。それは、形を、感覺に訴へる事を忘れてゐる歌なんてものは一首もありませんから。歌といへば、必ずもう形あるものを捉へた、大勢に覺えられてゐる歌ほど刺戟的なものを捉へたものなのですから。

ここで重ねて御注意を請はなければなりません。それは、私共はとかくに、見る眼に引かれやすいと申すことです。唯今も申しましたやうに、刺戟の强いものに出逢ひますと、とかくそれにごまかされやすい事で、同じ感覺でありながらも、耳から頭へはひるのよりも、眼から胸へはひる感じの方がずつと强い爲に「百聞は一見に如かず」なんていふ語も生まれて來た譯です。實際私どもは見る眼にごまかされやすいといふ弱點を持つてをります。

歌の場合がやはりそれです。歌とは何うして作つたものかと申しますと、くどくも申しましたやうに、自分の主觀を言ひ現はしたもので、主觀そのままでは言ひ現はす事も、他に傳へる事も出來ない爲に、止むを得ず形を借りたもので、これは歌一首を作つた人でもよく承知してゐる筈の事です。又昔からもさう言つて來てゐて、それが大抵の人には合點されてゐる筈です。ところが、實際の場合になりますと、この當り前な事を忘れてしまひまして、歌とは、そこに捉へて歌はれてゐる形が主であるかのやうな氣が致します。これはばつとした心持ではありますが、しかもそれが非常に强い感じで、大抵の人は、歌とは捉へられてゐる姿だ、形さへうまく捉へれば、それが直ちに歌になるのだといふやうに感じてをります。この誤解が——本當を言ひますと誤解とも言へない程の氣の迷ひが、何れ位ゐ歌を作つて行く上の邪魔となつてゐる事でせう。

かうは申しますものの、歌の本來から申しますと、心だ、姿だと申して差別を立てますと、それがもう間違ひになつてまゐります。すぐれた歌は、形かと思つて見ますと、單に形と申すだけの干からびたものではなく、それが直ちに心となつてをります。心かと思つて見ますと、かうだ、ああだと申すやうなそんな理窟めいたものではなく、ちやんと姿になつてをります。